

山梨県上野原市  
市内遺跡発掘調査報告書

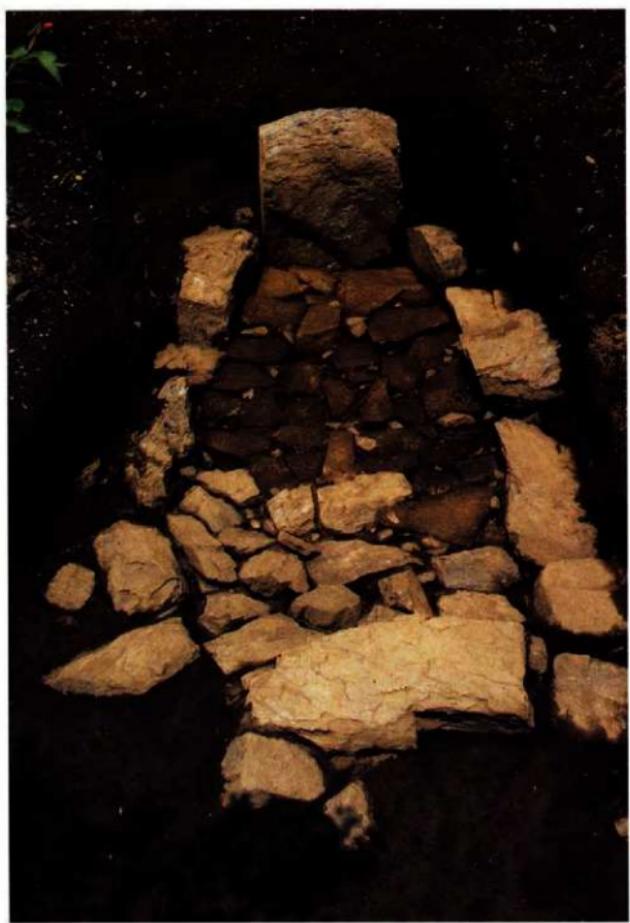
2006

上野原市教育委員会

山梨県上野原市  
市内遺跡発掘調査報告書

2006

上野原市教育委員会



西ノ原古墳石室全景



牧野遺跡出土の煉瓦焼成窯全景（南から）



窯中段（西から）



窯床面状況（南から）

## 序

上野原市は、平成17年2月に上野原町と秋山村が合併して誕生した新市であり、緑豊かな山々と清流に恵まれ、山梨県東の玄関口として大きな役割を担っています。上野原市には有形無形の文化財が数多く知られています。周知の埋蔵文化財包蔵地と呼ばれる遺跡の数は162ヶ所にのぼり、さらに未知の遺跡も推測されています。旧上野原町、及び上野原市教育委員会は、こうした遺跡の内容を把握するとともに遺跡保護と開発工事との調整を図るため、国・県から補助金を受けて試掘調査を実施してまいりました。

本書は、この調査結果をまとめた記録報告書です。の中には、縄文時代の集落跡から明治時代の煉瓦焼成窯に至るまで貴重な調査成果が収められており、先人たちが歩んでこられた数千年の歴史の一端を垣間見ることができます。幸いなことに、これら遺跡の一部は、関係者のご努力で現地に保存されることとなりました。

最後に、これまでの調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関並びに調査・整理作業に携われた多くの方々に厚くお礼を申し上げるとともに、今後とも埋蔵文化財保護に関し市民の皆様方のご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成18年3月

上野原市教育委員会  
教育長 綱野清治

## 例 言

1. 本書は、山梨県旧上野原町及び上野原市内で実施された埋蔵文化財に係る調査報告書である。
2. 調査は、文化庁・山梨県の補助金を受け、平成6年度～平成17年度まで実施された。
3. 調査は、平成16年度まで上野原町教育委員会が実施し、平成17年2月13日以降は町村合併によって誕生した上野原市教育委員会が実施した。調査組織は次頁に記した。
4. 本書の執筆・編集は社会教育課社会教育担当の小西直樹が行った。
5. 調査に当たり、地元区長を始めとする住民や地権者、関係事業者の方々からご協力をいただいた。
6. 調査から本書の作成までを通して、つぎの機関・諸氏のご指導・ご教示をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同、職名は調査時）  
山梨県教育委員会学術文化財課、山梨県埋蔵文化財センター、帝京大学山梨文化財研究所、坂本美夫、森原明廣（山梨県埋蔵文化財センター）、宮澤公雄・平野修（帝京大学山梨文化財研究所）、北村真一（山梨大学）、奈良泰史（山梨県都留市役所）、杉本正文・福田正人（山梨県大月市教育委員会）、室伏徹（山梨県勝沼町教育委員会）、国見徹（神奈川県大磯町教育委員会）、松崎元樹（東京都埋蔵文化財センター）、小野田滋（財団法人鉄道総合技術研究所）、田宮美弘（株式会社第三開発）、清野利明（東京都日野市教育委員会）、金子祐正（全国赤煉瓦協会）、中村三郎（陶芸家）
7. 本書に掲載した遺跡の調査成果は、これまでに各種の刊行物他において報告がなされてきたが、本書の内容と相違がある場合は本書をもって現時点での最終報告とする。
8. 本書にかかる出土品・記録図面等は、一括して上野原市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 本書に転載した地図はつぎのとおりである。  
遺跡位置図：国土地理院発行の5万分の1地形図  
調査地点図：昭和56年国土地理院の承認を得て調製した5千分の1地形図  
第58図：明治43年陸地測量部発行の5万分の1地形図（上野原）
2. 遺構・遺物図版
  - (1) 遺構の縮尺は図版スケールに明記した。
  - (2) 遺構図の「240m」といった数値は標高を示す。
  - (3) 遺物の縮尺は下記を基本とし、図版スケールに明記した。  
土器・石器・鉄製品 1/3。大型石器 1/6。小型石器 2/3。煉瓦 1/4。
3. 試掘溝の土層断面図は模式図である。
4. 表
  - (1) 石器の法量のうち、長さ・幅については実測図の縦・横で計測したが、横刃形石器・石匙のみ実測図の縦を幅、横を長さとして計測した。いずれも最大値を示している。
  - (2) 表中の法量で（ ）内の数値は残存値を示す。
  - (3) 色調の判別には「新版標準土色帖」（日本色彩研究所色票監修 1988）を利用した。

## 調査組織

調査主体		上野原町教育委員会 (～平成17年2月12日)				上野原市教育委員会	
事務局	教育長	遠藤 諦三(平成6年10月～10年10月) 水上 和男(10年10月～12年10月) 水越 健成(12年10月～17年2月)				教育長	網野 清治
	社会教育課長	久島 啓(7年4月～8年9月・11年4月～12年3月) 水越 長巳(8年10月～11年3月) 白井 和文(12年4月～16年3月) 酒井 信俊(16年4月～17年2月)				社会教育課長	小笠原徳喜
	係長	片伊木卓男(3年8月～8年9月) 高橋 武久(8年10月～12年3月)課長補佐 梅原 秀雄(12年4月～15年3月) 織田 隆義(15年4月～17年2月)				担当者	小西 直樹
	担当者	小西 直樹					
参加者	加藤 文宣	関口 和男	長田 貞夫	太葉田孝一	加藤 文宣	富田 寛	
	富田 寛	杉本 征男	会津 一	網野 広明	小俣 和男	富岡ます美	
	網野 君子	桑原 昭三	片伊木山香	大久保寛俊	古根村典子		
	大久保直人	水越 敏男	白鳥 晴一	大久保 実			
	白鳥 茂男	鷹取 民子	水越 悅子	石田 里枝			
	一宮 富子	小山田延章	白鳥 芳龟	加藤 正久			
	加藤 垣子	安藤 猛夫	和智 瑞江	上条 文子			
	船木 令子	会津 源	桑原 福寿	村島 敬一			
	中川 仁	武原 孝之	奈良 春雄	小俣 和男			
	志村 節子	宇津木咲子	里吉 昭子	篠地 文博			
	白井 茂美	河野 彰夫	樋藤みどり	高倉 礼子			
	湯川 光徳	水野 俊雄	網野 一	石井 延子			
	佐渡 順子	降矢 本正	中川 愛子	森山 一			
	富岡ます美	安藤 寿恵	富田 初江	志村 尚美			
	古根村典子	小俣 幸男	草間 正彦	安藤 宇平			
	出羽 和男						

(敬称略・順不同)

## 目 次

### 序　　例言　　凡例

第Ⅰ章 上野原市の埋蔵文化財 ..... 1

### 第Ⅱ章 遺跡調査

1 関山遺跡	4
2 野田尻Ⅰ遺跡	6
3 大野字上ノ久保地点	10
4 桐原字向山地点	12
5 田代遺跡	14
6 狐原Ⅰ遺跡	16
7 狐原Ⅱ遺跡	18
8 塚場古墳群	20
9 沢渡Ⅱ遺跡	22
10 桐坪遺跡	24
11 新井遺跡	26
12 原・郷原遺跡	30
13 牧野遺跡	34
14 横本山遺跡	56
15 黒ノ木遺跡	64
16 西ノ原古墳	66
17 山風呂遺跡	72
18 用竹神戸遺跡	74
19 中辭遺跡	76
20 大間々遺跡	78
21 東大野遺跡	82
22 裏大越路遺跡	84
23 寺畑遺跡	88
24 当月遺跡	94
25 萩野遺跡	102
26 上野原字大道地点	104
27 桐原字片太家地点	106
28 上野原字エビ沢地点	108
29 上野原字下新町地点	110
30 東区遺跡	112

## 挿図目次

第1図 上野原市の位置	1	第38図 新井遺跡出土遺物	29
第2図 調査地点分布図	3	第39図 原・鷺原遺跡位置図	30
第3図 関山遺跡位置図	4	第40図 同調査地点	30
第4図 同調査地点	4	第41図 同第1地点調査区平面図	31
第5図 同調査区平面・土層図	5	第42図 同第1地点調査区土層図	32
第6図 野田尻I遺跡位置図	6	第43図 同第2地点調査区平面・土層図、 出土遺物	33
第7図 同調査地点	6	第44図 牧野遺跡位置図	34
第8図 同調査区平面・土層図	7	第45図 同調査地点	34
第9図 同調査区土層図	8	第46図 同第1～2地点調査区平面・土層図	35
第10図 同出土遺物	9	第47図 同第3地点調査区平面・土層図、 出土遺物	37
第11図 大野字上ノ久保地点位置図	10	第48図 煉瓦窯全体図	39
第12図 同調査地点	10	第49図 煉瓦刻印	41
第13図 同調査区平面・土層図	11	第50図 煉瓦窯土層図	44
第14図 桐原字向山地点位置図	12	第51図 煉瓦窯平面・断面図(1)	45
第15図 同調査地点	12	第52図 煉瓦窯平面・断面図(2)	47
第16図 同調査区平面・土層図	13	第53図 煉瓦窯土層図	49
第17図 田代遺跡位置図	14	第54図 煉瓦実測図(1)	52
第18図 同調査地点	14	第55図 煉瓦実測図(2)	53
第19図 同調査区平面・土層図	15	第56図 煉瓦実測図(3)・鉄製品	54
第20図 狐原I遺跡位置図	16	第57図 煉瓦の形状と種類	55
第21図 同調査地点	16	第58図 中央線沿線図	55
第22図 同調査区平面・土層図	17	第59図 根本山遺跡位置図	56
第23図 狐原II遺跡位置図	18	第60図 同調査地点	56
第24図 同調査地点	18	第61図 同第1地点調査区平面・土層図	57
第25図 同調査区平面・土層図	19	第62図 同第1地点遺構平面・土層断面図	59
第26図 塚場古墳群位置図	20	第63図 同第1地点出土遺物	61
第27図 同調査地点	20	第64図 同第2～4地点調査区平面・土層図、 出土遺物	63
第28図 同調査区平面・土層図	21	第65図 黒ノ木遺跡位置図	64
第29図 沢渡II遺跡位置図	22	第66図 同調査地点	64
第30図 同調査地点	22	第67図 同調査区平面・土層図	65
第31図 同調査区平面・土層図	23	第68図 西ノ原古墳位置図	66
第32図 桐坪遺跡位置図	24	第69図 同調査地点	66
第33図 同調査地点	24	第70図 同調査区平面図・出土遺物	67
第34図 同調査区平面・土層図	25	第71図 西ノ原古墳平面・断面図	70
第35図 新井遺跡位置図	26		
第36図 同調査地点	26		
第37図 同調査区平面・土層図	27		

第72図	西ノ原占墳展開図	71	第111図	上野原字大道地点位置図	104
第73図	山風呂道路位置図	72	第112図	同調査地点	104
第74図	同調査地点	72	第113図	同調査区平面・土層図	105
第75図	山風呂遺跡調査区平面・土層図	73	第114図	柄原字井太家地点位置図	106
第76図	用竹神戸遺跡位置図	74	第115図	同調査地点	106
第77図	同調査地点	74	第116図	同調査区平面・土層図	107
第78図	同調査区平面・土層図	75	第117図	上野原字エビ沢地点位置図	108
第79図	中群遺跡位置図	76	第118図	同調査地点	108
第80図	同調査地点	76	第119図	同調査区平面・土層図	109
第81図	同調査区平面・土層図	77	第120図	上野原字下新町地点位置図	110
第82図	大間々遺跡位置図	78	第121図	同調査地点	110
第83図	同調査地点	78	第122図	同調査区平面・土層図、出土遺物	111
第84図	同調査区平面図	79	第123図	東区遺跡位置図	112
第85図	同調査区上層図	80	第124図	同調査地点	112
第86図	同出土遺物	81	第125図	同調査区平面・土層図	113
第87図	東人野遺跡位置図	82			
第88図	同調査地点	82			
第89図	同調査区平面・土層図、出土遺物	83			
第90図	対人越路遺跡位置図	84			
第91図	同調査地点	84			
第92図	同調査区平面図	85			
第93図	同調査区土層図、倒木痕土層図	86			
第94図	同遺構平面・土層断面図、出土遺物	87			
第95図	寺畠遺跡位置図	88			
第96図	同調査地点	88			
第97図	同調査区平面・土層図	89			
第98図	同遺構平面・土層断面図	90			
第99図	同出土上器	92			
第100図	同出土石器	93			
第101図	当月遺跡位置図	94			
第102図	同調査地点	94			
第103図	同調査区平面・土層図	95			
第104図	同遺構平面・土層断面図	98			
第105図	同出土遺物(1)	99			
第106図	同出土遺物(2)	100			
第107図	同出土遺物(3)	101			
第108図	荻野遺跡位置図	102			
第109図	同調査地点	102			
第110図	同調査区平面・土層図	103			

## 表目次

第1表	埋蔵文化財調査一覧	2
第2表	野田尻1遺跡出土遺物集計表	8
第3表	新井遺跡出土遺物集計表	28
第4表	原・郷原遺跡・第1地点出土遺物 集計表	32
第5表	牧野遺跡・第3地点出土遺物集計表	36
第6表	焼瓦觀察表	51
第7表	根本山遺跡・第1地点出土遺物集計表	60
第8表	大間々遺跡出土遺物集計表	81
第9表	寺畠遺跡出土遺物集計表	89
第10表	同出土石器一覧表	91
第11表	当月遺跡出土遺物集計表	96
第12表	同出土石器一覧表	97

## 第Ⅰ章 上野原市の埋蔵文化財

### 第1節 上野原市の位置と遺跡

上野原市は山梨県東端の県境に位置し、平成17年に上野原町と秋山村が合併して誕生した新市である。

市域は関東山地や丹沢山塊に囲まれ、面積の約8割が山林で占められる。市の中央部を桂川（相模川）が流れ、支流の鶴川・秋山川の沿岸に狹小な河岸段丘地形が点在する。桂川と鶴川の合流地点に市内最大の段丘面があり、国道20号（旧甲州街道）を中心市街地化されている。

市の東側が東京都檜原村や神奈川県津久井郡に接する地理的要因から、古来より関東地方との関係が強い。近世には江戸・甲府・信州を結ぶ甲州街道の宿場が4宿置かれ、桂川の水運とともに東西交通の要衝地として栄えた。

市内の遺跡は河川沿いの段丘面や緩斜面地に多く分布しており、現在までに162ヶ所が確認されている。遺跡の時期は縄文時代が最も多く、弥生時代は極めて少ないが、統く古墳～奈良・平安時代にかけて多く見られる。中世の城館や跡跡も比較的多く分布している。



第1図 上野原市の位置

### 第2節 調査状況

上野原市は首都60km圏内に位置し、JR中央線や国道20号・中央自動車道などの交通網が発達している。こうした交通の利便性による民間開発に加え、生活環境や農林業の基盤整備など種々の要因によって開発工事の件数が多い。遺跡調査の大半は、このような工事の事前調査として実施されている。

旧上野原町においては、平成6年度以降、国・県費の補助による遺跡試掘調査を実施し、遺跡の状況を早期に把握することで開発工事との調整を図った。また、1,000m<sup>2</sup>を越える大規模開発については、工事予定地における遺跡の有無や範囲を把握するための試掘調査を実施し、遺跡の取扱いに万全を期した。こうしたシステムは新市に引き継がれている。

上野原市の遺跡台帳は、過去の分布調査（旧上野原町域は昭和47年実施、旧秋山村域は平成3年実施）をもとに作られ随時更新されている。旧秋山村域の場合、平成3年度の村誌編纂事業に伴う遺跡分布調査で、遺跡数が従来知られていた数の2倍を越え、39遺跡の存在が明らかになっている。市内全域においては、いまだ知られていない遺跡が相当数あるものと考えられることから、試掘を含めた遺跡の確認調査を今後も積極的に推進する必要がある。

番号	遺跡名・地点名	所在地	原因	調査期間	調査内容	調査後の取扱い
1	関山遺跡・第1地点	上野原字関山823-4	個人事業所建設	6.9.1~2	試掘	工事実施
	関山遺跡・第2地点	上野原字関山823-5	個人住宅建設	8.8.28	試掘	工事実施
2	野田尻I遺跡	野田尻字背戸378他	個人住宅建設	6.9.19~10.1	試掘	本調査(記録保存)
3	大野字上ノ久保地点	大野字上ノ久保6053他	埋立地	8.3.26	試掘	工事実施
4	桐原字向山地点	桐原字向山13893他	県立自然の里建設	8.7.29~8.1	試掘	工事実施
5	川代遺跡・第1地点	鶴島字田代3034	個人住宅建設	8.11.21~22	試掘	工事実施
	田代遺跡・第2地点	鶴島字田代3107-1他	給水用配水池建設	16.11.16	試掘	工事実施
6	鰐原I遺跡	新田69-5	携帯電話基地局	17.12.12	試掘	工事実施
7	鰐原II遺跡	新田22-1他	町道建設	8.12.4~6.9.1.28	試掘	本調査(記録保存)
8	塚場古墳群	上野原字塚場1002	集合住宅建設	8.12.9	試掘	工事実施
9	沢渡II遺跡	桐原字沢渡10737他	県道改良	9.5.6~7	試掘	工事実施
10	桐坪遺跡	桐原字桐坪6116他	農道改良	9.9.1~2	試掘	工事実施
11	新井遺跡	上野原字新井4511他	宅地造成	9.9.18~22	試掘	現地保存
12	原・郷原遺跡・第1地点	西原4666他	農道改良	9.10.6~13	試掘	本調査(記録保存)
	原・郷原遺跡・第2地点	西原字向井4399-1他	携帯電話基地局	11.2.24~25	試掘	工事実施
13	牧野遺跡・第1地点	四方津字ノジノジ795	個人住宅建設	10.9.8	試掘	工事実施
	牧野遺跡・第2地点	四方津字牧野道下424-2他	大型店舗建設	11.2.22	試掘	工事実施
	牧野遺跡・第3地点	四方津字牧野道下407他	大型店舗建設	12.11.2~12.15	試掘	現地保存のうえ工事
14	根木山遺跡・第1地点	上野原字新町1364-1他	分譲宅地造成	10.10.2~11.13	試掘	現地保存のうえ工事
	根木山遺跡・第2地点	上野原字新町1391他	道路建設	11.6.29, 7.1	試掘	工事実施
15	根木山遺跡・第3地点	上野原字新町1334-2他	分譲宅地造成	13.11.26	試掘	工事実施
	根木山遺跡・第4地点	上野原字新町1435-1他	個人住宅建設	14.5.13	試掘	工事実施
16	黒ノ木遺跡	鶴島字黒ノ木3283-12	会社保養所建設	10.12.24	試掘	工事実施
17	西ノ原古墳・第1地点	大野字西ノ原5372	不時発見	11.4.26~6.22	現況確認	現地保存(史跡指定)
	西ノ原古墳・第2地点	大野字西ノ原5404	分布調査	12.2.21~28	試掘	現地保存
18	山風呂遺跡	上野原字山風呂原5354-1他	住宅敷付け道路建設	11.7.28	試掘	工事実施
19	用竹神戸遺跡	桐原2367-9	役場支所建設	12.3.9	試掘	工事実施
20	中谷遺跡	西原1159他	林道改良	12.9.6	試掘	工事実施
21	大間々遺跡	上野原字大間々3832-1他	新町会等建設	12.10.30~11.6	試掘	本調査(記録保存)
22	東大野遺跡	大野字熊野前1341-1	集会所建設	13.12.17	試掘	工事実施
23	裏大池路遺跡	上野原字裏大池路7806他	老人介護施設建設	15.3.3~6	試掘	工事実施
24	寺畠遺跡	上野原字寺畠4014-7他	分譲宅地造成	15.9.16~18	試掘	現地保存のうえ工事
25	当月遺跡	四方津字当月979-1他	店舗建設	15.9.29~10.1	試掘	現地保存のうえ工事
26	萩野遺跡	大野字下ノ原5422他	給水用減圧槽建設	15.12.8	試掘	工事実施
27	上野原字大道地点	上野原字大道2391-1	分譲宅地造成	15.12.15	試掘	工事実施
28	桐原字井太家地点	桐原字井太家3966他	県道改良	16.6.16	試掘	工事実施
29	上野原字エビ沢地点	上野原字エビ沢360他	分譲宅地造成	16.9.22	試掘	工事実施
30	東区遺跡	上野原字下新町地点	分譲宅地造成	17.8.18	試掘	工事実施
		鶴島字反保1855-3	個人住宅建設	17.9.2	試掘	工事実施

第1表 埋蔵文化財調査一覧



第2図 調査地点分布図

# 1 関山遺跡

関山遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置する。昭和62年の発掘調査で、縄文時代早期の集石1基、及び中期後葉の竪穴住居址1軒、配石1基などが検出された他<sup>(1)</sup>、時期不明の土坑や小穴列が数基検出されている<sup>(2)</sup>。今回報告する調査地点は2ヶ所で、いずれも遺跡北側の畑地に位置する。

[1]山梨県埋蔵文化財センター調査報告第36集『関山遺跡Ⅰ』山梨県教育委員会1988。[2]上野原町埋蔵文化財調査報告書第2集『川合遺跡・関山遺跡』上野原町教育委員会1989



第3図 遺跡位置

## 第1地点

調査目的 個人事務所建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字関山823-4

調査期間 平成6年9月1日・2日

調査面積 8m<sup>2</sup> (対象面積146m<sup>2</sup>)

## 概要

建設予定地に2m四方の試掘坑を2ヶ所設定し、深さ1.2mのローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

## 第2地点

調査目的 個人住宅建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字関山823-5

調査期間 平成8年8月28日

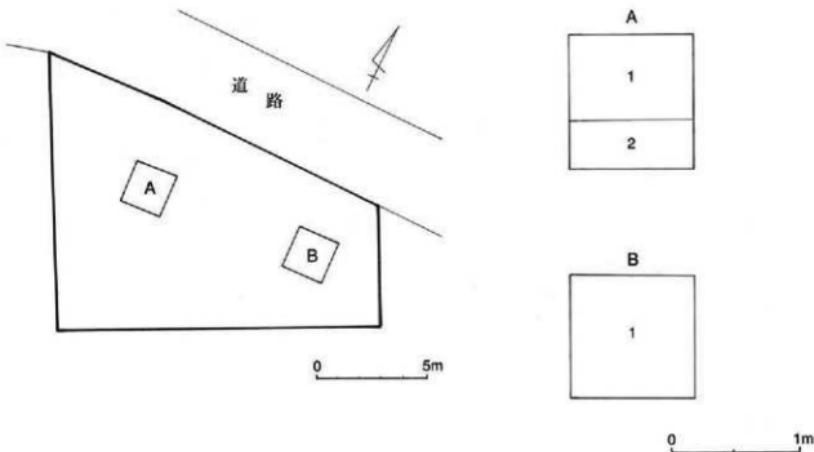
調査面積 8m<sup>2</sup> (対象面積375m<sup>2</sup>)

## 概要

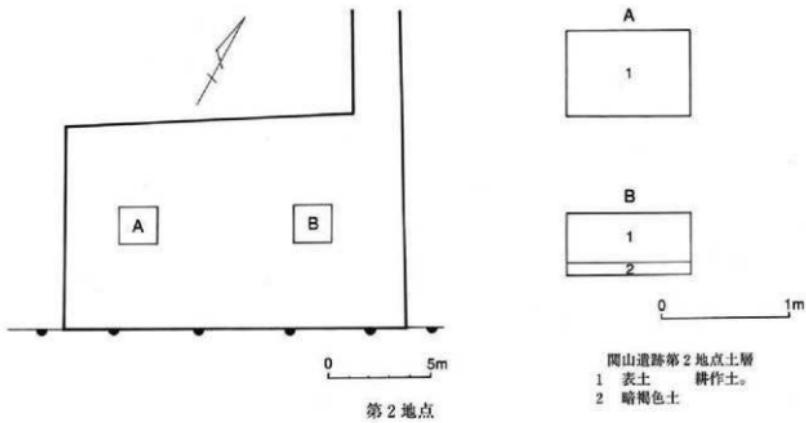
建設予定地に2m四方の試掘坑を2ヶ所設定し、深さ0.7mのローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第4図 調査地点



関山遺跡第1地点土層  
 1 表土 客土。ローム塊を多く含む。  
 2 暗褐色土 粘性・締まり弱い。



関山遺跡第2地点土層  
 1 表土 耕作土。  
 2 暗褐色土

第5図 調査区平面・土層図

## 2 のたじりいち 野田尻 I 遺跡

調査目的 個人住宅建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市野田尻字背戸378他

調査期間 平成6年9月19日～10月1日

調査面積 48m<sup>2</sup>（対象面積1,570m<sup>2</sup>）

### 概要

野田尻 I 遺跡は仲間川南岸の河岸段丘面に位置し、縄文・弥生・平安時代の遺物散布地である。調査地点は遺跡西側の畑地に位置する。建設予定地に2m四方の試掘坑を12ヶ所設定し、最深1.2mのローム面まで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、基本層序は表土・黒褐色

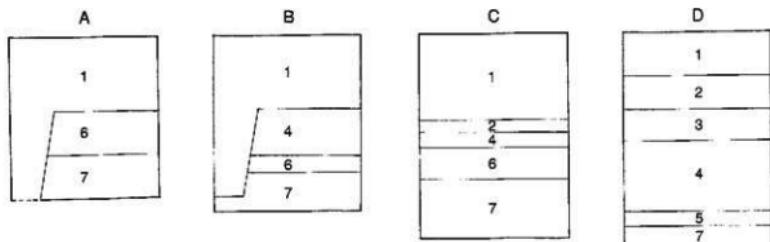
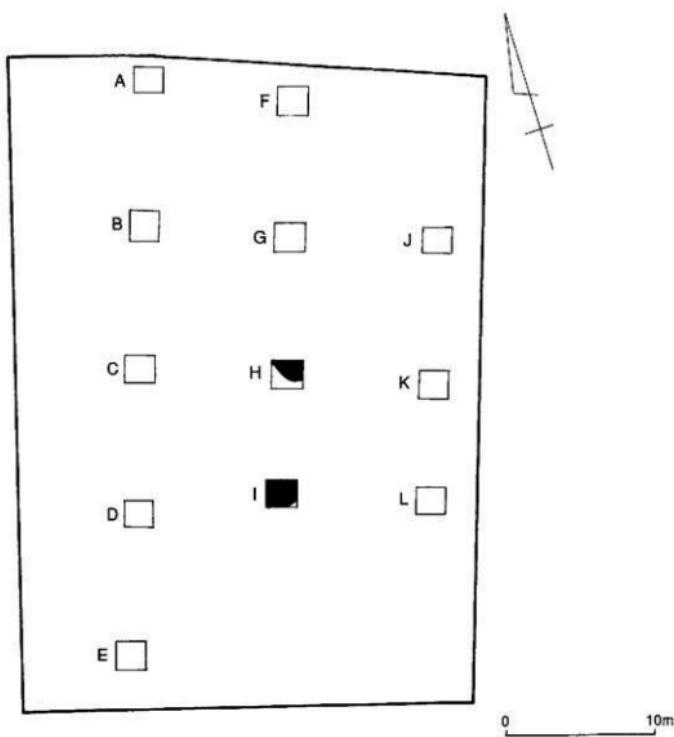
土・暗褐色土・ローム層であった。遺構は縄文時代の堅穴住居址2軒が暗褐色土中で確認された。遺物は遺構を中心に多数の縄文土器・石器が出土した。このため、翌平成7年度に発掘調査を実施した（上野原町埋蔵文化財調査報告書第7集『野田尻 I 遺跡』上野原町教育委員会1998）。



第6図 遺跡位置

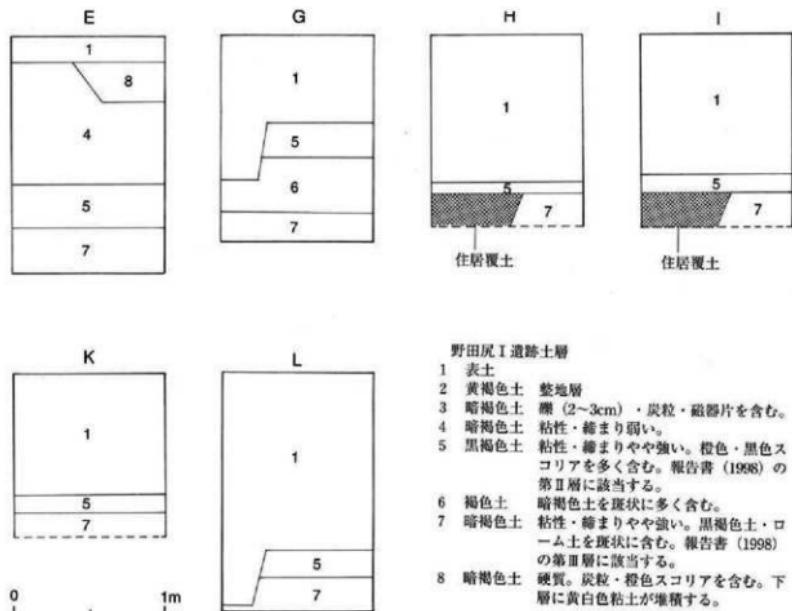


第7図 調査地点



0 1m

第8図 調査区平面・土層図



第9図 調査区土層図

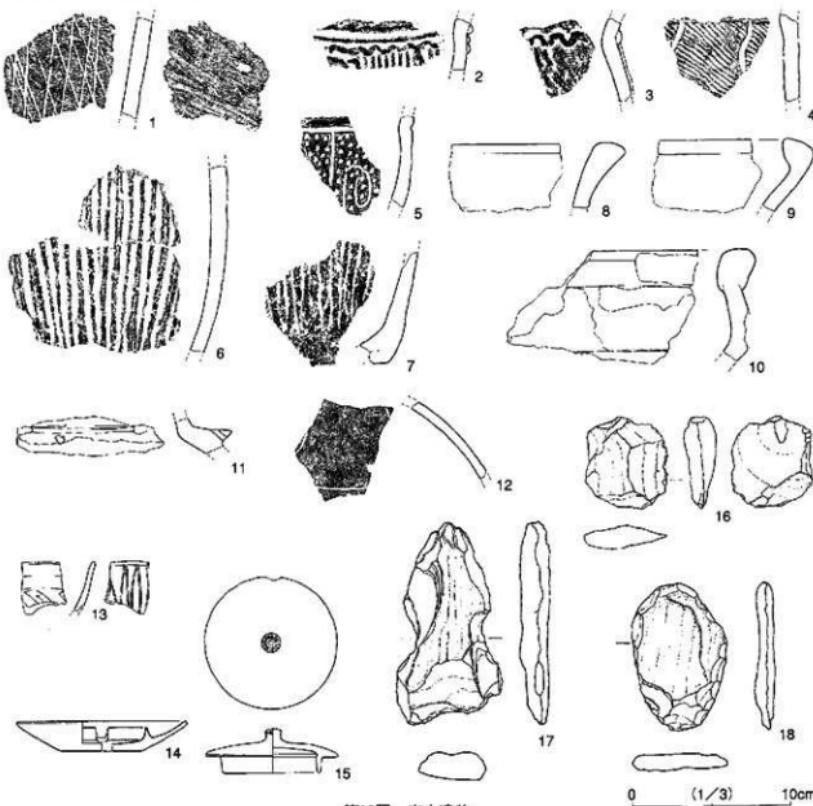
試掘坑	縄文時代		奈良・平安時代	近世以降
	土 器	石 器		
A	3 (早期1・中期2)	2 (スクレイバー・チャーフ剥片)	1 (土師器)	
B		1 (打製石斧)		
C	3 (中期2・後期1)	3 (打製石斧)		
D		1 (打製石斧)		3 (陶磁器)
E	2 (中期1・後期1)			6 (陶磁器)
F				5 (陶磁器)
G	1 (中期)			1 (陶磁器)
H	3 (中期)			3 (陶磁器)
I	59 (中期58・後期1)	6 (打製石斧)		3 (陶磁器2・瓦1)
J				
K	1 (中期)		1 (土師器)	3 (陶磁器2・鉄釘1)
L	5 (中期)			2 (陶磁器1・鉄鎌1)
合計	77	13	2	26

第2表 野田尻 I 遺跡出土遺物集計表

( ) は内訳

出土遺物（第10図・図版1）

1～12は縄文土器。1、外面に沈線文、内面に条痕文、胎上に多量の繊維痕。早期後半・瀬ヶ島台式。2～11は中期後半・曾利式に比定される。2、条線地に波状貼付文。3、縄文地に波状貼付文。4、沈線区画の縄文地に沈線文が垂下する。5、沈線区画の刺突文地に縦位・曲線的な沈線文。6・7、条線地。器面は黄褐色で、内面は吸炭のため黒褐色を呈する。8・9は深鉢の無文II縁で、8は腹部に沈線。10、浅鉢。内外面は丁寧に磨かれ、一部に赤彩が残る。11、壺型の有孔鍔付土器。12、注口土器と思われ、胴部は球状を呈する。内外面は丁寧に磨かれ、沈線区画の帯縄文が施される。縄文後期・堀之内式。13は平安時代の上部器で、いわゆる甲斐型壺である。内面に放射状暗窓。14～15は近世以降の土器。14は灯明皿。15は蓋で、外面に緑色釉。16～18は縄文時代の石器。16、スクレイパー。長さ5.6cm・幅5.3cm・厚さ2cm・重さ35g。緑色凝灰岩。17、打製石斧。長さ12.0cm・幅6.7cm・厚さ1.7cm・重さ177g。泥岩。18、打製石斧。長さ9.3cm・幅5.9cm・厚さ1.2cm・重さ82g。泥岩。



第10図 出土遺物

### 3 大野字上ノ久保地点

調査目的 埋め立て工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市大野字上ノ久保6053他

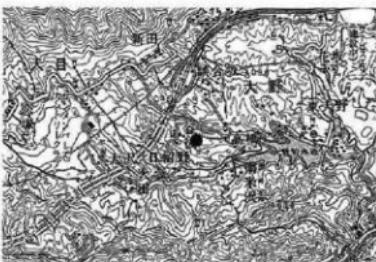
調査期間 平成8年3月26日

調査面積 16m<sup>2</sup> (対象面積1,000m<sup>2</sup>)

#### 概要

調査地点は扇山(1,137.8m)南東麓で、沢沿いの緩やかな斜面地に当たる。下流の台地に谷後遺跡があり、縄文時代の遺物散布地として知られている。調査は工事予定地の休耕田で実施し、2m四方の試掘坑を4ヵ所設定し最深0.4mまで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土

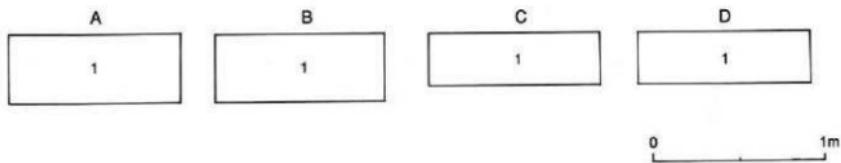
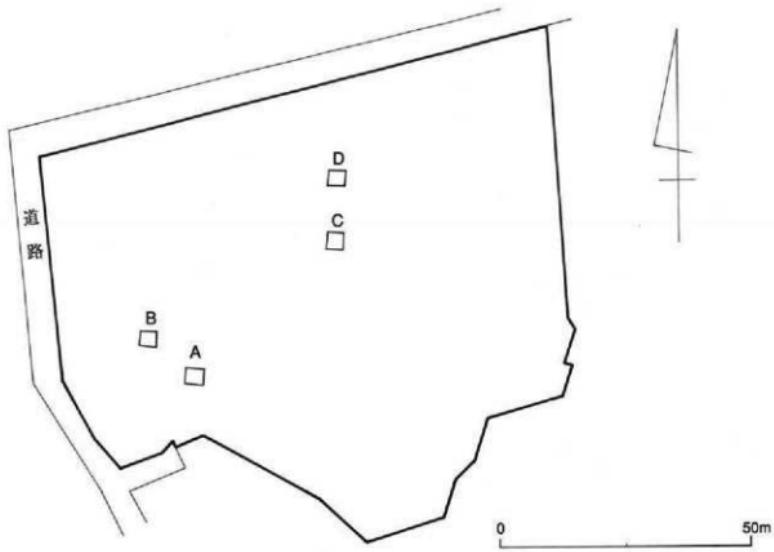
(旧耕作土)・ローム層で、遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第11図 調査地



第12図 調査地点



大野字上ノ久保地点土層  
1 表土 (旧耕作土)

第13図 調査区平面・土層図

#### 4 桐原字向山地点

調査目的 県立青少年自然の里建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市桐原字向山13893他

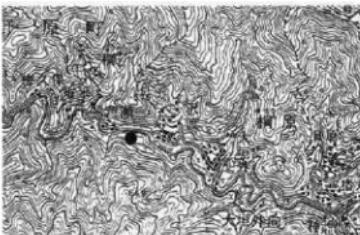
調査期間 平成8年7月29日～8月1日

調査面積 20m<sup>2</sup> (対象面積30,000m<sup>2</sup>)

#### 概要

調査地は鶴川西岸の河岸段丘面に位置する。建設予定地の休耕田に巾1m・長さ10mの試掘溝を2ヵ所設定し、最深1.5mまで人力で掘削した。この結果、表土下で旧河床と思われる砂礫層が検出され、さらに下層まで続く状況であった。

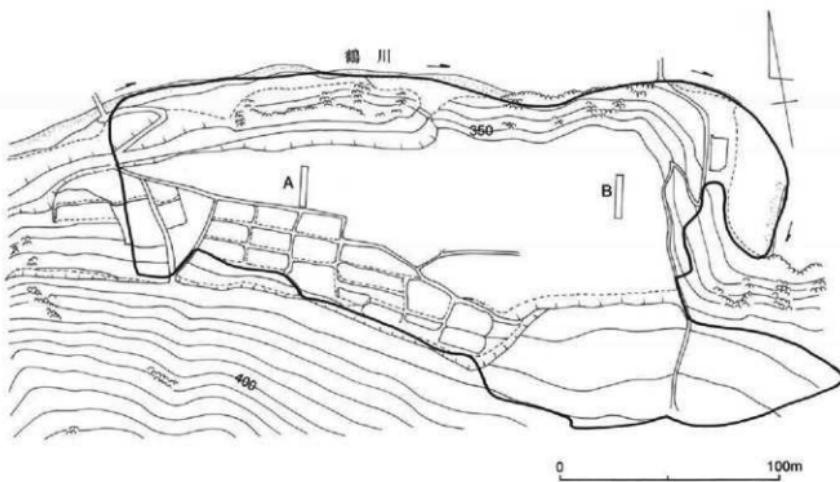
遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第14図 調査地



第15図 調査地点



A
1
2
3
4

B
1
2
3
4

横原字向山地点土層  
 1 表土  
 2 非褐色土 旧水田床土。  
 3 暗褐色土 糜（70cm以下）多く含む。  
 4 褐色土 糜（70cm以下）・砂粒を多く含む。



第16図 調査区平面・土層図

## 5 田代遺跡

田代遺跡は桂川南岸の河岸段丘面に位置する。平成4年の試掘調査では縄文土器（早期、前期、中期）、石器（石皿・四石・磨石類・打製石斧）が出土している。今回報告の調査地点は2ヶ所で、いずれも段丘背後の山際にある。

### 第1地点

調査目的 個人住宅建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市鶴島字田代3034

調査期間 平成8年11月21日・22日

調査面積 16m<sup>2</sup>（対象面積350m<sup>2</sup>）

#### 概要

建設予定地の荒蕪地に2m四方の試掘坑を4ヶ所設定し、最深1.2mのローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第17図 遺跡位置

### 第2地点

調査目的 給水用配水池建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市鶴島字田代3107-1他

調査期間 平成16年11月16日

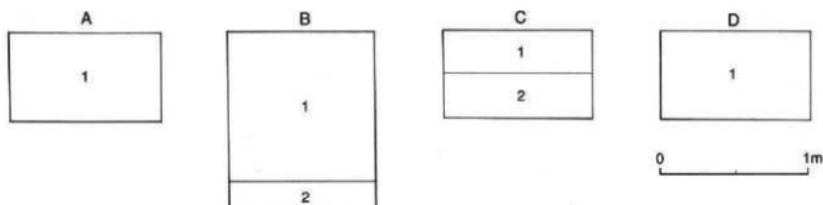
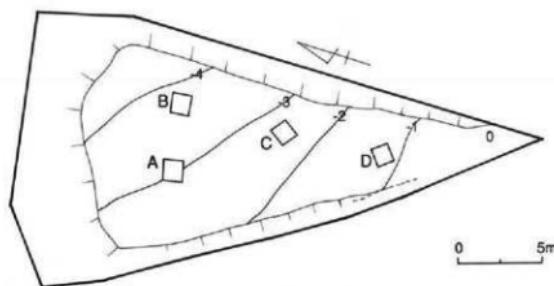
調査面積 8m<sup>2</sup>（対象面積303m<sup>2</sup>）

#### 概要

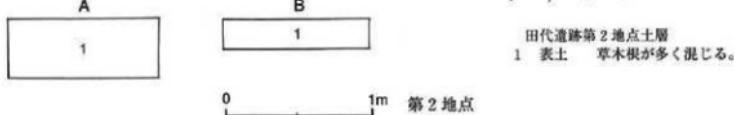
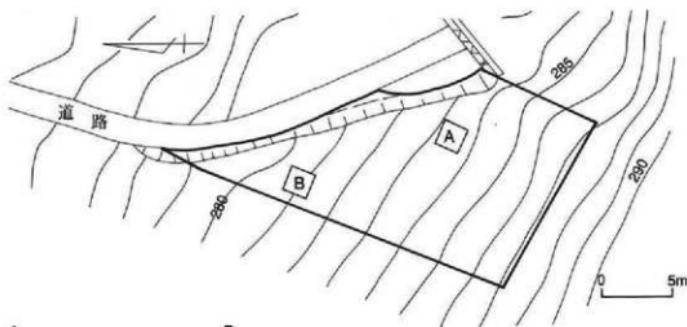
建設予定地の山林に2m四方の試掘坑を2ヶ所設定し、深さ0.4mのローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第18図 調査地点



田代遺跡第1地点土層  
1 表土 草木根が多く混じる。  
2 暗褐色土



第19図 調査区平面・土層図

## 6 狐原I遺跡

調査目的 携帯電話基地局建設工事に伴う試掘調査

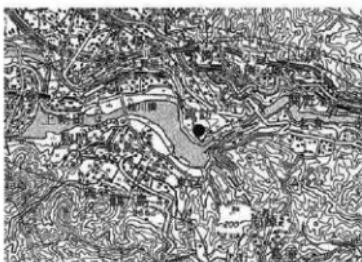
調査地 上野原市新田69-5

調査期間 平成17年12月12日

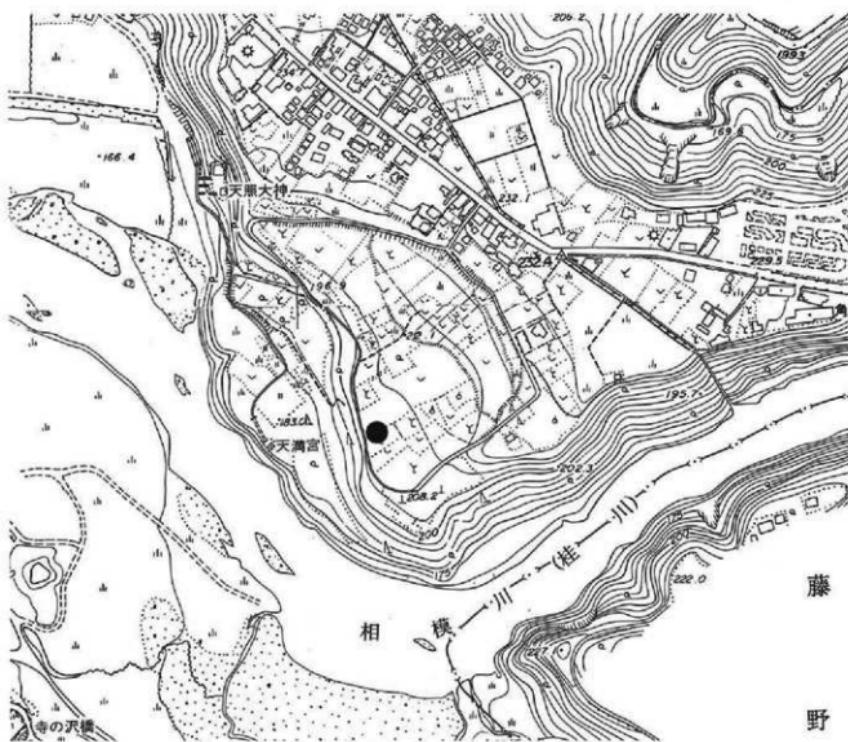
調査面積 12m<sup>2</sup> (対象面積190m<sup>2</sup>)

### 概要

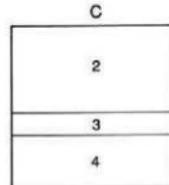
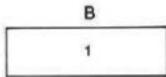
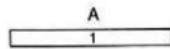
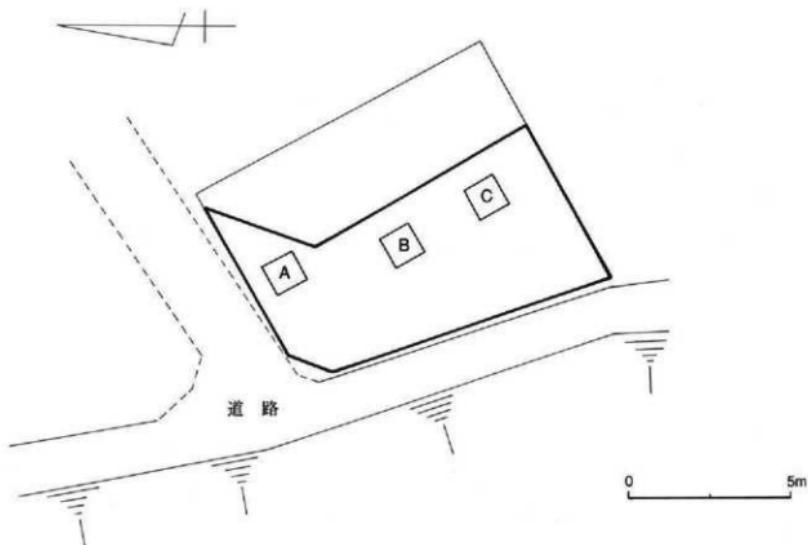
狐原I遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置し、縄文～平安時代の遺物散布地である。段丘端部の緩斜地において、2m四方の試掘坑を3ヶ所設定し、最深0.7mのローム面まで人力で掘削した。この結果、遺構・遺物は確認されず、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第20図 遺跡位置



第21図 調査地点



0 1m

- 孤原日遺跡土層
- |        |             |
|--------|-------------|
| 1 表土   | 碎石・ローム土塊含む。 |
| 2 表土   | 旧耕作土        |
| 3 褐色土  |             |
| 4 暗褐色土 |             |

第22図 調査区平面・土層図

## 7 狐原Ⅱ遺跡

調査目的 町道建設工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市新田22-1他

調査期間 平成8年12月4日・6日、平成9年1月28日

調査面積 80m<sup>2</sup> (対象面積374m<sup>2</sup>)

### 概要

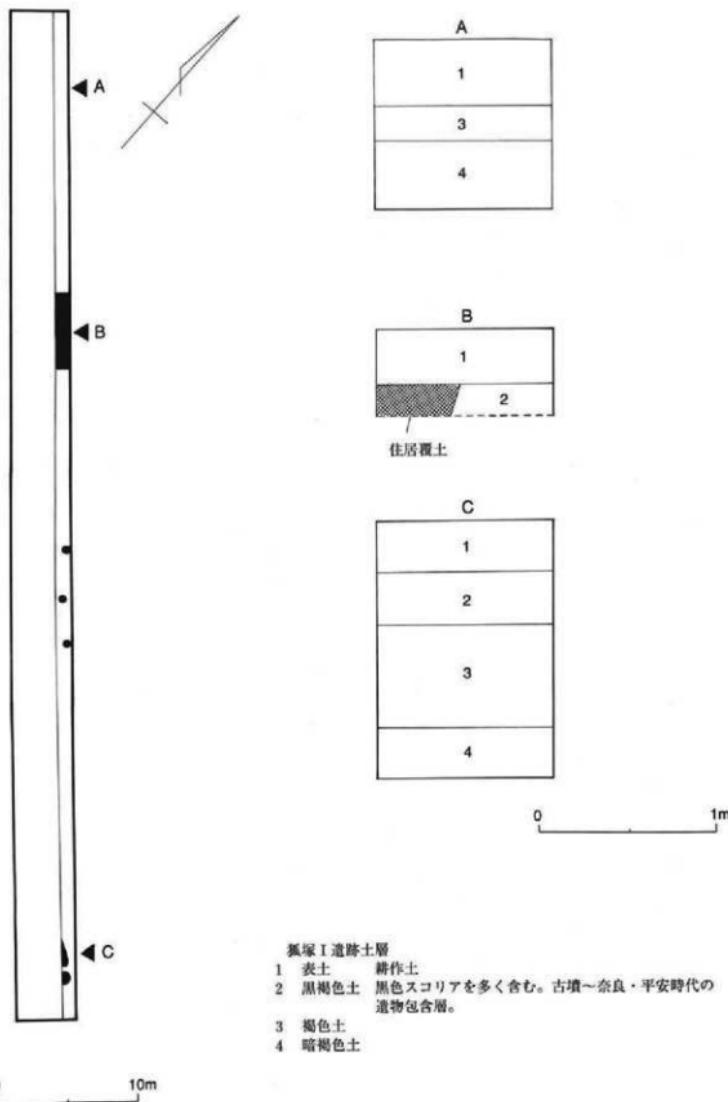
狐原Ⅱ遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置し、绳文～平安時代の遺物散布地である。工事予定地に巾1m・総延長80mの試掘溝を設定し、最深1.0mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、表土下で奈良時代の堅穴住居址1軒、掘立柱建物跡1棟を確認した。遺物は土器器・須恵器片が出土した。このため、同時に発掘調査を実施した。



第23図 遺跡位置



第24図 調査地区



第25図 調査区平面・土層図

## 8 塚場古墳群

調査目的 集合住宅建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字塚場1002

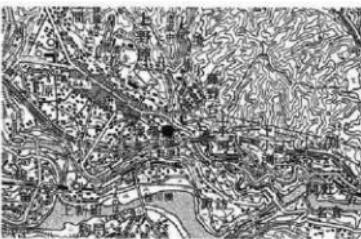
調査期間 平成8年12月9日

調査面積 10m<sup>2</sup> (対象面積253m<sup>2</sup>)

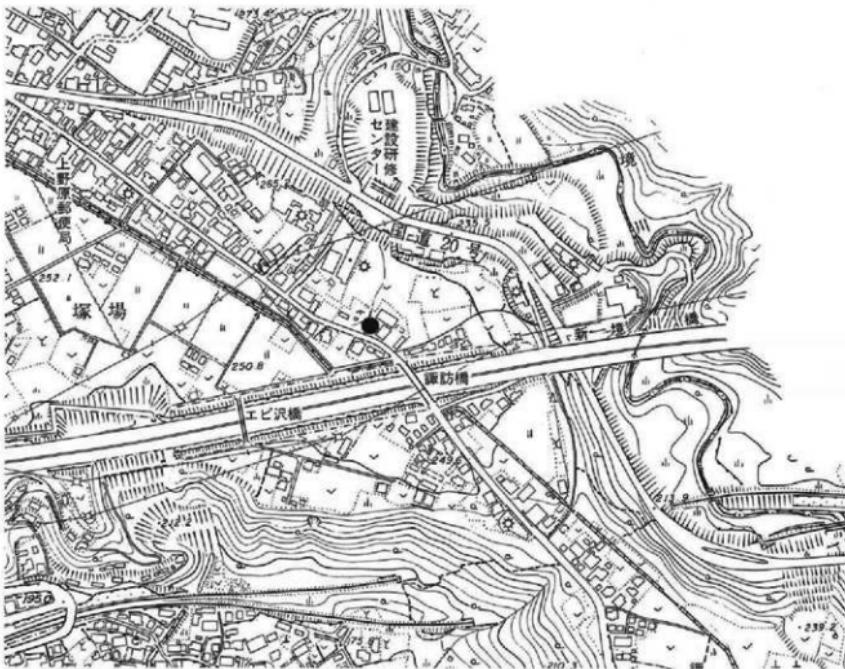
### 概要

塚場古墳群（上野原古墳群）は桂川北岸の河岸段丘面に位置する。3基程度の古墳から構成されていたと伝えられるが、周辺の開発が進み詳細は不明である。このうち、疱瘡神社の裏手に小型の円墳1基（直径9m・高さ2m）がある（一説

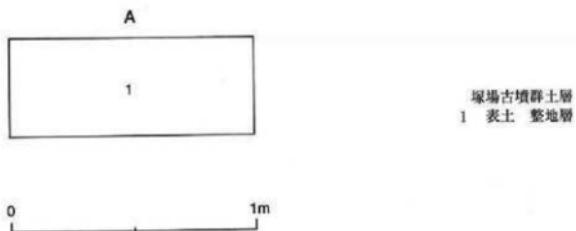
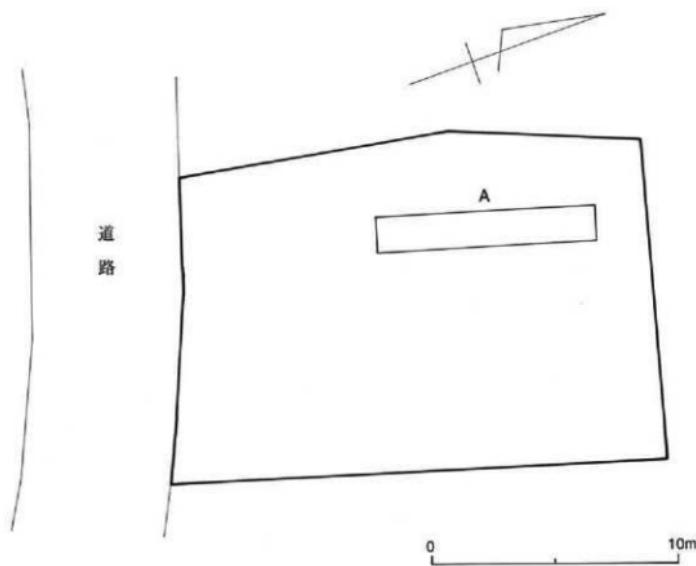
では旧甲州街道の一里塚）。この円墳に隣接した宅地の一角に巾1m・長さ10mの試掘溝を設定し、深さ0.4mまで人力で掘削した。この結果、表土（整地層）直下がハードローム層で、土木工事による搅乱を受けていることが確認された。遺構・遺物は検出されなかった。このため、遺跡の可能性は低いものと判断された。



第26図 遺跡位置



第27図 調査地点



第28図 調査区平面・土層図

## 9 沢渡Ⅱ遺跡

調査目的 県道上野原丹波山線道路改良工事に伴う試掘調査

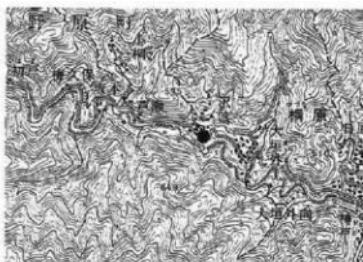
調査地 上野原市桐原字沢渡10737他

調査期間 平成9年5月6日・7日

調査面積 14m<sup>2</sup>（対象面積3,228m<sup>2</sup>）

### 概要

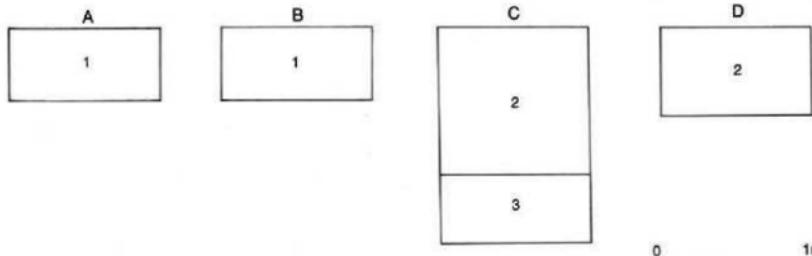
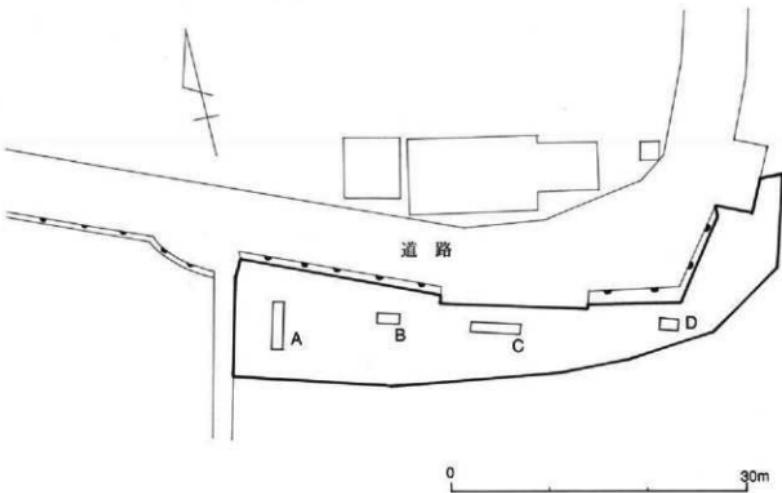
沢渡Ⅱ遺跡は鶴川北岸の斜面地に位置し、縄文時代の遺物散布地である。道路拡幅予定地の畝に巾1m・長さ2~5mの試掘溝を4ヶ所設定し、最深1.2mまで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土・疊混じりのローム層で、一部に過去の道路工事に伴う客土が見られた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、工事予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第29図 遺跡位置



第30図 調査地点



- 沢渡Ⅱ遺跡土層
- 1 暗褐色土 耕作土。礫(3cm以下)を多く含む。
  - 2 暗褐色土 客土。砂礫を含む。
  - 3 暗褐色土 旧耕作土

第31図 調査区平面・土層図

## 10 桐坪遺跡

調査目的 農道桐坪線道路改良工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市桐原字桐坪6116他

調査期間 平成9年9月1日・2日

調査面積 30m<sup>2</sup> (対象面積720m<sup>2</sup>)

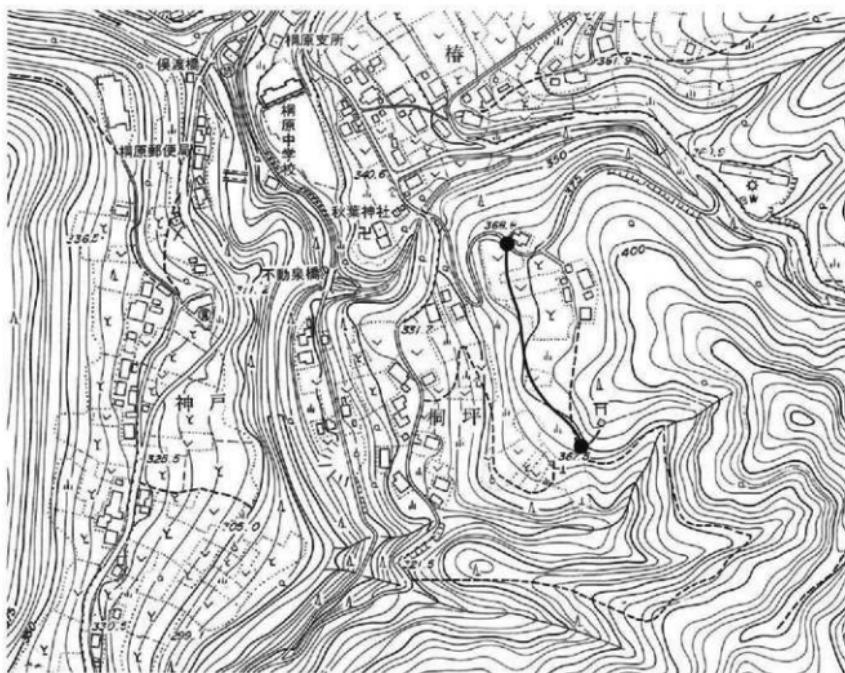
### 概要

桐坪遺跡は鶴川東岸の斜面地に位置し、縄文時代の遺物散布地である。調査地は遺跡北端に当たり、山際斜面地から崖縁を経て比較的平坦な畑地に到るルートである。調査は、工事予定地のうち崖縁を除いた畑地および荒蕪地で実施し、巾1m・長さ2~3mの試掘溝を10ヶ所設定し、最深0.8mまで

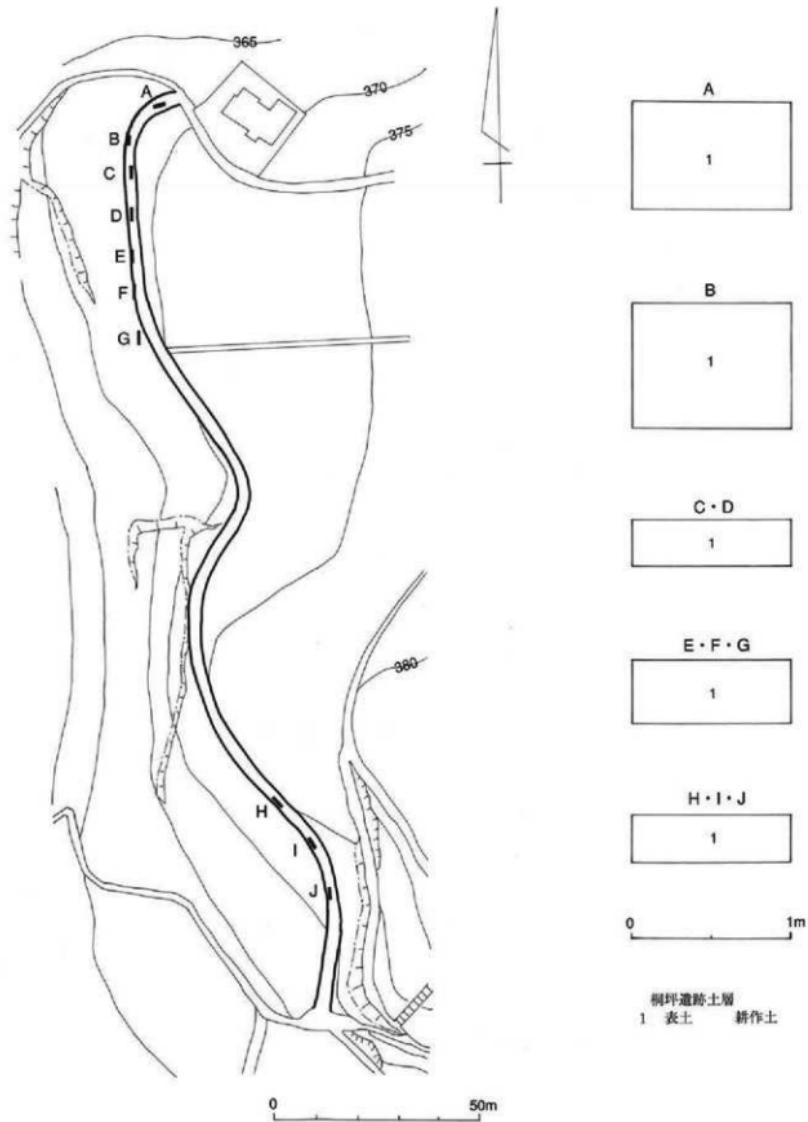
で人力で掘削した。この結果、全般に表土(耕作土)直下がハードローム層で、耕作による擾乱を受けていた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、工事予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第32図 遺跡位置



第33図 調査地点



第34図 調査区平面・土層図

## 11 新井遺跡

調査目的 宅地造成工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字新井4511他

調査期間 平成9年9月18日～22日

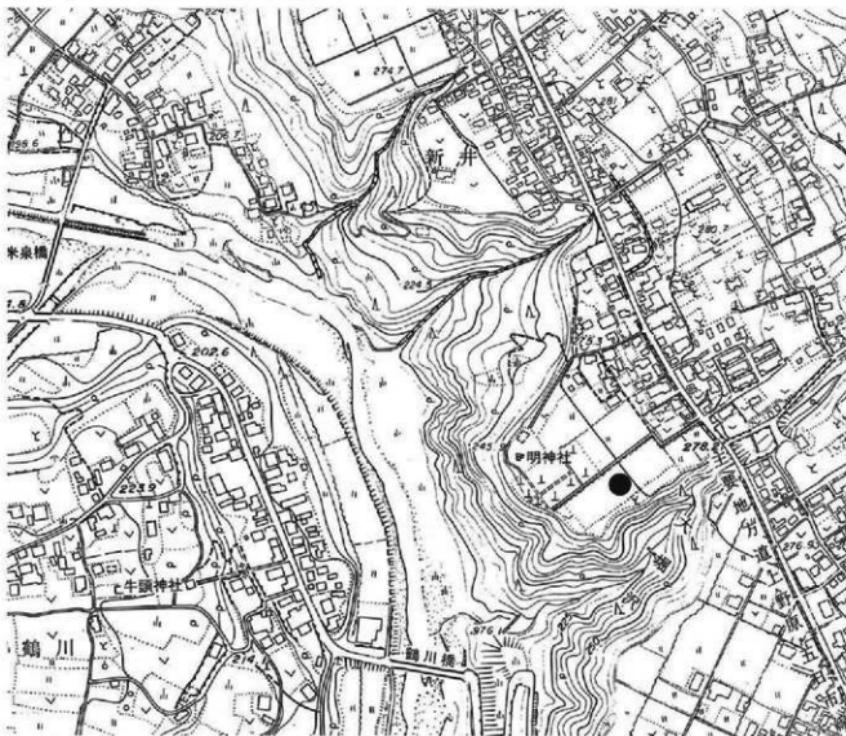
調査面積 59m<sup>2</sup> (792m<sup>2</sup>)

### 概要

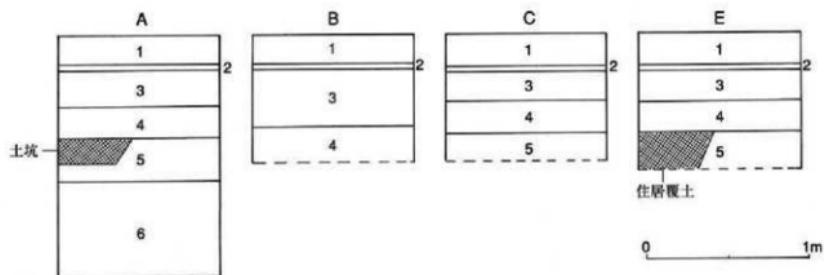
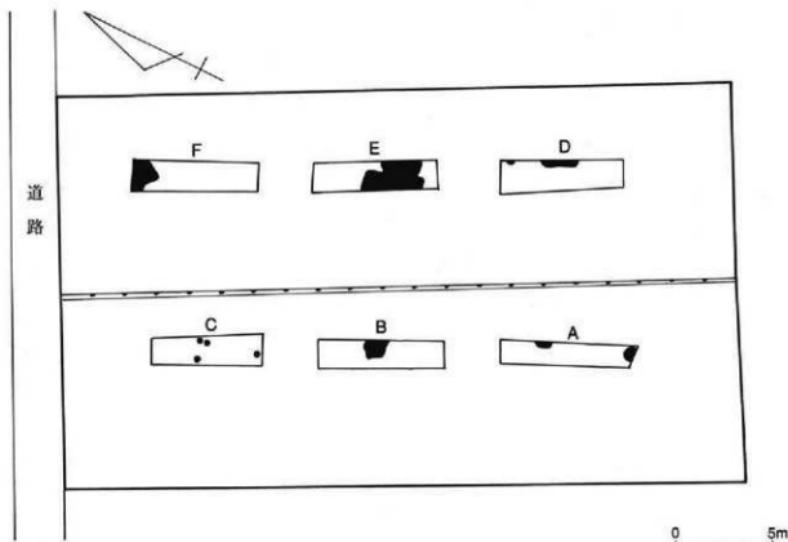
新井遺跡は鶴川東岸の河岸段丘面に位置し、縄文時代の遺物散布地である。工事予定地の休耕田に巾1.5m・長さ6～7mの試掘溝6カ所を設定し、重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、すべての試掘溝で平安時代に比定される遺構が確認された。掘り下げは遺構の確認面に止め、一部で深掘りを行いローム層までの層序を調査した。



第35図 遺跡位置



第36図 調査地点



- 新井遺跡土層
- |        |                         |
|--------|-------------------------|
| 1 表土   | 旧耕作土                    |
| 2 赤褐色土 | 旧水田床土                   |
| 3 褐色土  |                         |
| 4 黒褐色土 | 黒色スコリアを多く含む。平安時代の遺物包含層。 |
| 5 暗褐色土 | 繊維の橙色スコリアを多く含む。         |
| 6 褐色土  | 縞まり強い。                  |

第37図 調査区平面・土層図

### (1) 基本層序

表土（旧耕作土）・褐色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土・ローム層で、表土直下に旧水田の床土が介在する。以上のうち、黒褐色土は平安時代の遺物包含層であり、同期の遺構覆土の基調となっている。

### (2) 遺構と遺物

発見された遺構は平安時代に比定され、堅穴住居と思われる方形プラン2基、土坑あるいは柱穴と思われる円形プラン1基・方形プラン1基、小穴6基、焼土2基である。焼土は白色粘土を含むことから、住居に伴うカマドの可能性もある。確認面はすべて暗褐色土上面であった。

遺物は平安時代と縄文時代に分類される。平安時代では土師器壺・坏、須恵器坏、高台付坏が出土し、すべて小片である。大半が黒褐色土中から出土した。縄文時代では上器片、黒曜石片の他、多数の礫が出土した。礫は拳大で、被熱し破損したものが多い。いずれも暗褐色土中から出土した。

試掘坑	縄文時代		平安時代	近世以降	礫
	上器	石器			
A	3（早期1）				10
B			1（土師器）		
C	1（早期）		6（土師器5・須恵器1）		5
D	2	1（黒曜石剥片）	1（須恵器）		2
E			6（土師器）	1（陶磁器）	10
F	2	1（黒曜石剥片）			1
合計	8	2	14	1	28

第3表 新井遺跡出土遺物集計表

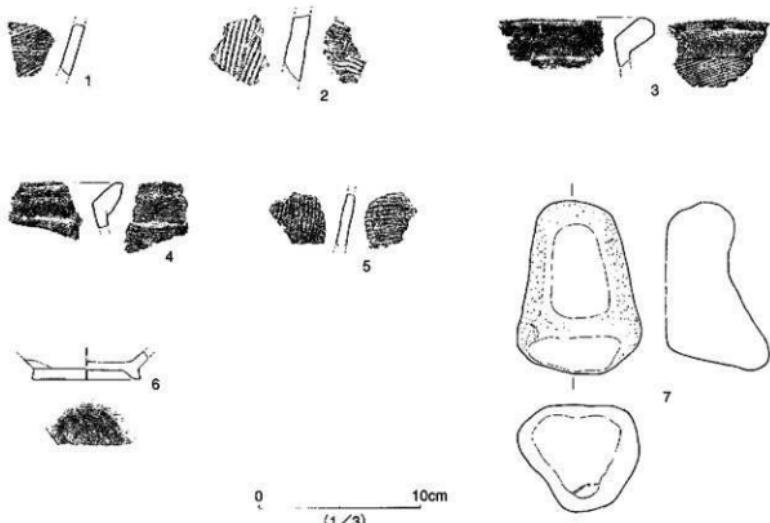
( ) は内訳

### 出土遺物（第38図）

1～2は縄文土器。1、条線文が斜位に交差する。器厚は7mmで、色調はくすんだ褐色を呈する。早期前半・沈線文系上器。2、内外面に条痕文。胎土に纖維痕が見られる。器厚は11mmで、色調は褐色を呈する。早期後半・条痕文系土器。

3～6は平安時代の土器。3～5、土師器の壺で、いわゆる甲斐型。6、須恵器の高台付坏。底面に回転糸切痕が残る。

7、縄文時代の石器。磨石類。側面・端部に平滑な磨面を有し、端部には敲打痕も認められる。長さ10.3cm・幅7.3cm・厚さ6.2cm・重さ475g。砂岩。



第38図 出土遺物

## 12 原・郷原遺跡

原・郷原遺跡は鶴川北側の斜面地に位置し、縄文時代の遺物散布地である。今回報告する調査地点は2ヶ所である。

### 第1地点

調査目的 農道原・郷原線道路改良工事に伴う試掘調査

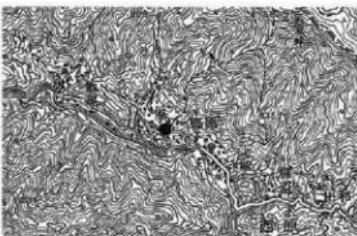
調査地 上野原市西原4666他

調査期間 平成9年10月6日～13日

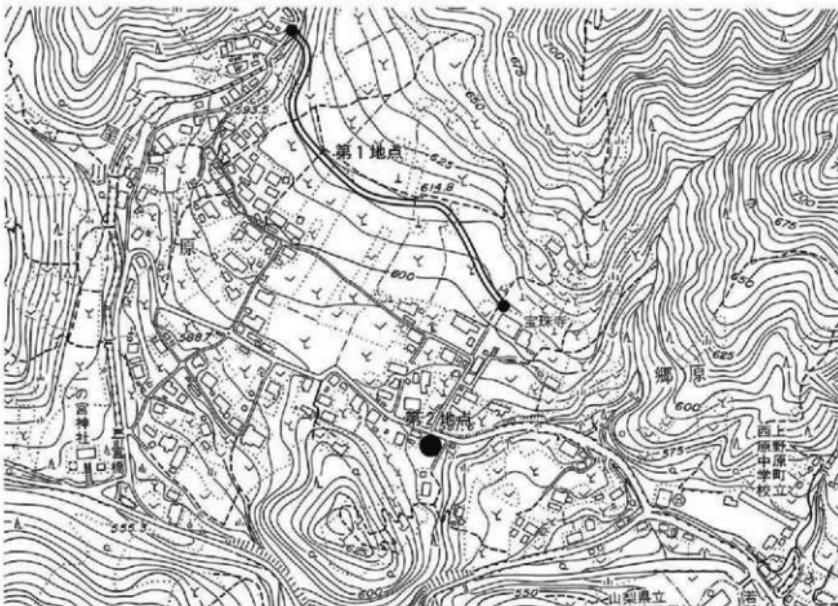
調査面積 77m<sup>2</sup>（対象面積900m<sup>2</sup>）

### 概要

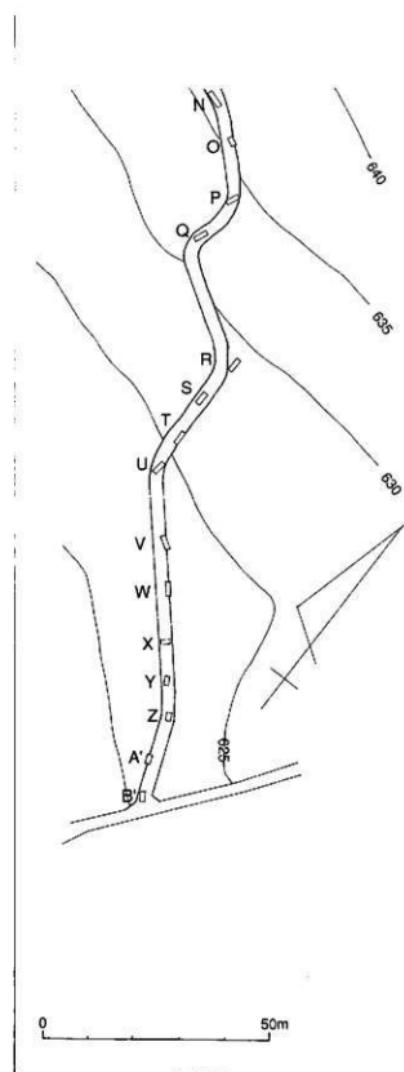
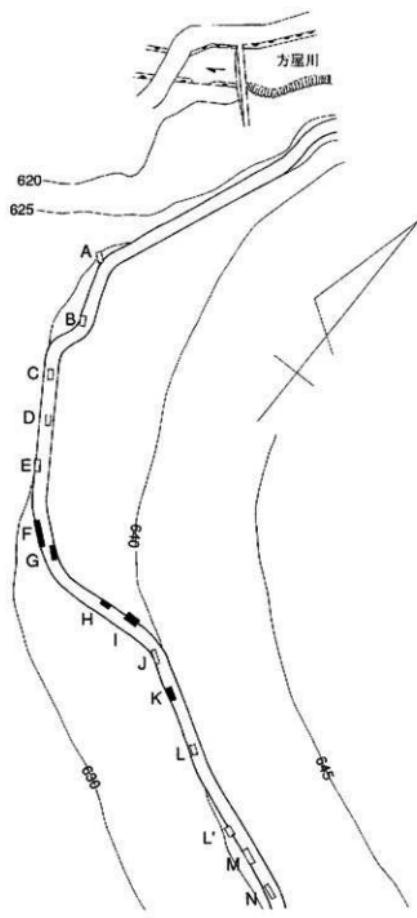
工事予定地は山側斜面の畑を横断するルートであり、このうち方屋川沿いの急傾斜地を除く約900m<sup>2</sup>で調査を実施した。調査は、巾1m・長さ2～6mの試掘溝を29ヶ所設定し、最深2mまで人力で掘削した。この結果、ローム面に至るまでに礫層が数層介在し、土石流が頻繁に発生していたことが推定できた。遺構・遺物は西斜面で確認され、縄文時代の配石・敷石住居跡（図版3）や、縄文中期後葉～後期の土器・石器（打製石斧・大型粗製石匙・石皿）などが出土した。このため、平成9年度に発掘調査を実施した（上野原町埋蔵文化財調査報告書第9集『原・郷原遺跡』上野原町教育委員会2000）。



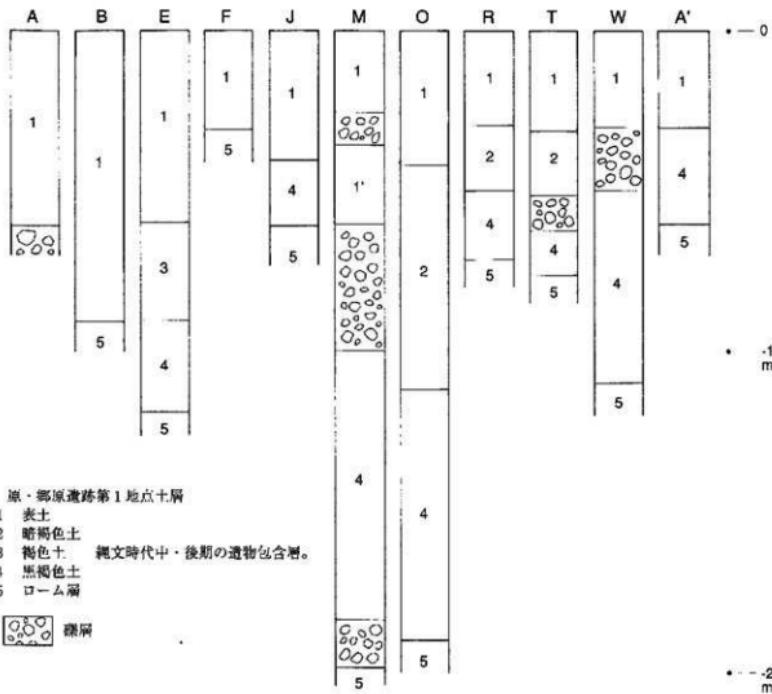
第39図 遺跡位置



第40図 調査地点



第41図 調査区平面図



第42図 調査区土層図

試掘坑	縄文時代		占墳～奈良・平安	近世以降	殻
	土器	石器			
A					
B					
C		1			
D	13 (中期6・後期3)	2 (石皿・石匙)			
E	6 (後期3)				
F	7	1 (打製石斧)			5
G	4 (後期3)				
H					
I	9 (中期4)				
J	1 (中期)				
K~B'					
合計	33	4	0	0	5

第4表 原・郷原遺跡・第1地点出土遺物集計表  
( ) は内訳

## 第2地点

調査目的 NTT ドコモ SS 西原無線基地局建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市西原字向井4399-1他

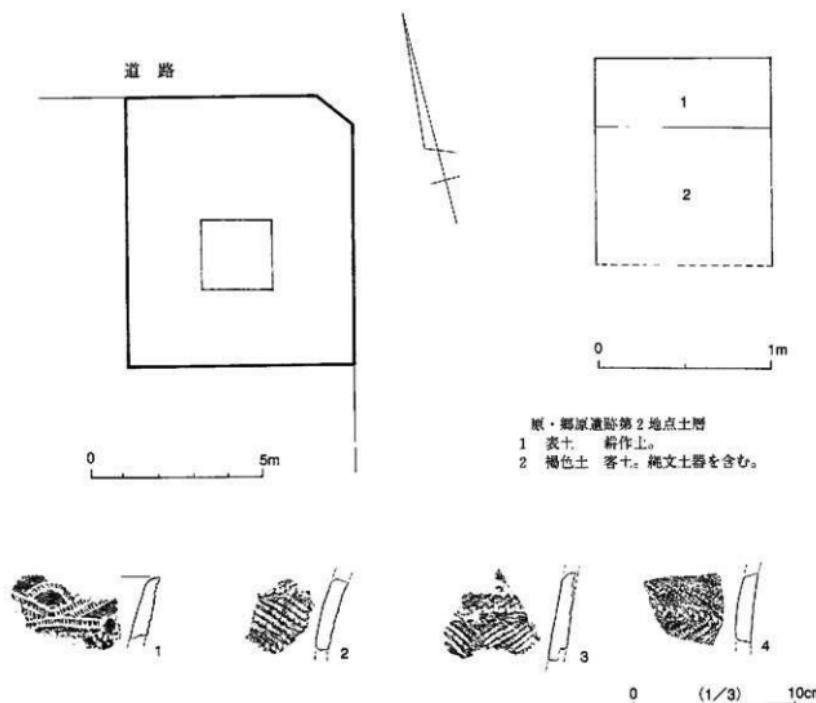
調査期間 平成11年2月24日・25日

調査面積 4m<sup>2</sup> (対象面積54m<sup>2</sup>)

## 概要

調査地点は遺跡東端に位置し、ひな壇状に区画された畑の一角にあたる。建設予定地に2m四方の試掘坑を1ヶ所設定し、深さ1.8mまで人力で掘削した。この結果、表上(耕作上)下の客土がローム層に達する状況で、土木工事による擾乱を受けていることが確認された。地元の話では、調査地に今から20年ほど前まで地区的集会所が建っていたという。遺物は縄文土器片5点が客土中より出土したが、遺構は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

土器は纖維を多く含み、縄文時代前期前半に比定される(第43図・図版3)。



第43図 調査区平面・土層図、出土遺物

## 13 牧野遺跡

牧野遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置し、縄文時代及び土師器の遺物散布地である。昭和52年、段丘南端で時期不明の地下式土坑1基が発掘調査され、平成6年には町立嚴中学校建設に伴う試掘調査で時期不明の土坑1基が検出された。今回の調査地点は3ヶ所で、いずれも国道20号南側の平坦面から緩斜面に位置する。

### 第1地点

調査目的 個人住宅建設に伴う試掘調査

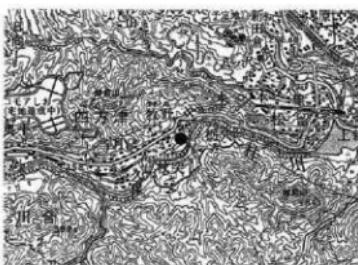
調査地 上野原市四方津字ノジノジ795

調査期間 平成10年9月8日

調査面積 8m<sup>2</sup> (対象面積181m<sup>2</sup>)

### 概要

調査は、建設予定地の畝に2m四方の試掘坑を2ヶ所設定し、深さ0.6mまで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土(耕作土)・暗褐色土・ローム層であった。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第44図 遺跡位置

### 第2地点

調査目的 大型店舗(イタヤマメディコ上野原店)建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市四方津字牧野道下424-2他

調査期間 平成11年2月22日

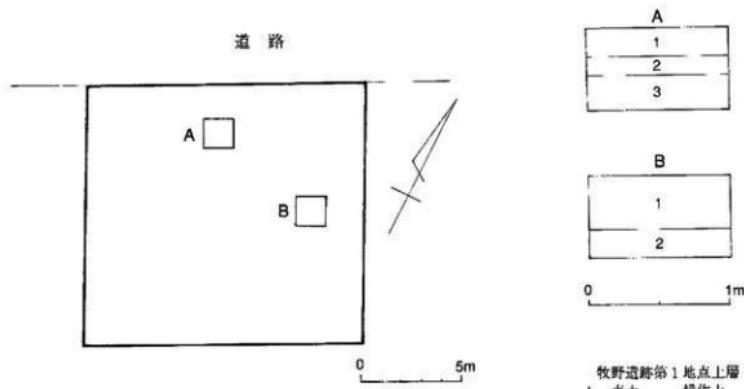
調査面積 41m<sup>2</sup> (対象面積908m<sup>2</sup>)

### 概要

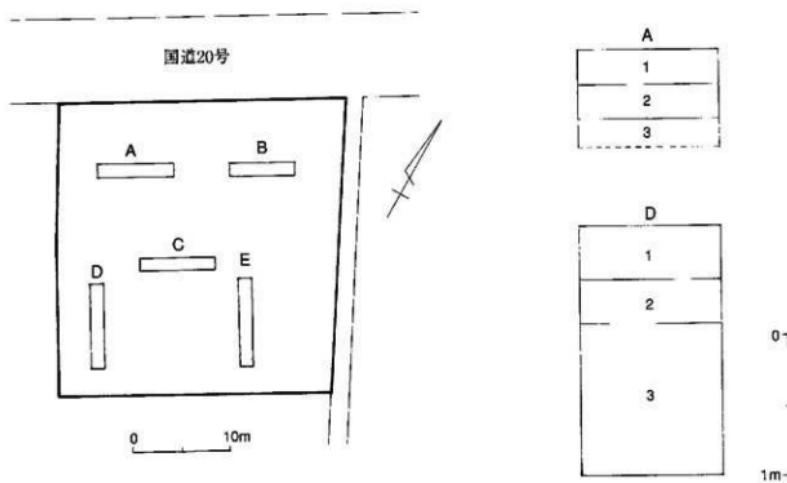
調査は、建設予定地の畝に巾1m・長さ8~9mの試掘溝を5ヶ所設定し、最深1.8mまで重機掘削機を併



第45図 調査地点



第1地点



第2地点

第46図 第1～2地点 調査区平面・土層図

用し掘り下げた。この結果、地表下約0.8mから粘土質の黒褐色土が厚く堆積し、ローム層に続いていた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

### 第3地点

調査目的 大型店舗（ひゅうが四方津店）建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市四方津字牧野道下407他

調査期間 平成12年11月27日～12月15日

調査面積 260m<sup>2</sup>（対象面積5,186m<sup>2</sup>）

#### 概要

調査は、建設予定地の畑に巾1m・長さ5～40mの試掘溝を7ヶ所設定し、最深2.3mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、国道側の平坦面（B-Cトレーニチ）において縄文上器や石器を含む土層が確認された。また、緩斜面（Fトレーニチ）において明治時代の中央線鉄道建設工事時に築かれた煉瓦焼成用の登り窯1基が検出され、周辺から多量の赤煉瓦が出土した。当時の煉瓦焼成窯が発見された事例は全国的に少ないと認め、工事計画を一部変更のうえ、盛り土による現地保存の処置を行った。

試掘坑	縄文時代		近世以降	縄
	上器	石器		
A	1（後期）	1（磨石）		
B	66（中期末～後期18）	2（石皿・台石）		24
C	55（後期11）			3
D	2（後期1）			2
E				
F			煉瓦多数、鉄釘1、鉄製棒1	
G			煉瓦多数	
合計	124	3	多数	29

第5表 牧野遺跡・第3地点出土遺物集計表 ( ) は内訳

#### (1) 基本層序

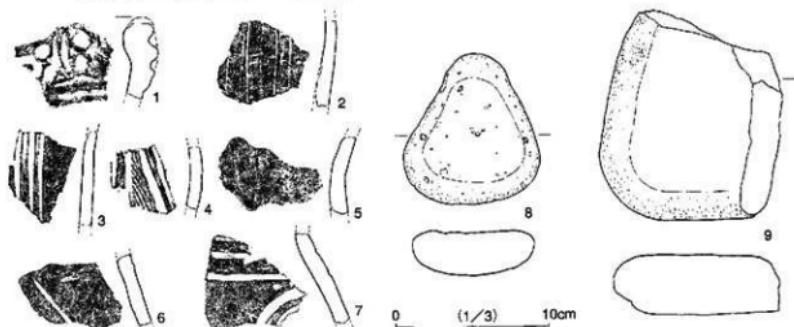
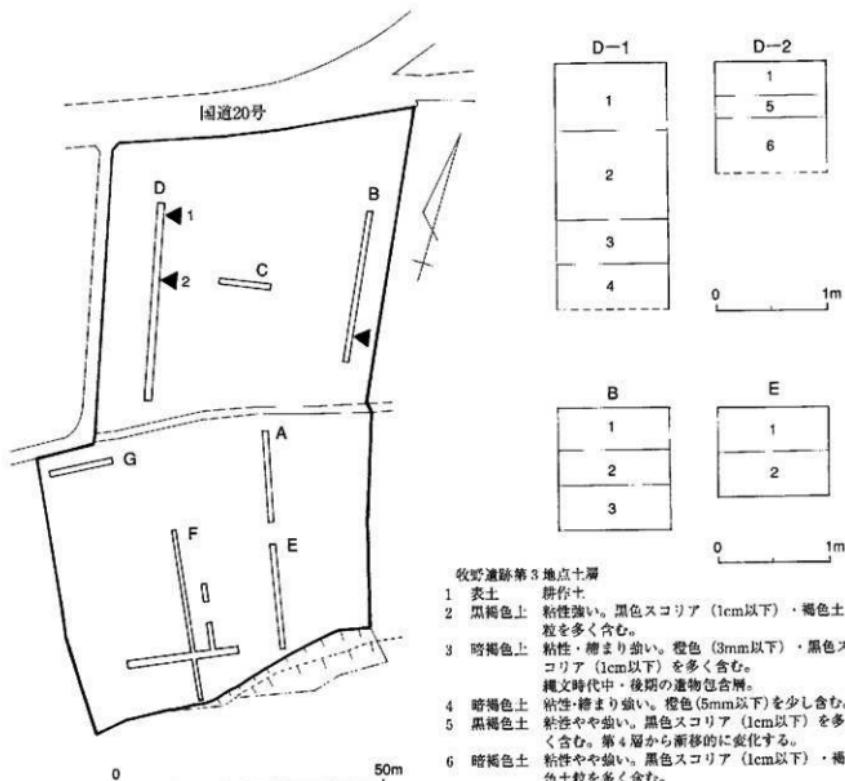
表上（耕作土）・黒褐色土・暗褐色土・ローム層で、平坦面の一部（Dトレーニチ北端）では暗褐色土下に粘土層が堆積する。暗褐色土は縄文時代の遺物包含層である。

#### (2) 遺構と遺物

縄文土器、石器が出土した（第47図）。遺構は明治時代の煉瓦窯のみである。

1～7は深鉢で、縄文後期・堀之内式に比定される。1、小突起を有するII縁部で、円形刺突が縦に配される。2～4は平行沈線文が縦に配され、4は縄文を地文に持つ。5は無文。6・7は沈線文が横・斜位・弧状に配される。

8～9は石器。8、小型の石皿。長さ9.8cm・幅8.8cm・厚さ3.5cm・重さ400g。玄武岩質溶岩。9、台石。平滑な磨面を有する。現存長13.8cm・現存幅11.5cm・厚さ4.4cm・重さ1,132g。閃綠岩。



第47図 第3地点 調査区平面・土層図、出土遺物

### (3) 煉瓦窯

傾斜面（Fトレンチ）の標高246～250mの間に位置し、床の一部が検出された。窯は斜面にはほぼ直交する形で、N26°Eを主軸とする。平面規模は主軸全長約23m、最大幅8mの長方形と推定され、平均傾斜角度は約9°である。複数の焼成室からなる連房式登り窯で、窯の周囲には窯体片を含む多量の煉瓦が散乱していた。

#### ① 烧成室と燃焼室

焼成室10室程度が連なっていたものと推定されるが、上方は遺存状況が悪いため室区分は不明確である。

下から1室目（第51図、図版17）トレンチ最下端で検出された。この場所は、比高差1m程度の段差が付く地形となっており、公図上の土地境に当たる。燃焼室の可能性がある。平面は東西に長い長方形と推定され、幅8m・主軸方向の長さ0.9mである。前面は煉瓦を交互に積み上げた壁で区画されていた。壁は2段目まで遺存し、厚さは煉瓦1個の長手分約23cmである。床面は平坦で、普通煉瓦が横方向に整然と敷き詰められる。狭間穴<sup>(1)</sup>は長さ約60cm、幅16cmである。穴に面した煉瓦の表面には砂混じりの粘土が塗布され、一部は火熱の影響でガラス状に硬化している。

下から5室目まで（第51・52図、図版17）各室の平面は東西に長い長方形と推定され、幅8mである。主軸方向に1.8～1.9mの間隔で段差により区画される。段差は煉瓦2個を平積みにした高さで、13cm前後である。各室の床は平坦で、煉瓦が横方向に整然と敷き詰められる。床に用いられた煉瓦は大半が普通煉瓦であるが、一部に半折・二五分に加工したものが見られる<sup>(2)</sup>。段差には2個一対の煉瓦を主軸方向に平積みしたものを15～18cmの間隔で付設し、狭間穴としている。狭間穴の数は、5室目と6室目の間（東西トレンチ）で12ヶ所確認できたが、搅乱等による欠損部を含めれば約20ヶ所が推定される。狭間穴に面した煉瓦の表面には砂混じりの粘土が塗布され<sup>(3)</sup>、一部は火熱の影響でガラス状に硬化していた。

6室目から上（第51図、図版15・16）床の煉瓦が乱され、空間の段差や狭間穴は不明瞭であった。このために室区分は明確でない。床には煉瓦を縱横に配置し、空間に細砂や大小の煉瓦片を敷き詰めるなど、5室目までと様相が異なっている。また、煉瓦を主軸の直交方向に溝状に配置し、あるいは長手を下にした煉瓦を等間隔で溝に架け渡した箇所があり、これらはロストルとしての用途が想定される<sup>(4)</sup>。床に用いられた煉瓦は普通煉瓦の他に、半折・七五・二五分・羊羹に加工したものが多い。狭間穴は残されていなかったが、段差に当たる煉瓦表面が黒く煤けており、この部分が狭間穴に面していたものと推定される。

一部の焼成室では黄褐色粘土で煉瓦の床面が覆われていた。粘土は主軸方向に1.85mの平坦面を有し、厚さ約15cmである。上面は固く焼上化していた。床面が一部補修された可能性がある。

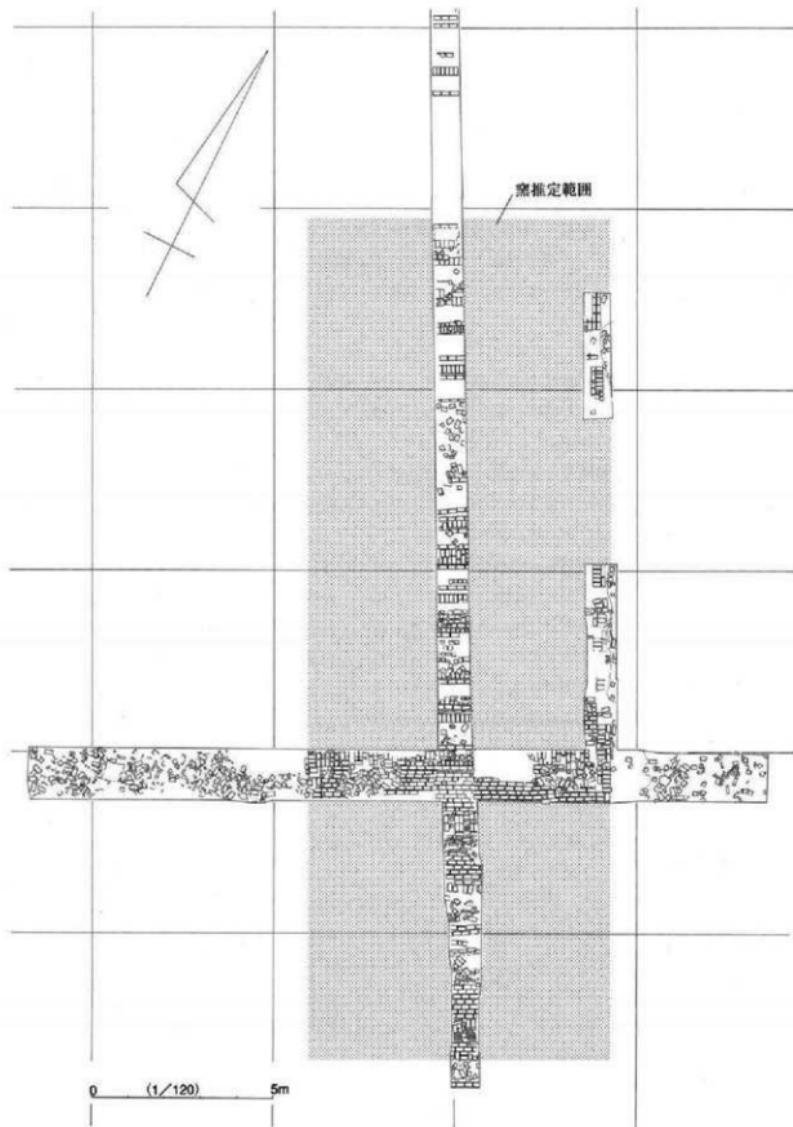
側壁と搬入出口（第52図、図版18・19）焼成室の東西側壁は煉瓦を交互に積み上げて作られており、2段目まで遺存していた。壁の厚さは約34cmである。なお、窯東端の床の一部に未焼成の黑色煉瓦が用いられていた。このうち外縁に位置する煉瓦は角が取れて丸く摩滅し、その範囲は外縁に沿って最長63cmを測る。この場所に焼成室内部への出入口が推定できる。

(1) 狹間穴は火熱を窯から窯へ通すものである。穴の大きさは、昇温効果を高めるため窯の中心より側壁側で広くするものとされているが、本事例ではそのような傾向は確認できなかった。

(2) 煉瓦の形状と種類は第57回参照。

(3) 粘土は厚さ5mm前後で砂粒を多く含む。色調は暗褐色あるいは白色。煉瓦の小口あるいは長手面に一定方向に溝で付けられ、端から1cm程度はみ出しているものも多い。壁面や日焼を保護するために塗布された可能性がある。中村三郎氏ご教示。中村氏は上野原市大倉に登り窯を築き、作陶に従事しておられる。

(4) 中村氏にご教示いただいた。



第48図 煉瓦窯全体図

#### ② その他の施設（第51図、図版15）

斜面上方で煉瓦を山形に配置した施設が検出された。これを境に上方では煉瓦配置が希薄となり、付近が公園上の土地塊に当たることから、この場所が窯の最上端に当たるものと推定される。この施設は、普通煉瓦の小口一端を斜めに持ち上げ山形に並べたもので、幅70cm・高さ15cm。頂部の隙間（幅20cm）に大小の煉瓦片を充填している。煙突等の突出し関連施設の可能性も考えられる。

#### ③ 窯の基礎（第50図、図版17）

焼成室5室目の床を一部掘り抜いて調査し、窯の基礎を確認した。窯の床面は煉瓦を3段重ねにした基底部から成っていたが、さらに下にも同様の基底部が検出された。各基底部は薄い砂層上に造られていた。基底部は、ローム塊・黒色土を多く含む黄褐色土、未焼成の黒色煉瓦や砂砾を含む薄黑色土、そして黄褐色シルト質粘土を板状に重ねた上に造られており、シルト質粘土の上面は固く焼土化していた。地山はハードローム層である。

#### ④ 窯の周囲（第48図）

窯の周囲には広範囲に渡って煉瓦や焼土が散乱していた。煉瓦には窯壁に用いられて表面がガラス状に固くなつたものや、狹間穴に見られた表面に粘土を塗布した煉瓦も多い。

#### ⑤ 窯壁（第54図12）

複数の煉瓦を積み上げた窯壁片が窯内側の煉瓦散乱部で見つかった。内面は自然釉が厚く付着し、竿となっている。また、内壁がわずかに湾曲していることから、窯の横断面がアーチ形をしていたことが推測される。

#### ⑥ 出土遺物（第54～56図、第6表、図版19・20）

大半が煉瓦で、他に鉄製品がある。棒状製鉄品（第56図2）はFトレーナー最下端より出土した。

煉瓦はすべて赤煉瓦で、耐火煉瓦（白煉瓦）は含まれない。未焼成品もある。窯体と製品の区分は難しいが、本窯が廃棄後に解体された様相を呈していることを考えると、出土した煉瓦の大半は窯体に用いられていたものと推測される。以下、窯の内外からサンプル採取した29点の煉瓦について観察結果をまとめた。

**寸法** 煉瓦によってわずかな差異があるが、平均値は長さ227.5mm、幅110.6mm、厚さ57.7mmであった。この寸法は、大正14年に採用され戦後のJIS規格に踏襲された煉瓦の規格210×100×60mmに比べると大型であり、明治38年時点でも5種類に分類されていた煉瓦規格と比較すると、東京形（227×109×60.6mm）、作業局形（227×109×56mm）に近似している。このことから、本遺跡の煉瓦は、大正14年の統一規格以前に作られたもので、明治期に遡る可能性を指摘できる。

**色調** いわゆるオレンジ色、肌色、赤紫色、灰色とあり、一様ではない。窯体に用いられた場所によって加熱の度合いに差異が生じたことも一因であろう。

**胎土** 砂砾を多く含むため、煉瓦表面に繊（1cm程度）の脱落痕や、砾の一部が露出しているものも見られ、こうした箇所から亀裂が生じている。

**成形方法** すべて手抜き成形である。これは、木製の型枠に粘土塊を入れて叩き締め、取り出し後、平の面を撫で板で平滑に仕上げ、1個単位手作りで行う方法である。出土した煉瓦の多くは、平の一面あるいは両面に、一定方向に撫でた痕跡が残されていた（図版20）。なお、数点の煉瓦に、成形段階で付いたと思われる指頭痕が平面、あるいは両面の一部に残されていた。

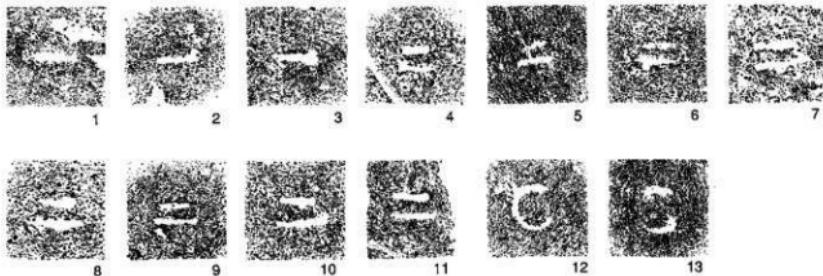
**刻印** 29点中13点に刻印が押されていた（第49図、図版20）。押された場所は平の一面、一ヶ所に限られる。刻印は「一」、「二」、丸の一端が欠けた「C」字状の3種類である。同じ種類でも字形に微妙な差異があることから、複数の印が想定される。刻印の押された煉瓦は窯の内外から出土しており、字形によって出土地点が

異なるような状況は見られなかった。

目地材 砂目地と呼べるほどに砂の含有が多い土が用いられている。

未焼成の煉瓦 未焼成で墨色の煉瓦がある。窯の床材として用いられていた他、窯の基礎部分への埋め込み材にも用いられていた。第56図22は焼成室の出入口と推定される床面に用いられ、角が取れ丸く摩滅している。

その他 数点の煉瓦に絆状の繊維圧痕が残されていた（第55図25・29、図版20）。繊維痕はすべて長手一面の一部に見られ、煉瓦の端部から斜めに残されていた。先端がほつれているものもあった。成形から乾燥段階で付いた可能性が高い。



第49図 煉瓦刻印

#### (4) 煉瓦窯に関する考察

今回発見された窯は、地元の言い伝えや各種文献から、明治時代、中央線の鉄道敷設工事に際して築かれた煉瓦生産用の窯であることがわかっている。東京都八王子から山梨県甲府を結ぶ中央線（中央東線）の建設は、明治29年12月～同36年6月にかけて行われた。八王子・甲府間は小仏や笹子町など「山岳重疊地勢駿敏」であるため、中火線全線の中でも最難工区とされた<sup>(1)</sup>。このため、駅舎の他に多数の橋梁や隧道が建設され、建築材として莫大な量の煉瓦が必要とされた。煉瓦は当初、主に埼玉県深谷の日本煉瓦製造会社で製造され、八王子から小仏町を越えて運搬されていたが、小仏町以西については中央線沿線の各所に煉瓦製造所が設けられ、現地生産が図られたようである。当時の煉瓦工場は、市内では四方津とハツツに、周辺では山梨県勝沼町奥野田<sup>(2)</sup>、神奈川県津久井郡相模湖町与瀬が知られている。このうち四方津工場が本遺跡に当たる。

##### ① 四方津工場

工場は今回の調査地にあたり、地元では「レンガ場」と呼ばれている。中央線沿線に位置し、国道20号や桂川・鶴川に近く交通の便が良い地域である。工場は明治32年に大倉土木組（現在の大成建設）が鉄道作業局の請負で操業された。大倉土木組が鉄道作業局に提出した請負契約解除に関する文書「煉化石納入請負契約解除之義ニ付御願」明治33年1月15日（以下、文書と呼ぶ）には、四方津工場に「壱袋五千個入り式拾袋アリ合計拾萬個」の煉瓦製造可能な窯を設け、明治32年5月～12月までの契約期間で日夜製造に従事したことが記されている<sup>(3)</sup>。しかし、工場の操業は予定どおり進まず、排出される煤煙のため周辺の桑園に被害が出るとして地元より操業中止が要請され、さらに10月の暴風雨により工場が損壊したなどの理由で度々操業が中断し、結局、契約不履行を余儀なくされている。

煉瓦の製造工程には、原土の採取・整地（粉碎・ねかせ）、砂との混練、成形、乾燥、焼成がある<sup>(4)</sup>。先の文書には「煉瓦石碗窯」、「抜小屋」（成形作業用の建物）、「白地乾燥場」（素地の天日乾燥場）や、薪材や出荷前の煉瓦製品を備蓄したことが記されており、工場で一連の製造を行っていたことがわかる。原土や薪材の採取地は明らかでないが、煉瓦の現地生産体制を考えれば工場の近隣で貯蔵していた可能性が強い。このことは、これまでの試掘調査で国道側平垣面の地下1m程度に粘土堆積が広範囲に確認されていることからも裏付けられる。

煉瓦製品は、当時完成間もない国道20号（川辺新道）や臨時の輕便鉄道、さらに舟運を利用して、東方の関野村（現在の神奈川県藤野町）にあった鉄道作業局の備蓄施設へ運搬され、途中、上野原駅下の新田河原に留め置かれていた。

##### ② 煉瓦焼成窯

今回の調査は1m幅の試掘で止まったため、窯の全容を把握するには至っていない。幸い、先の文書に窯の様子が断片的に記されていたので、その内容などを援用しながら調査結果を考えてみたい。

窯の平面は長軸約23m・幅8mの長方形と推定されるが、主軸方向の両端が不明確となっている。今回の調査では明らかにできなかったが、窯の上端に長大な煙突があったものと思われ、煙突が窯の本体から離れて位置していたことも考えられる<sup>(5)</sup>。一方、窯の下端では、燃焼室と見られる幅の短い1室目が検出されたことから、この前面の壁を窯本体の南壁と捉えた。しかし、この壁の前面にも煉瓦の配置が見られることから小規模な付属施設の存在も想定できる。

焼成窯は2～5室目が同規模で、1室あたりの平面規模は、基底面で1.8～1.9m×8m、狭間穴や壁を除いた内法は約1.3m×7.3m（約9.5m<sup>2</sup>）と推定される。この規模で窯を均等に割り付けると焼成窯は10室程度が想定される。一方、先の文書の中で、窯は「壱袋五千個入り式拾袋アリ合計拾萬個也。但し平均一昼夜之焼上

高ハ式袋ニシテ都合各万個ハ毎日製造シ得ル様高ナリ」と記され、1室5,000個の煉瓦製造可能な焼成窯が20室あったと解釈できる<sup>(6)</sup>。想定した数と異なるが、あるいは、同規模の窯が複数あった可能性もある<sup>(7)</sup>。

調査では、焼成窯床面を粘土で張り替えたと見られる箇所や、基底部の二重構造など、窯の補修・改築をうかがわせる結果が得られた。文書には暴風雨による四方津工場の被害が記されており、「四方津焼窯ハ其大半ヲ潰崩シ」、抜小屋2棟、白地乾場に被害が生じ、復旧に40日間程度を費やしたとあり、大規模な修復作業のあったことがわかる。このことが調査結果と直接結び付くかは不明であるが、補修・改築の可能性を裏付けるものといえる。なお、11月下旬に復旧が完了して以降は、嚴寒時期のために白地（素地）の製造が不可能となってしまい、結局操業を中止している<sup>(8)</sup>。このことから、本窯の操業は明治32年5月～12月までの極めて短期間だったことがわかる。

今回の調査で発見された煉瓦は、未焼成のものも含めて全般に砂礫が多く含まれており、礫が表面に露出して亀裂の原因となっているものも見られた。とくに未焼成の煉瓦は当工場で製作された可能性が高いことから、本窯で焼成された製品も質の劣るものが多かったことが想定される。このことは、当工場の操業主である大倉土木組が製造した煉瓦が粗悪品であったと伝えられていることからも裏付けられる<sup>(9)</sup>。

本窯は、郷土の近代化を象徴する遺構として、関係者のご努力により現地保存の措置が図られた。現状で見ることはできないが、近隣民家の庭先等には当時の余剰煉瓦が使われ、往時をしのぶことができる。

なお、この調査にあたり多くの方々からご指導・ご教示を賜った。とくに、財鉄道総合技術研究所の小野川滋氏には現地指導から各種文献のご教示にいたるまで種々のご配意をいたたいた。記して感謝申し上げます。

(1) 『日本鉄道請負業史明治篇』鉄道建設業協会1967

(2) 室伏徹氏ご教示。

(3) この文書は鉄道総合技術研究所の小野川滋氏にご教示いただいた。本窯や煉瓦製造の実態を知るうえで貴重な資料である。

(4) 木野信太郎『日本煉瓦史の研究』1999

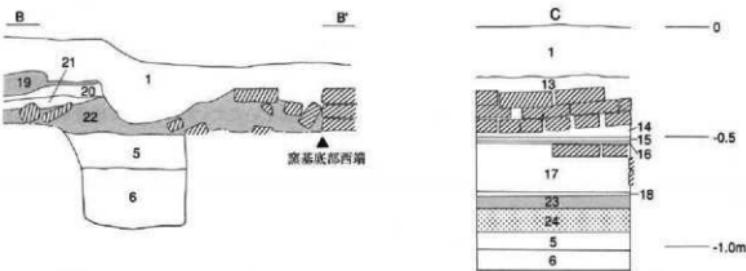
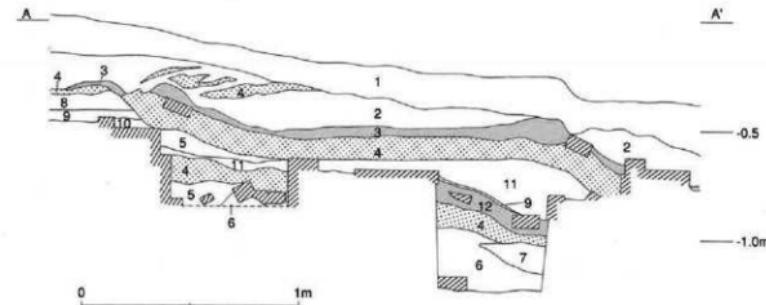
(5) 明治35年発行の『煉瓦要説』や、明治時代から続く福島県喜多方市の三津谷の登り窯（煉瓦・瓦の焼成窯）では、煙突は窯の中軸線の延長に1基設けられ、焼成窯とは煙道を通して結ばれている。煙道は『煉瓦要説』では地上に設置されるものとし、三津谷の登り窯は地下に構造されている。

(6) 本窯で実際に1室5,000個の煉瓦が焼成可能なのかは判断できない。ちなみに福島県喜多方市の三津谷の登り窯は、1室が高さ・幅ともに約1.1m、長さ4.5mの規模で、1室あたり煉瓦約1,000本が焼けるという（北村悦子「喜多方の煉瓦窯」1989）。これを単純に1室あたりの床面積で比較すると、本窯は三津谷の1.5倍程度となる。

(7) 地元の言い伝えによると、登り窯は2～3窯並列していたという。

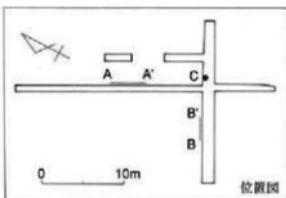
(8) 明治33年3月7日に契約標示が認可されている。

(9) 前掲『日本鉄道請負業史明治篇』、277頁。この中で、与瀬・古野間（現在の相模原町と藤野町）の工区に必要な煉瓦製造を大倉土木組が請け負い、「……近くに煉瓦石製造所を設け附近の土にて製出したのであるが、土質不良にして本質的に煉瓦製造に適せず、製出煉瓦はガサガサにて粗悪脆弱弱用に堪えず、関係者之を悉口してカステラ煉瓦と称した所である。」と記されている。当時、大倉土木組の煉瓦製造所は現在の上野原市と相模原市にあった。本件は小野田滋氏にご教示いただいた。

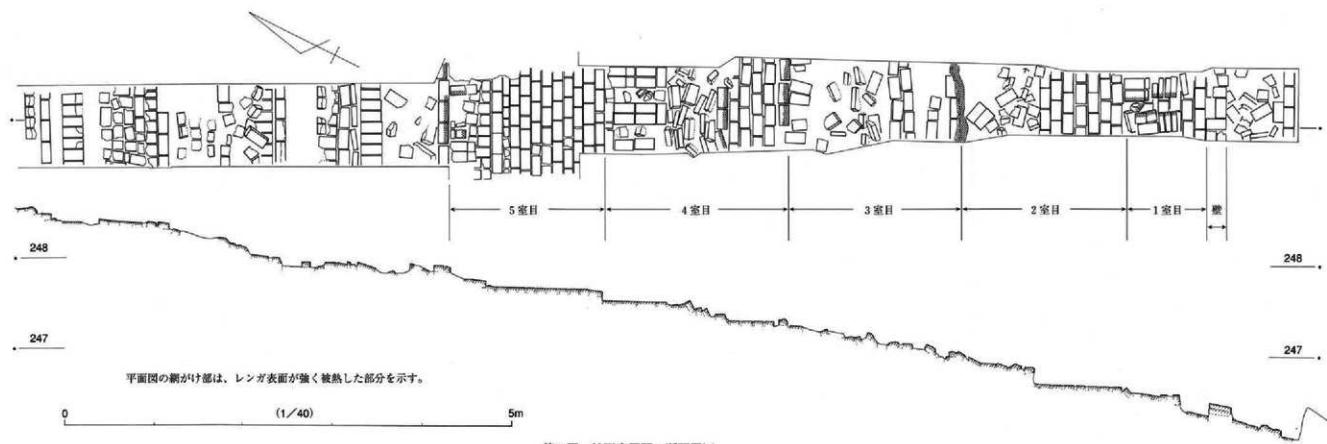
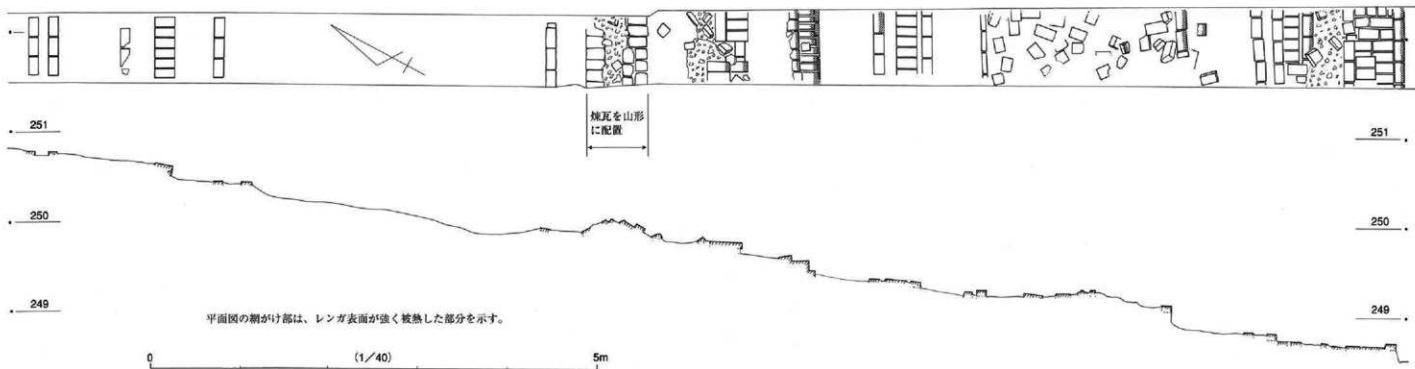


#### 煉瓦窯土層

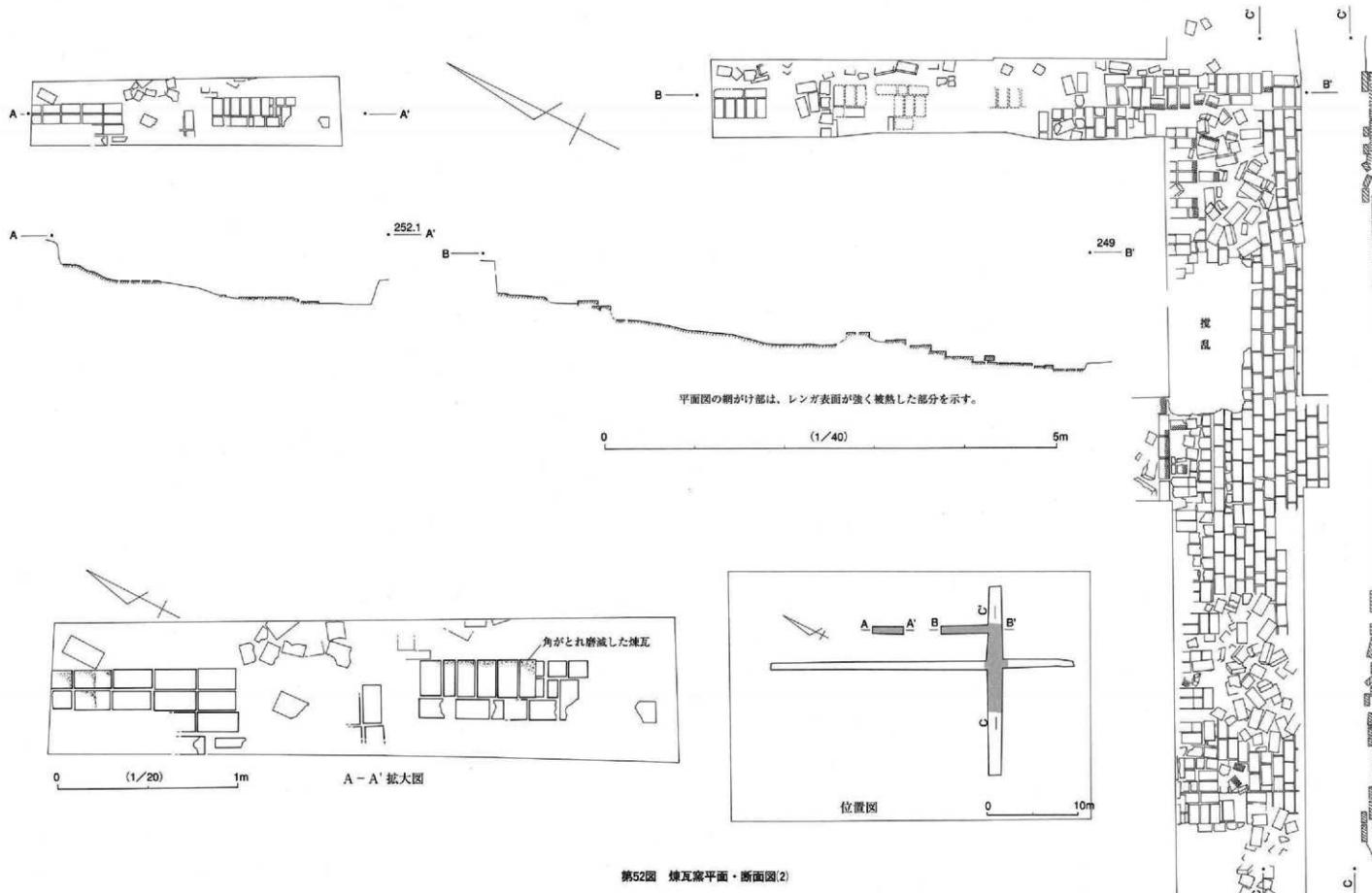
- 1 表土 耕作土  
 2 薄紫色砂層 煉瓦片、焼土塊（1cm以下）多く含む。  
 灰色・紫色砂粒が板状（厚さ5mm～1cm）に弱く固結したものが下層に散在する。  
 3 烧土 第4層上部が焼土化したもの。  
 4 黄褐色シルト質粘土  
 5 薄黒色シルト質粘土 第4層との境は漸移的。白色の  
 粘土粒（1mm以下）を多く含む。石英粒・  
 砂粒（3mm以下）、未焼成の黒色煉瓦片  
 を含む。
- 6 黄褐色土 粘性・緑まりなくバサバサ。  
 第5層由來の黒色土・ローム塊を多く含む。  
 7 黒色土 粘性・緑まりなくバサバサ。  
 8 赤色砂層 灰色砂粒が弱く固結したものの（5mm～1cm）を含む。  
 9 赤色砂層 乾燥すると白色化。塊（2mm以下）を  
 多く含む。  
 10 煉瓦細片  
 11 薄紫色砂層 砂粒は弱く固結（5mm～7mm）する。  
 12 紫色燒土層 小石を多く含む。  
 13 紫色砂層  
 14 紫色砂層  
 15 灰色砂層 硬質。  
 16 紫色砂層 砂粒はきめ細かい（1mm以下）。  
 17 明赤褐色 周囲焼き締まる。粒子は粗い。  
 18 灰色砂層 軟質  
 19 燃土  
 20 赤灰色土 緑まり強い。  
 21 にぶい赤褐色 緑まり強い。焼土粒・炭粒を含む。  
 22 燃土 煉瓦片を多量に含む。  
 23 燃土 第24層上部が焼土化したもの。  
 24 第4層（黄褐色シルト質粘土）に類似する。粘性なく  
 バサバサ。緑まり強い。第5層由來の  
 黑色土（1mm以下）を多く含む。



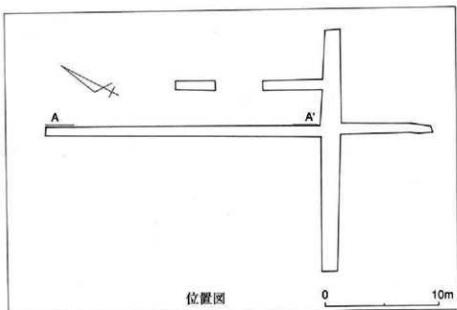
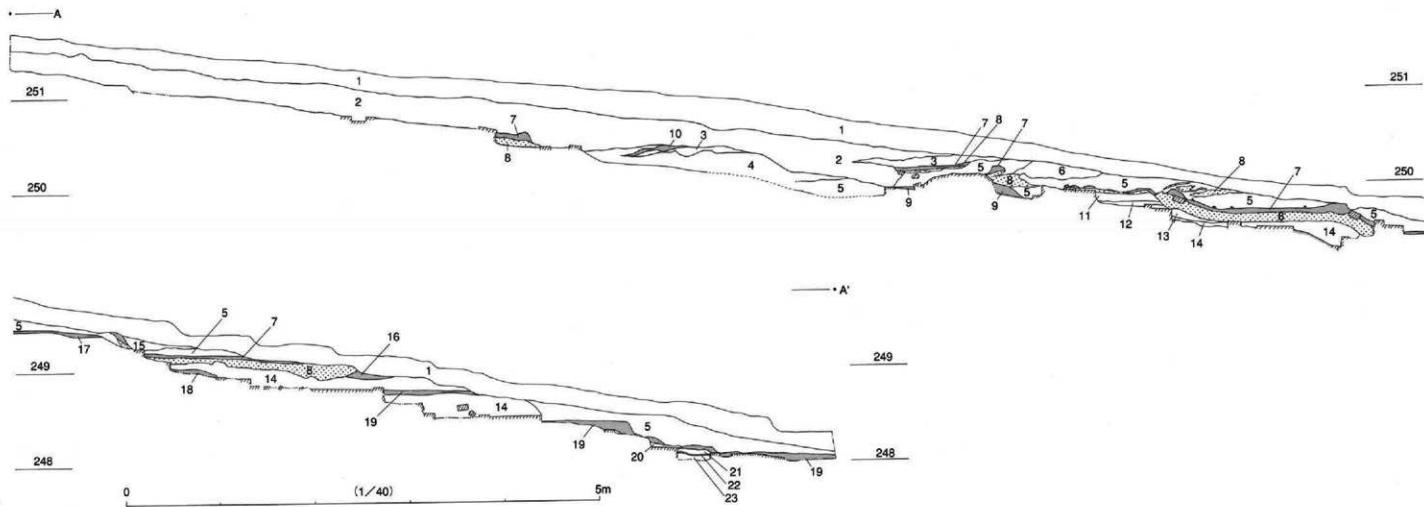
第50図 煉瓦窯土層図



第51図 煉瓦窯平面・断面図(1)



第52図 煉瓦窯平面・断面図2)



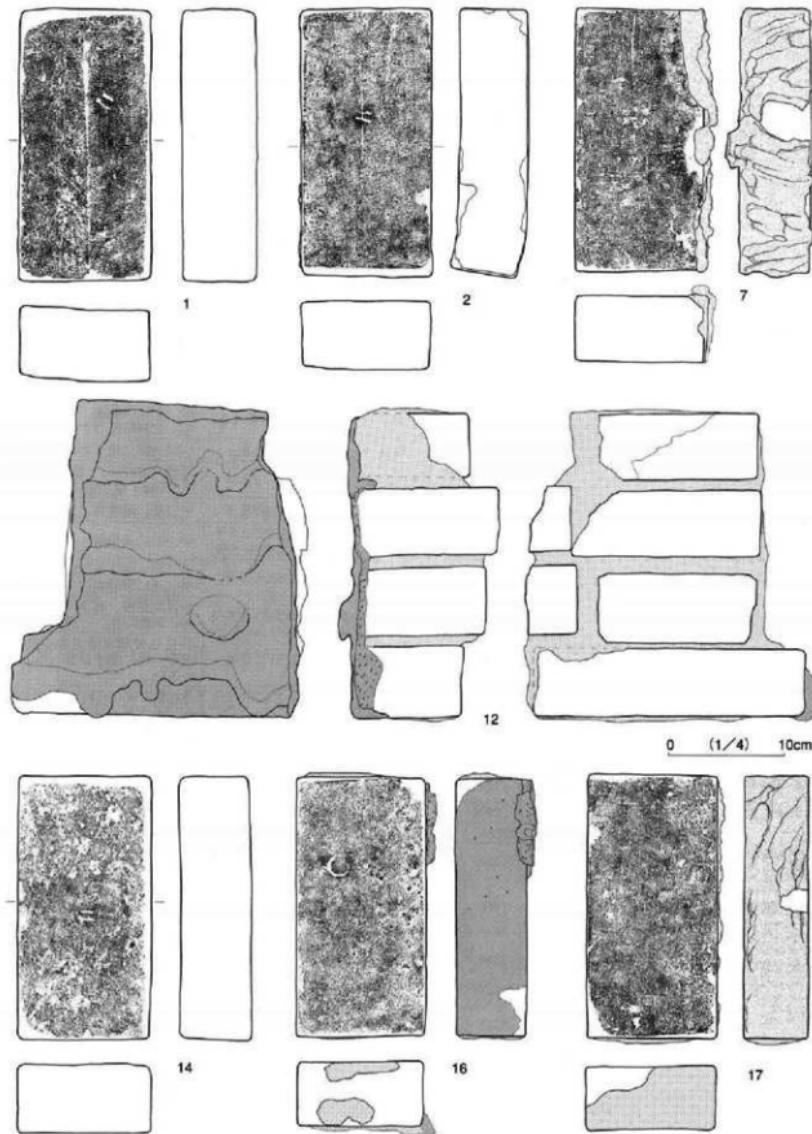
第53図 煉瓦窯土層図

- 煉瓦窯土層
- 1 黒色土層  
耕作土。
  - 2 砂質洗土  
砂よりも多い黄色土粒・塊を多く含む。燒瓦繙片を含む。
  - 3 黑褐色土  
砂よりも多い焼土粒・塊を含む。
  - 4 砂質洗土  
第3層由来の黒色土 (1cm以下)、黄褐色粘土粒・塊を含む。
  - 5 黑紫色砂粒  
燒瓦粒、燒土塊 (1cm以上) 多く含む。灰色、灰紫色砂粒が板状 (5mm~1cm) に弱く固結したもののが下層に存在する。
  - 6 第五層・第七層  
第5層上部が焼土化したもの。
  - 7 焼土  
第5層上部が焼土化したもの。
  - 8 黄褐色シルト質粘土  
砂質は弱く固結 (5mm~7mm) する。
  - 9 細色砂質  
砂粒は弱く固結 (5mm~7mm) する。
  - 10 砂質土層  
灰色砂粒が弱く固結したもの (5mm~1cm) を含む。
  - 11 黄褐色土  
乾燥すると白色化。塊 (2mm以下) を多く含む。
  - 12 灰色砂質  
黑色砂質と薄い層との境は漸移的。白色的砂土粒 (1cm以下) を多く含む。
  - 13 黑黑色シルト質粘土  
第5層との境は漸移的。白色的砂土粒 (1cm以下) を多く含む。
  - 14 黄褐色砂層  
砂質。
  - 15 黄褐色土  
砂質。
  - 16 土層  
硬質。
  - 17 砂質土  
砂粒は弱く固結 (1cm以下) する。
  - 18 砂質土  
粗粒。
  - 20 黄褐色砂質土  
硬質。
  - 21 黄褐色土  
粗粒。
  - 22 費砂層  
粗粒。
  - 23 砂質土  
粗粒。

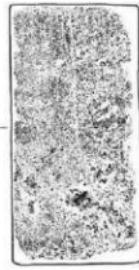
No	出土地点	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	刻印	焼成	色 調	備 考
1	遺構外(西側散乱部)	232	111	60	2520	一	やや不良	橙色 5YR 6/8	
2	+	224	110	55	2400	一	良	暗赤色 10R 3/4	長手一面に自然釉。変形し亀裂が生じる。
3	+	223	108	57	2230		やや不良	赤褐色 10R 5/4	
4	+	227	108	58	2330		不良	純い赤褐色 2.5YR 5/4	半二面に調整痕、一面に指頭痕。長手二面に粘土塗布(厚さ3~5mm)。
5	+	239	152	55	2830		良	赤灰色 2.5YR 5/1	変形し亀裂が生じる。平一面に重ね痕。
6	+	224	109	57	2140		不良	灰赤色 2.5YR 6/2	平一面に調整痕、一面に指頭痕。小口一面に砂目地(厚さ3mm)。
7	焼成窯の床面直上	225	114	59	2375		不良	赤褐色 10R 5/4	平二面に調整痕。長手一面に粘土塗布(厚さ2~15mm)。
8	+	230	115	59	2280		やや不良	純い橙色 2.5YR 6/4	半一面に調整痕。砂目地付着。長手一面に粘土塗布(厚さ3~8mm)。
9	焼成窯の床面直上	223	111	58	2150		やや不良	純い粉色 2.5YR 5/4	平二面に調整痕。小口一面に粘土塗布(厚さ2~5mm)。
10	+	235	104	56	2385		良	灰赤色 2.5YR 6/2	平二面に調整痕、一面に指頭痕。変形し亀裂が生じる。
11	遺構外(東側散乱部)	234	111	58	2200		不良	赤褐色 10R 5/4	小口一面に粘土塗付(4~7mm)。窓跡。幅270mm×横250mm×厚さ125mm。重さ8600g。
12	+	-	-	-	-		やや不良	純い橙色 2.5YR 6/4	
13	東壁基底部	228	112	58	2335		やや不良	純い橙色 2.5YR 6/4	平二面に調整痕。
14	焼成窯床面	225	113	58	2345	一	不良	明赤褐色 2.5YR 5/8 純い橙色 2.5YR 6/3	平一面に調整痕、指頭痕。
15	西壁基底部	226	111	59	2020		不良	橙色 2.5YR 6/8	平二面・長手一面に調整痕。平一面に指頭痕。
16	燃焼室前面	225	111	59	2325	C	不良	純い橙色 2.5YR 6/4	砂目地付着。長手一面に自然釉、纏織状痕。
17	焼成窯隙間孔	228	114	57	2210		やや不良	橙色 2.5YR 7/6	砂目地付着(厚さ3mm以下)。長手一面に粘土塗布(厚さ1~5mm)。
18	焼成窯の床面直上	225	112	58	2155	C	不良	純い橙色 2.5YR 6/4	砂目地付着。小口一面に自然釉。
19	+	228	110	58	2100	一	やや不良	灰赤色 2.5YR 5/2	平二面に指頭痕。
20	焼成窯床面	226	110	58	2290	一	やや不良	明赤褐色 2.5YR 5/8 赤褐色 10R 4/3	平一面に指頭痕。砂目地付着。
21	焼成窯の床面直上	228	110	58	2125	一	不良	純い橙色 2.5YR 6/4	平一面に指頭痕。長手一面に纏織状痕。
22	東壁基底部	(118)	107	55	(1250)		未焼成	灰褐色 7.5YR 6/2	角が取れ、丸く摩滅する。
23	+	(113)	114	58	(1085)		未焼成	灰褐色 7.5YR 6/2	角が取れ、丸く摩滅する。
24	窓基底部の掘り戻し 覆土上	(156)	110	59	(1245)		未焼成	灰褐色 7.5YR 6/2	
25	焼成窯の床面直上	230	110	55	1880	一	不良	淡赤褐色 2.5YR 7/4	平一面に指頭痕。長手一面に纏織状痕。小口一面に粘土塗布(厚さ3~5mm)。
26	+	230	109	58	2280	二	やや不良	赤灰色 2.5YR 5/1	平一面に指頭痕。小口一面に粘土塗布(厚さ2~7mm)。長手一面に重ね痕。
27	+	(220)	110	58	(1785)	一	良	灰赤色 2.5YR 6/2	平一面に指頭痕。小口一面に粘土塗布(厚さ2~5mm)。
28	+	230	111	58	2365	二	やや不良	淡赤褐色 2.5YR 7/4	平一面に指頭痕。長手一面に纏織状痕。小口一面に粘土塗布(厚さ3~5mm)。
29	+	229	112	58	2120	二	やや不良	灰赤色 2.5YR 6/2	

焼成の基準はつぎのとおり。良：緻密で、叩くと金属音がする。やや不良：緻密だが、叩くとやや純い音がする。不良：叩くと空虚な音がする。

第6表 燃瓦観察表



第54図 煉瓦実測図(1)



18



19



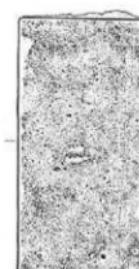
20



21



25



26



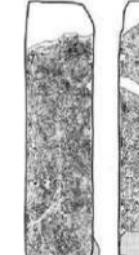
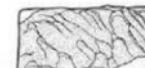
25



27



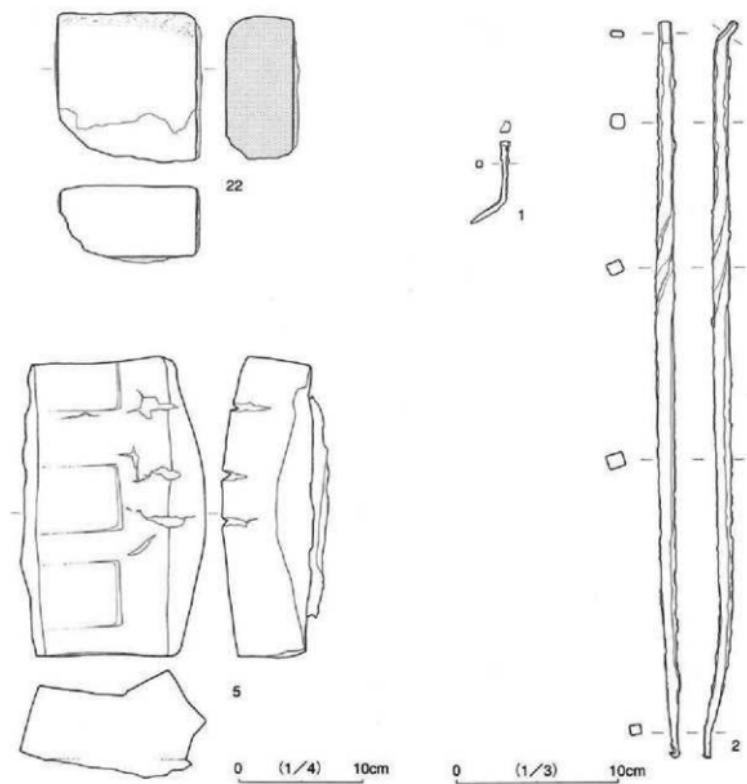
28



29



第55図 燐瓦実測図(2)



目地土



砂混じり粘土

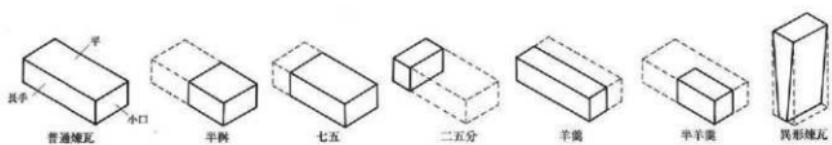
番号	出土区・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
1	窯西側の煉瓦散乱部	釘	6	0.3	0.3	1	頭方形
2	燃焼室前面の煉瓦散乱部	不明	46	0.9	0.9	150	火かき棒?

鉄製品



ガラス状に硬化した範囲

第56図 煉瓦実測図(3)、鉄製品



第57図 煉瓦の形状と種類



第58図 中央線沿線図

明治43年 5万分の1地図

## 14 根本山遺跡

根本山遺跡は市街地の背後に位置する根本山（標高322m）南斜面に位置し、縄文・平安時代の遺物散布地である。今回の調査地点は4箇所で、これ以前の発掘調査例はない。

### 第1地点

調査目的 分譲宅地造成工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字新町1364-1他

調査期間 平成10年10月28日～11月13日

調査面積 130m<sup>2</sup>（対象面積2,200m<sup>2</sup>）

### 概要

調査地点は遺跡南端の緩斜面に位置する。工事予定地の畠地に巾1m・長さ10～40mの試掘溝を9ヶ所設定し、最深2mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。多くの試掘溝で湧水が確認されたため、湧水部以下の掘り下げは行わず、一部深掘りして層序を確認するに止めた。調査の結果、湧水がない斜面上方で縄文及び古墳～平安時代の遺構・遺物が集中して確認されたため、事業者と協議の上で遺跡範囲を盛土保存とした。

#### （1）基本層序

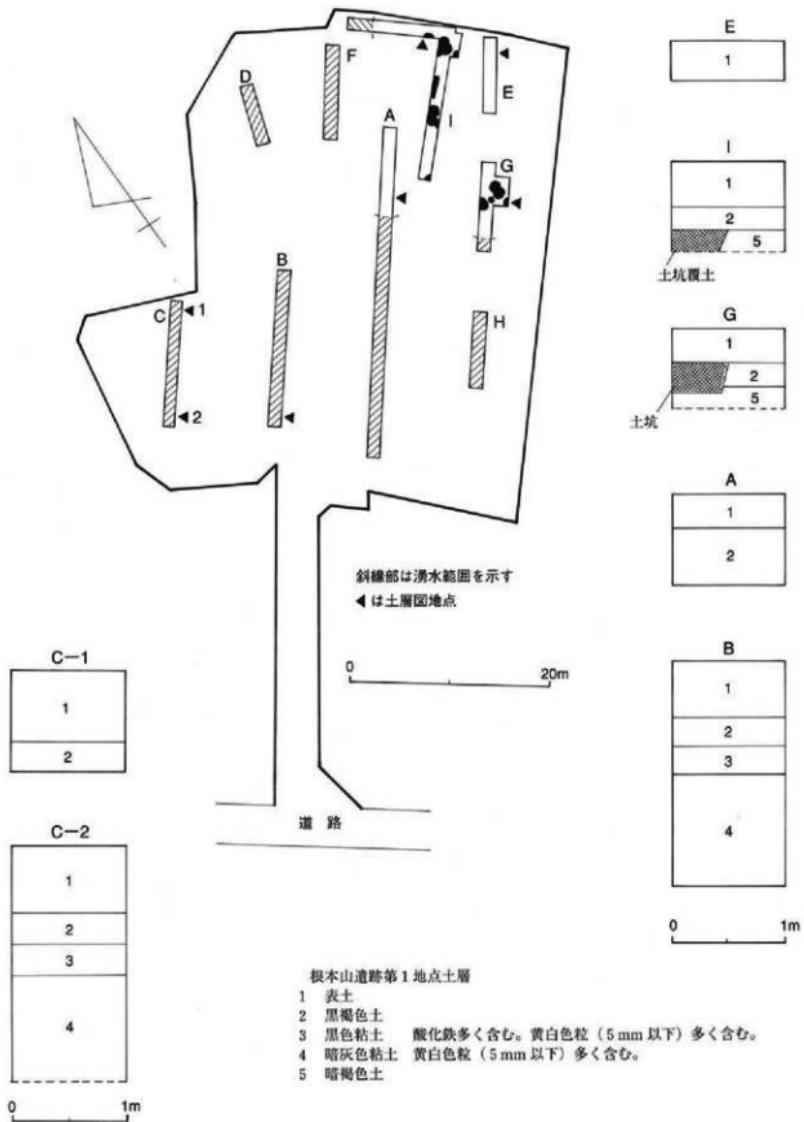
層序は湧水の有無で異なった。斜面上方では湧水がなく、表土（耕作土）・黒褐色土・ローム層の順で堆積が見られたが、湧水地では黒褐色土とローム層の間に黒褐色粘土および黑色粘土が介在する。層厚は全般に斜面下方に向かって厚くなり、ローム層まで最深2mであった。



第59図 遺跡位置



第60図 調査地点



第61図 第1地点調査区平面・土層図

## (2) 遺構と遺物

### 遺構（第62図・図版4）

円形土坑8基、方形土坑2基を検出した。この他、Iトレンチで円形土坑が複数重複したものと思われる黒色プランを1ヶ所、円形プランを1基確認した。すべて斜面上方に偏在する。

検出した土坑は1号～10号上坑である。以下、発見されたトレンチ別に説明する。

#### Gトレンチ

1号～6号土坑が、ローム層上面に集中して確認された。互いに重複するものが多い。4号土坑を除きすべて円形基調の平面で、直径は0.9m（5・6号）、1.2m（3号）、1.3m（1号）、1.6m（2号）である。確認面からの深さは0.1～0.3mだが、2号土坑は表土直下から黒褐色土を掘り込んでいて最深0.6mを測った。壁はいずれも急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は地山のローム塊・粒を含む暗褐色土が主体で、1号土坑は多数の礫（5～20cm大）を伴う。

4号土坑は平面長方形を呈すると思われ、主軸の長さは残存値で1.5m・幅0.7mである。確認面からの深さは0.1mを測る。断面形や覆土は円形土坑と共通する。

1号～6号土坑を通して、礫以外の出土遺物はない。

#### Iトレンチ

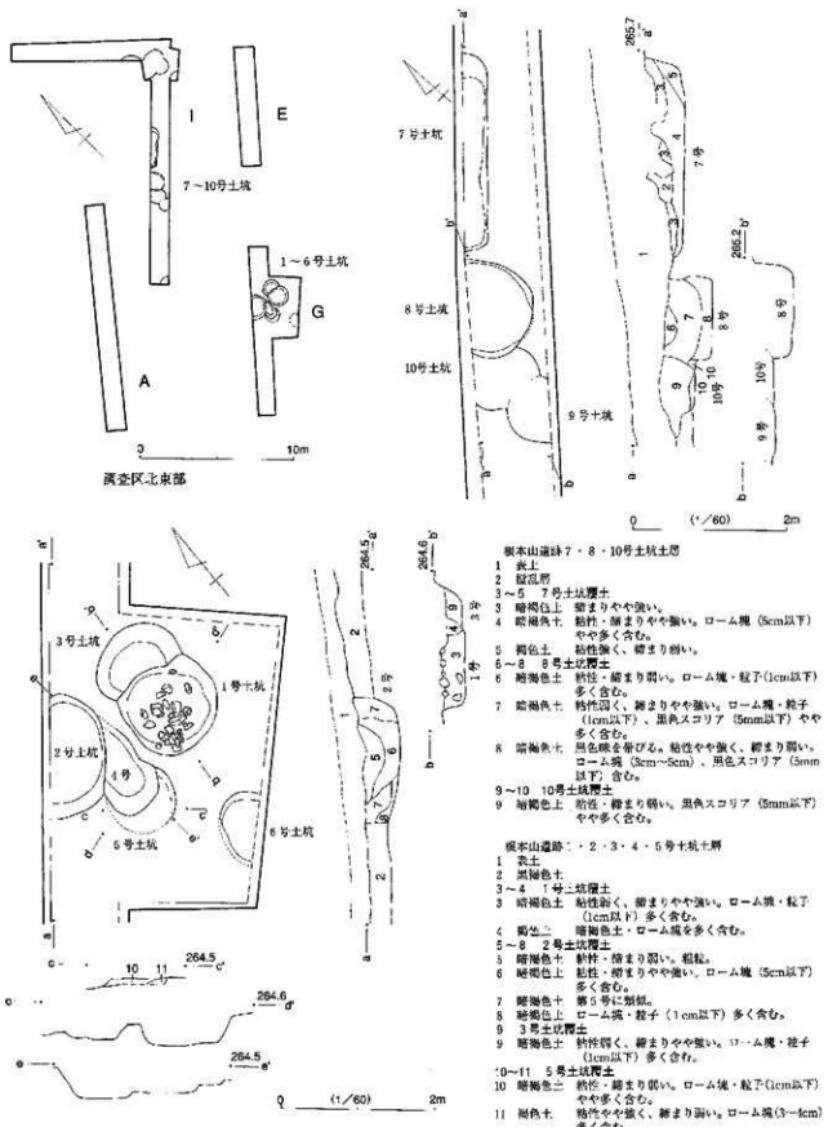
7号～10号土坑が、ローム層上面に集中して確認された。

7号土坑は大半が調査区外にかかるため平面規模は不明確だが、方形を呈するものと思われる。竪穴状を呈する可能性もある。壁の1辺は2.6mであった。壁は急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は地山のローム塊・粒を含む暗褐色土が主体である。出土遺物は、覆土中から土器の細片6点が出土し、この中には縄文上器、土師器が含まれる。

8号～10号土坑は7号土坑に近接し、互いに重複する。すべて円形基調の平面で、直径は約0.9m（9・10号）、1.3m（8号）であった。確認面からの深さは8号土坑が0.6m、9号・10号は0.1mである。8号土坑の壁はオーバーハング気味に立ち上がる。底面は平坦である。9号・10号の壁はいずれも急激に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は、8号土坑が黒色スコリアを含む黒色・暗褐色土、9号・10号土坑は地山のローム塊・粒を含む暗褐色土が主体である。出土遺物は、8号土坑の覆土中で縄文土器の細片3点、下層中の床面から数cm上で土師器の細片2点が出土した。

なお、Iトレンチには、プラン確認に止めた遺構があるが、これはすべて平面円形を基調とするもので、覆土や規模・立地から、検出済みの円形土坑と同種のものと推定される。

以上の遺構は、平面規模や覆土の類似性、群集して立地するなどの点から齊一性の強さが指摘できる一方、多量の礫を伴う1号土坑や、掘り込みが深く覆土を貫にする8号土坑のように異質な要素も認められる。遺物は少なく、唯一遺物を伴う土坑（7号・8号）では縄文上器と土師器の細片が覆土中に混在する状況であった。土器片は微細であるため詳しい時期区分は困難である。このため、遺構の性格や時期については現段階で不明といわざるを得ない。



第62図 第1地点造構平面・土層断面図

### 遺物（第63図・図版4）

縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石器がある。黒褐色土中の出土が多く、とくに無済水地で立った。

1～19は縄文土器の深鉢片である。1、円筒形を呈し、矢羽状の集合沈線文が施される。胎土に金雲母を含む。器厚9mm。2、横位のキャビラ文。3、低平な隆帯上に三叉文。4、条線地に屈曲・蛇行する船ト紐を貼付。5、縄文地に半裁竹管による横位の平行沈線文。6、直線的に大きく聞く口縁で、端部は内折する。7、波状口縁で、微隆起線による区画内に縄文が施される。8、波状口縁で、弧状の沈線による区画内に縄文が施される。沈線上に円形刺突文。9～15、沈線区画の縄文を屈曲、弧状に配する。16、口縁部に突起を有し、幅広の沈線・円形刺突文が施される。17、多条の沈線文を縦位に配する。18、球状に張る脛部に沈線区画の縄文が施される。19、波状口縁で、端部上面に刺みが連続して加えられる。器厚5mm。

以上のうち、1、中期初頭・五領ヶ台式。2～3、中期中葉。4～6、中期後葉・曾利式期。7～15、中期末～後期初頭・称名寺式期。16～18、後期前葉・堀之内式。19、後期後葉・加曾利B式にそれぞれ比定される。20は縄文土器の浅鉢と思われる底部で、内外面に赤彩を有する。

21は弥生土器と思われ、Iトレンドチ黒褐色土から出土した。外面に斜位の条痕文が交錯する。胎土は砾（1～3mm大）を含む。色調は外面黄褐色、内面橙色。器厚4mm。

22は須恵器壺の頸部。土器は、この他に土師器や灰釉陶器が出土しているが、細片のため図示できない。

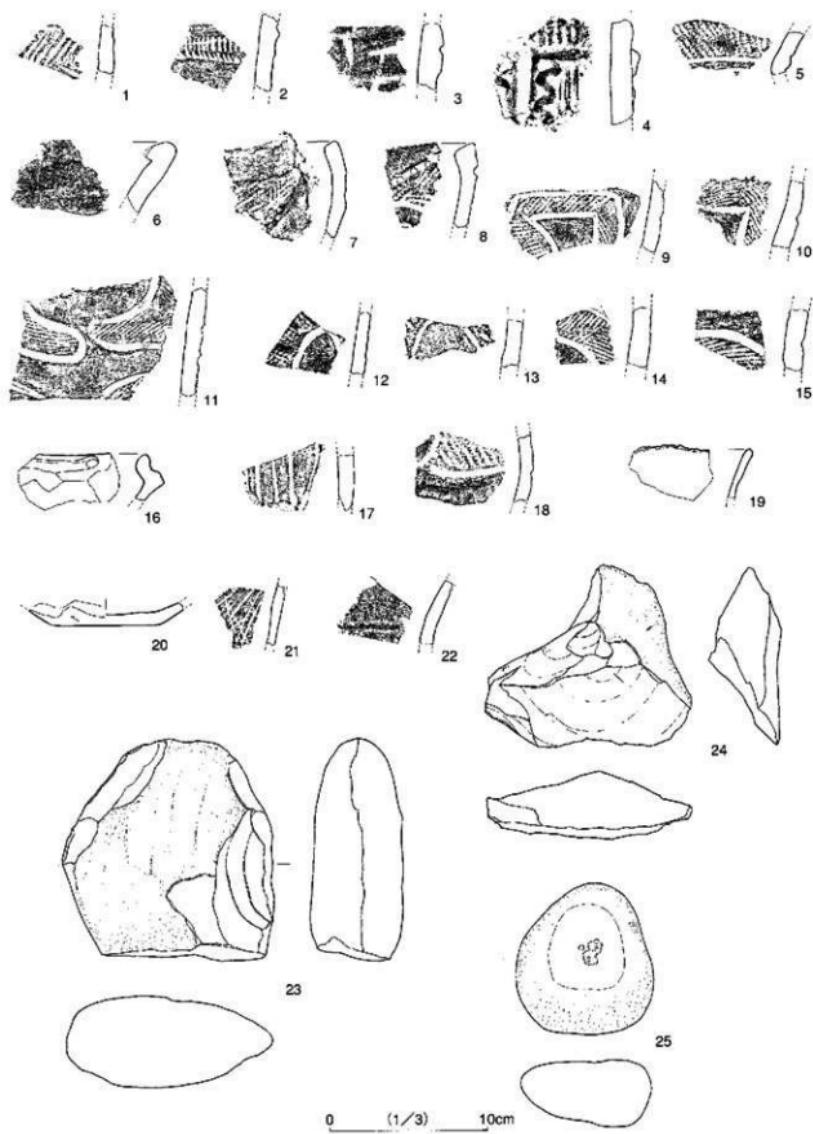
23～25は石器で、いずれも縄文時代に比定される。23、礫器。側面を両側から大きく打ち欠き整えている。一端は欠損している。現存長14.0cm・幅13.3cm・厚さ6.0cm・重さ1555g、ホルンフェルス。24、石匙。長さ13.0cm・幅11.0cm・厚さ4.0cm・重さ410g、凝灰岩。25、磨石。磨面中央に点状打痕が集中する。長さ9.5cm・幅8.7cm・厚さ4.4cm・重さ525g、玄武岩質溶岩。

以上の出土地点は、多くがIトレンドチである。この他は、Aトレンドチ（2・9・10・14）、Bトレンドチ（15）、Dトレンドチ（6）、Eトレンドチ（11）、Gトレンドチ（3・22）である。

試掘坑	縄文時代		古墳～奈良・平安	近世以降	種
	土器	石器			
A	23（中期1・後期3）	2（打製石斧・磨石）	7（土師器6・灰釉陶器1）		10
B	4（後期2）	2（加工痕ある剥片）	2（土師器）		1
C	2				2
D	4（中期1・後期2）				1
E	9（後期2）	1（石匙）	1（土師器）	1（陶磁器）	7
F	2（中期末～後期1）		2（土師器）		
G	10（中期1・中期末～後期2）		4（土師器3・須恵器1）	1（瓦）	2
H	2（後期1）		1（土師器）		1
I	75（中期10・後期13）	2（石皿1・黒曜石剥片1）	19（土師器18・須恵器1）	7（陶磁器）	37
合計	131	7	36	9	61

第7表 標本山遺跡・第1地点出土遺物集計表

( ) は内訳



第63圖 第1地点出土遺物

## 第2地点

調査目的 道路造成工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原1391他

調査期間 平成11年6月29日、7月1日

調査面積 20m<sup>2</sup>（対象面積404m<sup>2</sup>）

### 概要

調査地点は遺跡南端の養鶏場跡地である。工事予定地に巾1m・長さ10mの試掘溝を2ヶ所設定し最深1.5mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、養鶏場造成時のものと見られる客土がハードローム層にまで達しており、大きく搅乱を受けている状況が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、遺跡の可能性は低いものと判断された。

なお、養鶏場跡地の北西側に隣接する畠地で縄文土器、石器を表探したので併せて報告する（第64図）。

1、口縁が大きく開く深鉢で、頸部に波状の貼付文を有する。2、縦位の沈線区画内に条線・蛇行沈線文。3・4、櫛歯状の刺突文。5、微降起線区画の縄文が配される。6、沈線区画の縄文。以上のうち、1～5は中期後葉・曾利式期。6は後期初頭・称名寺式にそれぞれ比定される。7は石器で、平滑な磨面に凹み1孔を有する。縄文時代に比定される。現存長27.2cm・幅18.4cm・厚さ10.8cm・重さ6940g。

## 第3地点

調査目的 分譲宅地工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字新町1334-2他

調査期間 平成13年11月26日

調査面積 8m<sup>2</sup>（対象面積2,552m<sup>2</sup>）

### 概要

調査地点は遺跡南端の養鶏場跡地である。工事予定地に巾0.5m・長さ16mの試掘溝を1ヶ所設定し、深さ1.0mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、養鶏場造成時のものと見られる客土がハードローム層にまで達しており、大きく搅乱を受けている状況が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、遺跡の可能性は低いものと判断された。

## 第4地点

調査目的 個人住宅建設に伴う試掘調査

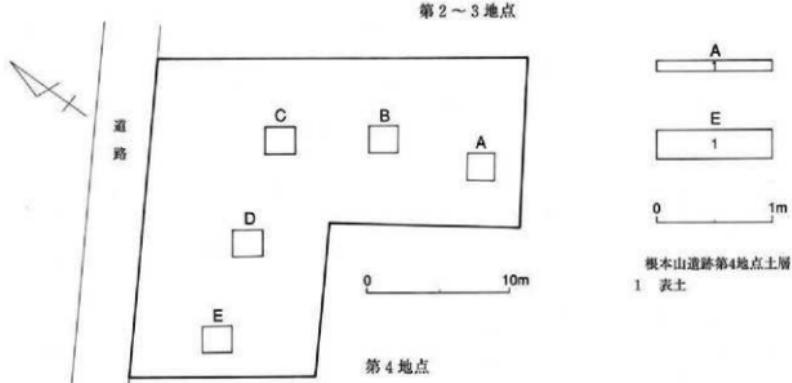
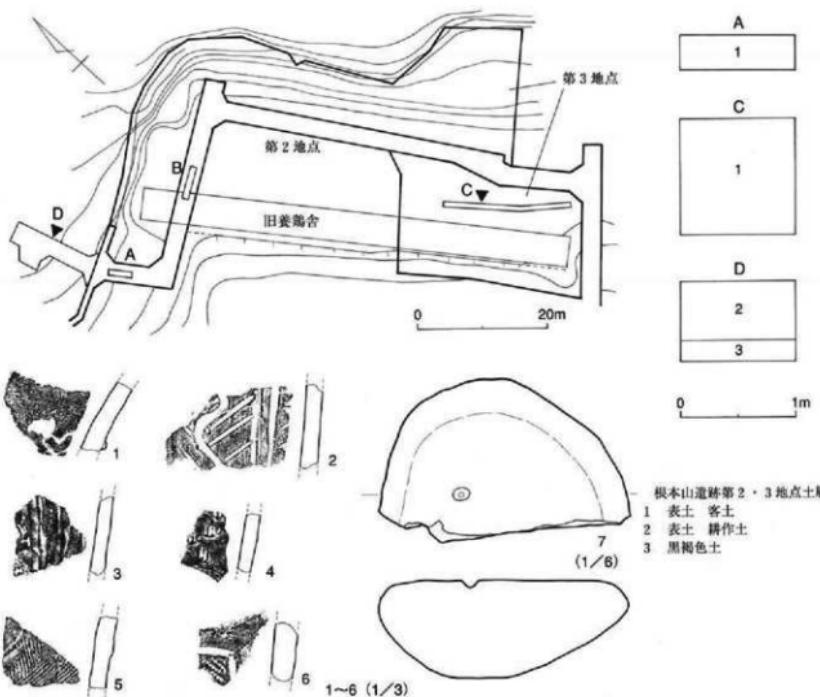
調査地 上野原市上野原字新町1435-1他

調査期間 平成14年5月13日

調査面積 20m<sup>2</sup>（対象面積434m<sup>2</sup>）

### 概要

調査地点は遺跡西端に位置し、ひな壇状に区画された宅地の一角に当たる。建設予定地に2m四方の試掘坑を5ヶ所設定し、深さ0.1mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、薄い表土の直下にハードローム層が検出され、土木工事による搅乱を受けていることが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、遺跡の可能性は低いものと判断された。



第64図 第2～4地点調査区平面・土層図、出土遺物

## 15 黒ノ木遺跡

調査目的 会社保養所建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市鶴島字黒ノ木3283-12

調査期間 平成10年12月24日

調査面積 8 m<sup>2</sup> (対象面積372m<sup>2</sup>)

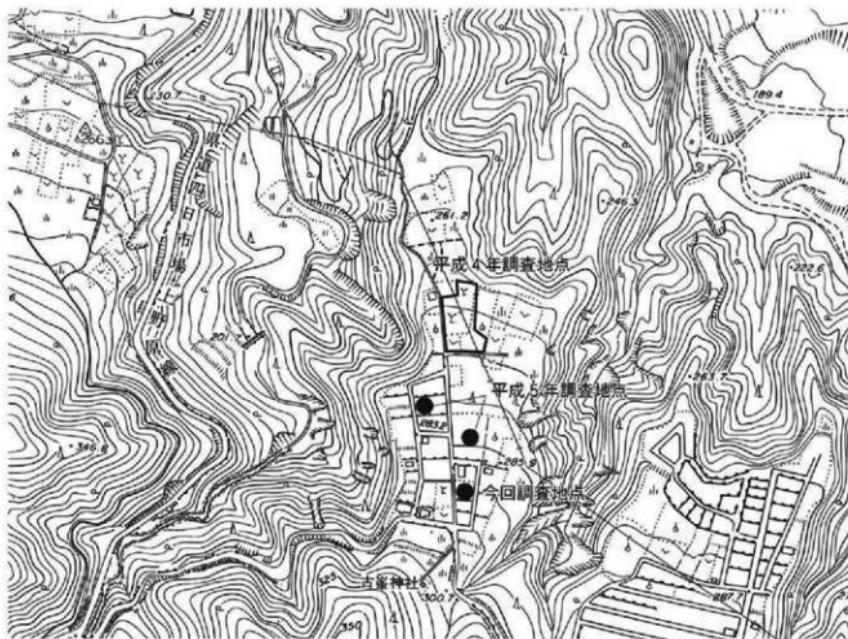
### 概要

黒ノ木遺跡は桂川南岸の台地上に位置し、縄文時代及び土師器の散布地である。遺跡の大半は湖南団地にあたり、ひな壇状に区画整備されている。これまでの試掘調査では、遺構・遺物は発見されていない。

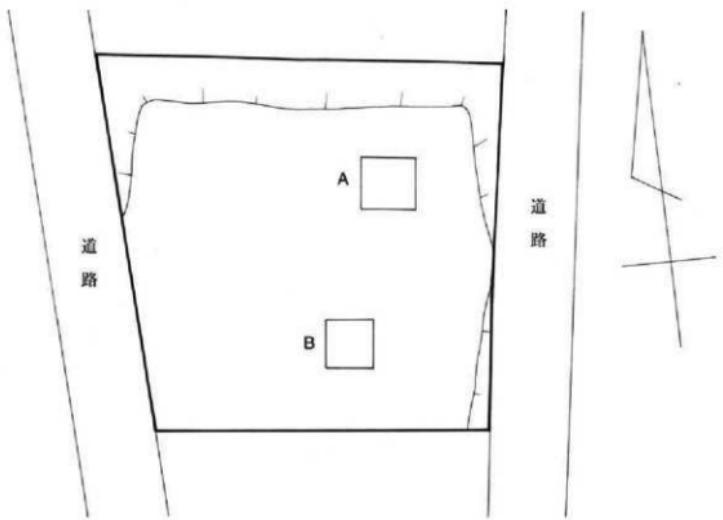


第65図 遺跡位置

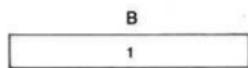
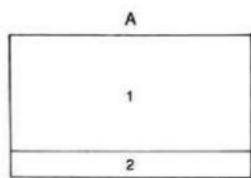
今回の調査地点は湖南団地の一角にあたる。建設予定地に2m四方の試掘坑を2ヵ所設定し、最深0.6mのローム面まで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、表土下の一部に暗褐色土の薄い堆積が確認されたが、全般に地表面近くでハードローム層が露出する状況であり、区画造成時に大きく削平された状況が確認された。遺構・遺物はなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第66図 調査地点



0 5m



黒ノ木道路土層  
1 表土  
2 暗褐色土

0 1m

第67図 調査区平面・土層図

## 16 にしのはら 西ノ原古墳

### 第Ⅰ次調査

調査目的 不時発見に伴う現況確認調査

調査地 上野原市大野字西ノ原5372

調査期間 平成11年4月26日～6月22日

調査面積 8m<sup>2</sup>

### 概要

西ノ原古墳は扇山（1137.8m）南東麓の斜面に位置し、標高は427mである。畑の耕作中に横穴式石室1基が偶然発見され、土地所有者である大神田貢一氏のご協力で現況確認調査を実施した。石室は調査後に埋め戻され、同年12月、市の史跡に指定されて現地保存された。



第68図 遺跡位置

### 第Ⅱ次調査

調査目的 古墳の分布調査

調査地 上野原市大野字西ノ原5404

調査期間 平成12年2月21日～28日

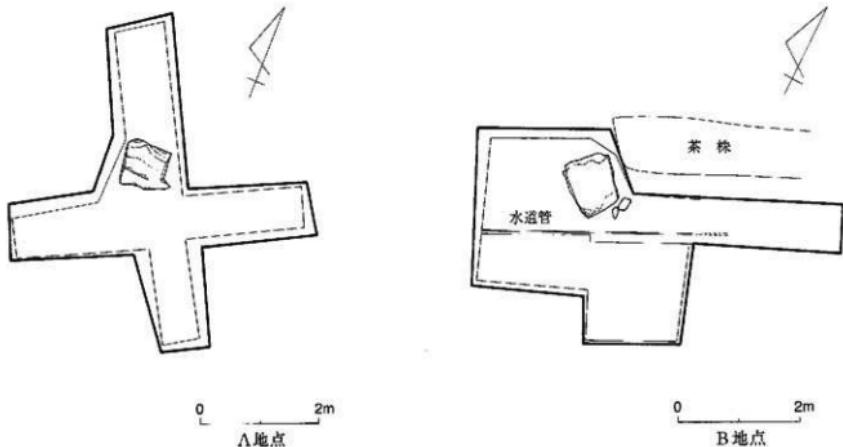
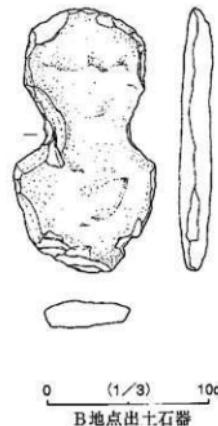
調査面積 20m<sup>2</sup>

### 概要

西ノ原古墳の調査後、地元住民より、周辺の畑を耕作すると特定の場所で地下の石に当たるという話をうかがった。古墳が周辺にも分布している可能性が考えられたため、石に当たるという箇所を2ヶ所特定し、それぞれ約10m<sup>2</sup>の試掘坑を設定して人力で掘り下げ調査した。この結果、各試掘坑で表土直下に巨大な礫を確認した。A地点の礫は、長さ0.85m・幅0.7m・最大厚0.3mであり、B地点の礫は、長さ0.95m・幅0.75m・最大厚0.4mであった。いずれも横転した状況で出土し、両側面は平坦面を有する。石材は泥質片岩である。各試掘溝とも範囲を拡張したが、B地点で約10cmの礫が数点と縄文時代の打製石斧1点が出土した以外に遺構・遺物は検出されなかった。新たな古墳の発見には至らなかったが、出土した巨大な礫はいずれも西ノ原古墳に用いられた奥壁と形態・規模・石材の点できわめてよく類似し、石室の構築材に用いられた可能性が高い。



第69図 調査地点



第70図 調査区平面図・出土遺物

### (1) 西ノ原古墳の構造（第71～72図・図版5・6）

横穴式石室で、墳丘、及び石室の天井部と側壁の大半はすでに失われ、石室の基底部が現存する。前庭部はすでに削平され遺存しない。調査開始時点では床面付近まで掘削された状況であった。

石室の全長は3.6mで、主軸方向はN42°Eである。胴張り形態であるが、東壁の張りは西壁に比べ弱い。側壁は基底部1段のみが残され、最大高は0.3mである。内壁には平坦な面が用いられる。奥壁は巨大な蝶一枚が用いられ、高さ0.8m・幅0.7m・最大厚0.4mを測る。床は碌床で、全般に0.3～0.5mの比較的平坦な礫を敷き、隙間に拳大の礫を詰めている。側壁・奥壁の石材は泥質片岩を主体とする。

石室の床面における全長は3.3m、最大幅は1.2mである。奥壁から1.0～1.8mの範囲に最大幅を有し、胴張り形を呈する。石室は玄室と羨道が明確に区分されない無袖型の構造であるが、床面の石材によって室区分を認識することができる。奥壁から1.7mまでの床には黄色の砂岩系ホルンフェルスが用いられ、この範囲が玄室に相当するものと考えられる。これより閉塞部にかけての床材は泥質片岩が用いられ、この相違に対応するように西壁の内面ライン（奥壁から2列目と3列目の間）は弱く屈曲している。

閉塞部は西壁が失われているが、幅は約1.0mと推定される。床上に大型で横長の礫が残され、最大幅0.4m・長さ0.9mを測る。

石室の周囲にサブトレーンチを設定して調査したところ、石室の掘り方と見られる黒色プランが、奥壁から0.6m斜面上方と東壁側で確認された。掘り方は未検出だが、地山の暗褐色土を掘り込んで石室が構築された、いわゆる半地下式構造である可能性が強い。

### (2) 遺物

床面直上の土壌をすべてフリイにかけて精査したが、出土遺物は検出されなかった。

### (3) 西ノ原古墳に関する考察

西ノ原古墳は、上野原市内で古墳の実態が明らかになった初例である。市内では桂川北岸の塚場古墳群（上野原古墳群）と鶴川西岸の上ノ山古墳群が知られているが、未調査のため詳細は不明である<sup>(1)</sup>。

桂川流域の古墳は上野原市と大月市に数ヶ所知られ、これより上流域では確認されていない。また、下流域では神奈川県津久井郡城山町に後期古墳や横穴墓群が確認されている程度であるため、上野原市・大月市域が相模川上流から桂川流域における古墳の主要な分布域となっている。この地域の古墳は形態や出土遺物から後期古墳に位置付けられ、7世紀代の所産と推定されている。このうち石室構造が把握された例は少ないが、西ノ原古墳から約9km上流の大月市・子の神古墳（市史跡）は、直径6m・高さ3mの墳丘を有し、胴張り形態の無袖型横穴式石室である。石室は河原石積みで、長さ5m・最大幅1.6m・高さ2mの規模を有する。須恵器の壺・長頸瓶、直刀・鐵鎌などが出土した。同市内の金山古墳や鳥沢古墳も胴張り形態の無袖型横穴式石室である。石室の長さは4m前後で、最大幅1.5m程度の規模を有する。鉄鎌・直刀・鎧などが出土した<sup>(2)</sup>。

西ノ原古墳の石室は自然石を用いた胴張り形態の無袖型横穴式石室で、半地下式の構造を探るものであった。この石室形態は、半地下式の点を除くと大月市内の古墳と共通するものであり、桂川流域における特徴と言うことができる。また同様の石室は相模川上流域や多摩川流域にも見られる。

相模川上流域では、西ノ原古墳から約20km下流に神奈川県津久井郡城山町・八幡神社古墳がある。7世紀前半墳に推定される河原石積みの無袖型横穴式石室で、張りの弱い胴張り形態を探る。半地下式構造で、石室規模は推定全長3～4m、石室幅は最大1.1mを測る。

多摩川上流域では東京都あきる野市瀬戸岡古墳群がある。このうち、瀬戸岡30号墳は河原石積みの無袖型横穴式石室で、張りの弱い胴張り形態を採る。半地下式構造で、石室規模は長さ3.15m、石室幅は最大1.1mを測る。時期は出土遺物から7世紀中葉に比定されている。

このように西ノ原古墳の石室構造は相模・武藏地域に類例が求められるが、当古墳がどの地域の影響のもとに造られたかは即断できない。西ノ原古墳を含めた桂川流域は、相模・武藏・駿河・甲府盆地と接する交通の要衝と捉えられており、当古墳の系譜や出自については広範な地域のもとで検討が加えられる必要がある<sup>(3)</sup>。

当古墳の造営時期は、周辺事例と同様7世紀代と考えられるが、詳細は出土遺物がなく確証に欠ける。なお、近年における瀬戸岡古墳群の発掘調査では、胴張り形態の無袖型横穴式石室について年代的位位置付けの再検討が行われている。この中で、同古墳群の石室形態は、短冊型・胴張T型・胴張II型・小石室の4つに大別され、このうち西ノ原古墳と同様、玄室側壁にわずかな胴張りをもつもの（胴張I型）は、瀬戸岡30号墳の出土遺物から少なくとも7世紀中葉には出現していたことが想定されている<sup>(4)</sup>。西ノ原古墳造営の上限もおおむね7世紀前半に求められる可能性は高いものと考えられる。

当古墳は、他地域の事例を考え併せれば群集墳であった可能性が考えられる。このことは、奥壁にきわめて類似した縛が近隣で検出されたことや、市内の古墳群がいずれも2~3基から構成されていることからも想定され、今後、古墳造営の母体となった集落址の確認と併せて検証を進めていく必要がある。

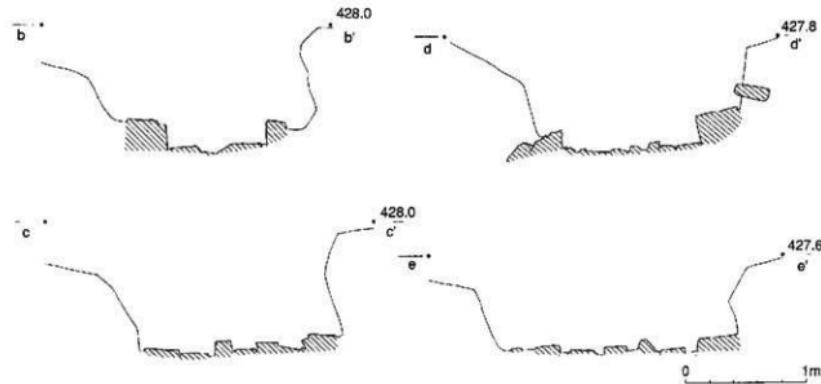
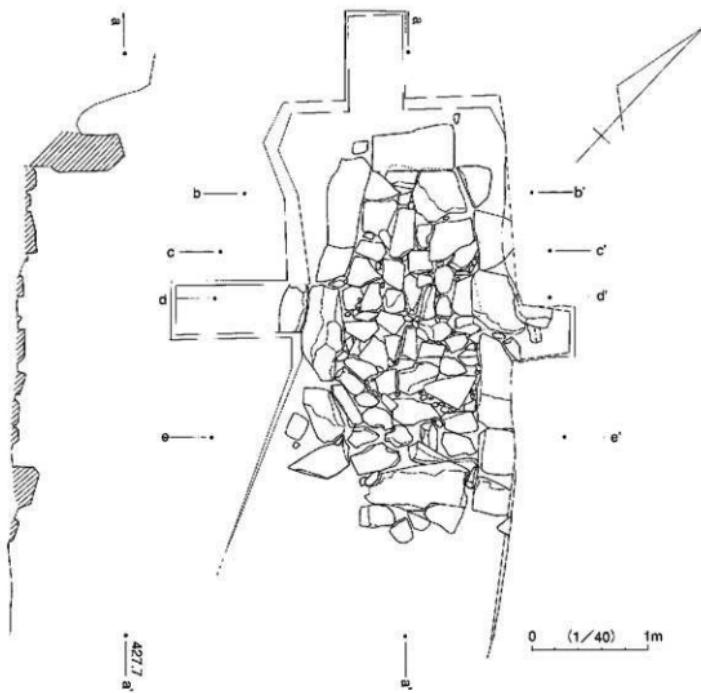
なお、西ノ原古墳は、土地所有者のご理解と関係者のご努力で市史跡に指定され、現地保存されている。

(1) 両古墳群については『上野原町誌』1975に詳述されている。

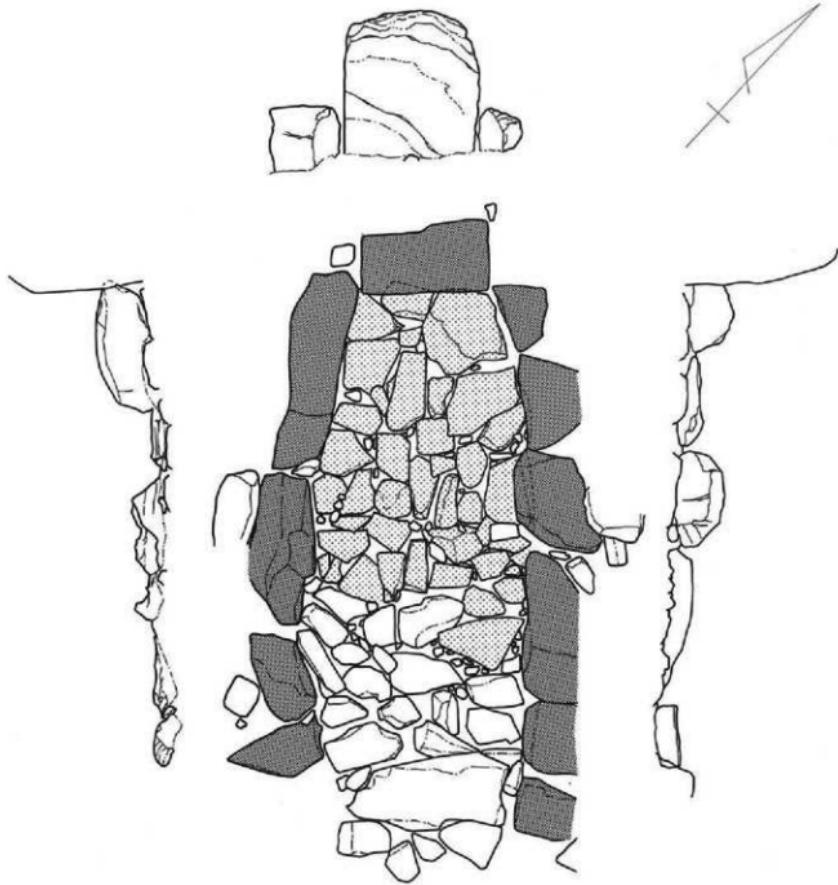
(2) 大月市の古墳については、山本寿々男『山梨県の考古学』1968、『大月市史』1978を参照した。

(3) 瀬戸岡古墳群の系譜については、従来考えられてきた北武藏地域以外に、石室構造の類似性などから静岡県愛宕山周辺など東海地方の影響が想定されている。西ノ原古墳も地理的な位置から東海地方との関係についても視野に入れる必要がある。東京都埋蔵文化財センター松崎元樹氏にご教示いただいた。

(4) 松崎元樹他「瀬戸岡古墳群の再検討」「天神前遺跡・瀬戸岡古墳群・上賀多遺跡・新道遥遺跡・南小宮遺跡」東京都埋蔵文化財センター調査報告第95集、2001



第71図 西ノ原古墳平面・断面図



砂岩系ホルンフェルス



側壁

0 (1/30) 1m

第72図 西ノ原古墳展開図

## 17 やまぶろ 山風呂遺跡

調査目的 分譲住宅の取り付け道路工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字山風呂原5354-1他

調査期間 平成11年7月28日

調査面積 18m<sup>2</sup> (対象面積360m<sup>2</sup>)

### 概要

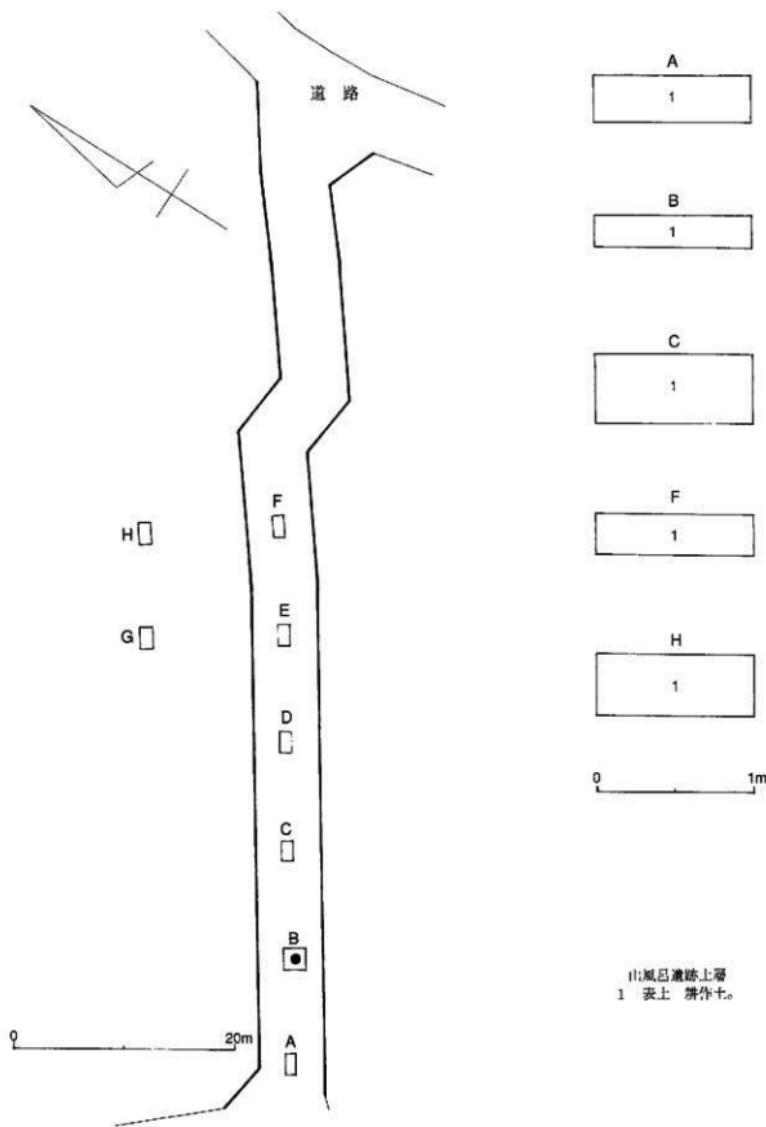
山風呂遺跡は鶴川東岸の河岸段丘面に位置し、縄文時代の遺物散布地である。調査は、工事予定地の畑に巾1m・長さ2mの試掘溝を8ヶ所設定し、最深0.4mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、表土(耕作土)直下がローム層で、耕作による擾乱を受けていた。遺構は、時期不明の土坑1基がローム層上面で確認されたのみである。土坑は直径1.0mの平面円形で、壁は失われていた(図版7)。覆土はローム塊や黒色スコリアを多く含む暗褐色土であった。出土遺物はない。以上の結果から、工事予定地では全般に深耕の影響が認められ、遺構・遺物の分布は希薄であった。



第73図 遺跡位置



第74図 調査地点



## 18 用竹神戸遺跡

調査目的 上野原市桐原支所建設に伴う試掘調査

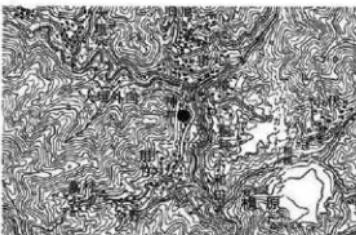
調査地 上野原市桐原2367-9

調査期間 平成12年3月9日

調査面積 23m<sup>2</sup> (対象面積226m<sup>2</sup>)

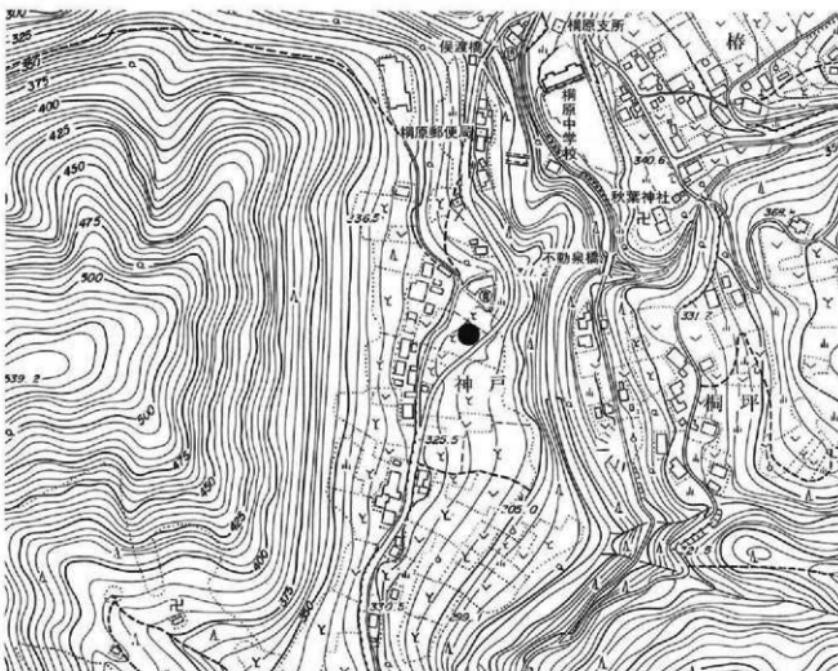
### 概要

用竹神戸遺跡は鶴川西岸の斜面地に位置し、弥生時代の遺物散布地である。建設予定地の畝に巾1m・長さ約4~10mの試掘溝を4ヶ所設定し、深さ1mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、基本層序は表土(耕作土)・暗

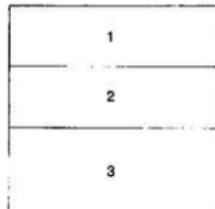
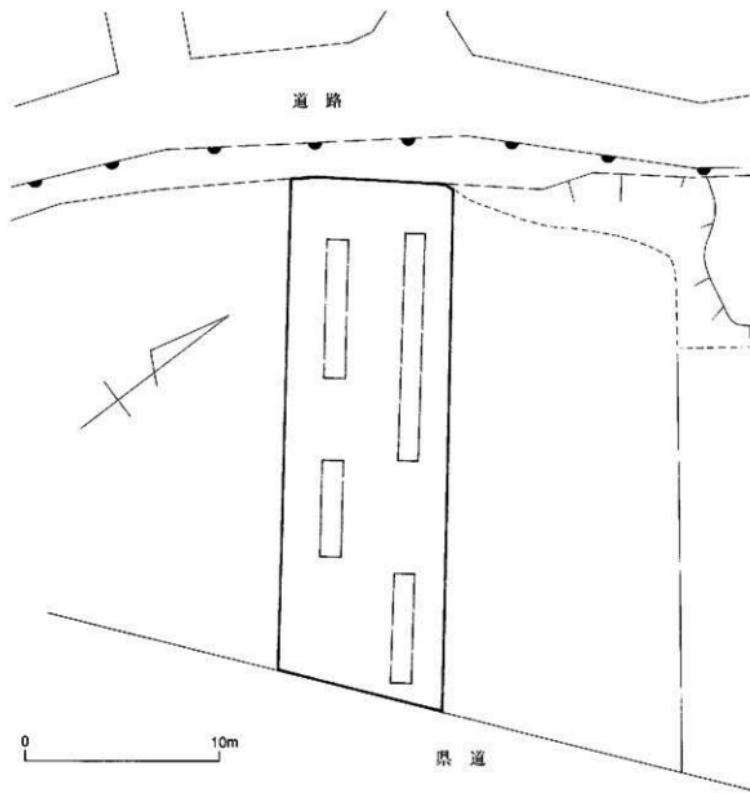


第76図 遺跡位置

褐赤土・礫混じりのハードロームローム層で、一部で表土下に客土が介在していた。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。なお、隣接地区で実施された山梨県埋蔵文化財センターによる試掘調査でも、今回と同様の結果が得られている。



第77図 調査地点



用竹神戸遺跡土層

- 1 表土 稲作土。
- 2 黒褐色土 寄土。疊・ローム塊多く含む。現代遺物含む。
- 3 増褐色土 粘性・弱まり崩し易い。疊・ローム塊やや多く含む。



第78図 調査区平面・土層図

なかむれ  
19 中群遺跡

調査目的 林道改良工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市西原1159他

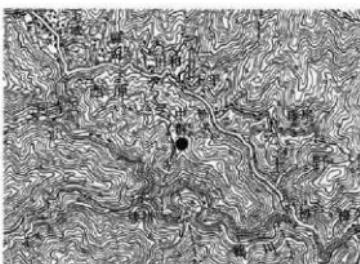
調査期間 平成12年9月6日

調査面積 6m<sup>2</sup> (対象面積90m<sup>2</sup>)

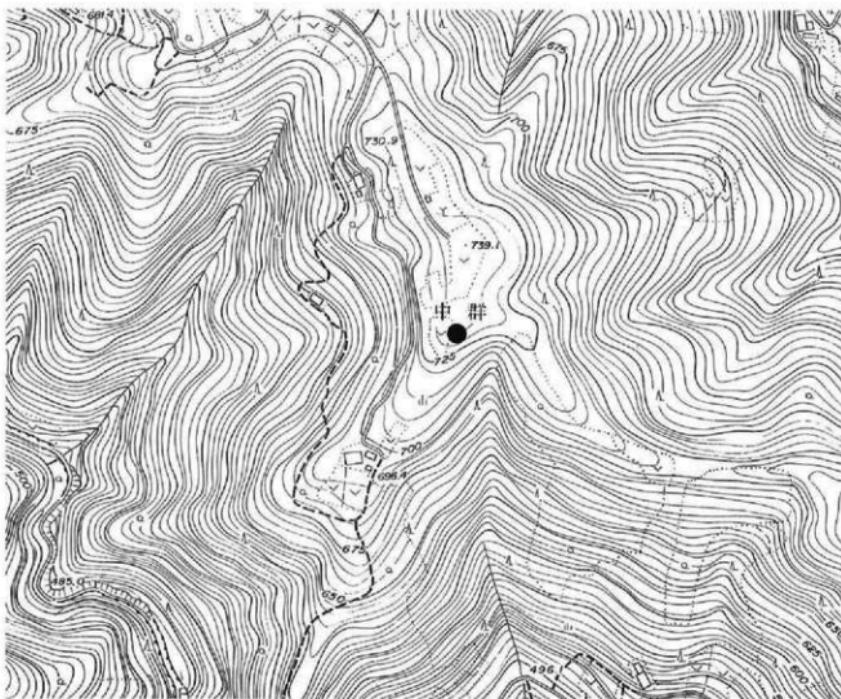
概要

中群遺跡は中群山(739m) 山頂に位置し、縄文時代の遺物散布地である。調査地点は遺跡南端の山林に位置する。

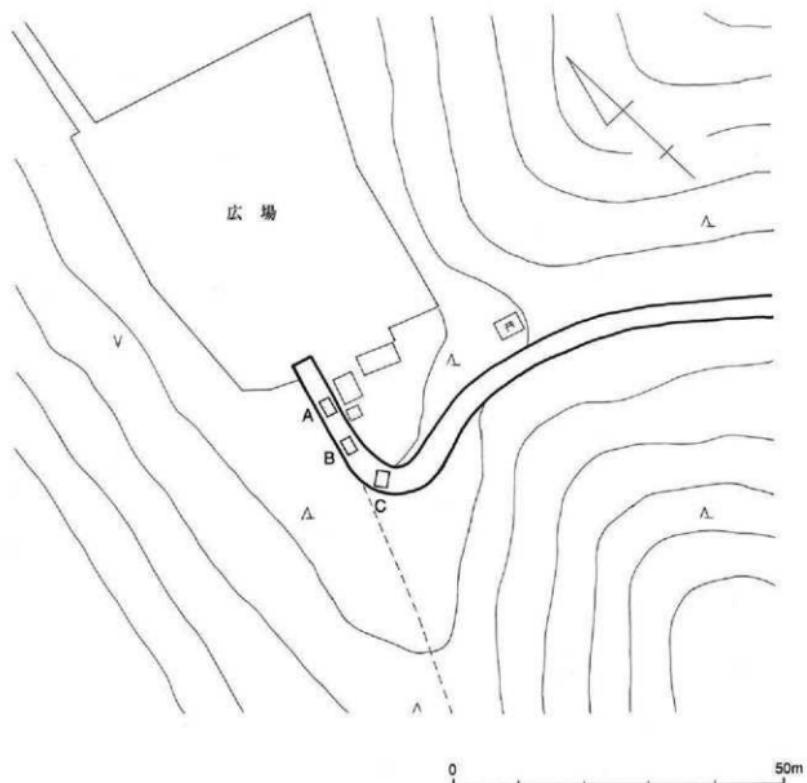
工事予定地に巾1m・長さ2mの試掘溝を3ヶ所設定し、最深1mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果表土は薄く、直下にローム層が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、工事予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第79図 遺跡位置



第80図 調査地点



A
1
2
3
4

B
1
2
4

C
1

0 50m

- 中群遺跡土層  
 1 表土。草木根が多く混じる。  
 2 ソフトローム層。  
 3 第2層と第3層の混合層。  
 4 ハードローム層。

0 1m

第81図 調査区平面・土層図

## 20 大間々遺跡

調査目的 上野原市役所・文化ホール建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字大間々3832-1他

調査期間 平成12年10月30日～11月6日

調査面積 845m<sup>2</sup> (対象面積19,220m<sup>2</sup>)

### 概要

大間々遺跡は桂川北岸の河岸段丘面に位置する。市街地一角の工場跡地にあたり、遺跡は知られていなかった。

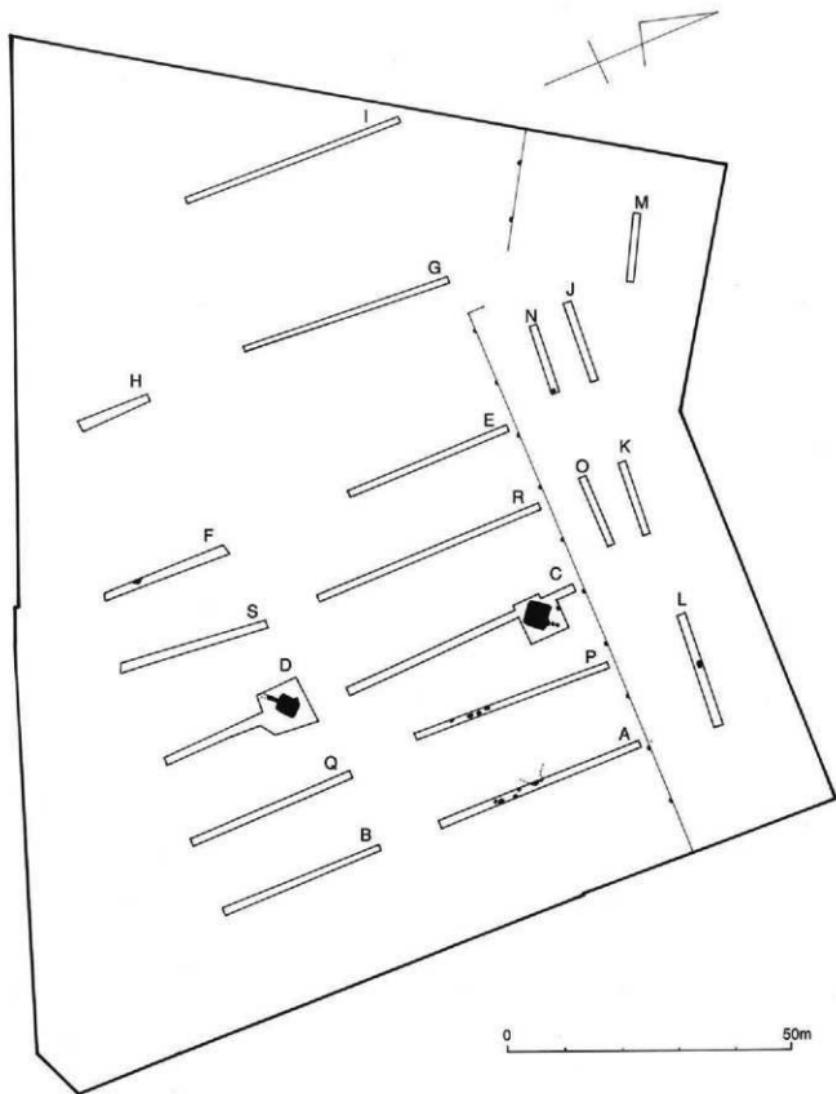
建設予定地に巾1m・長さ15～40mの試掘溝を19ヶ所設定し、重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、コンクリート基礎などがローム面まで達し、土層の旧状をとどめている場所は少なかったが、一部で平安時代の堅穴住居址や柱穴列が確認され、土師器などの遺物が出土した。



第82図 遺跡位置



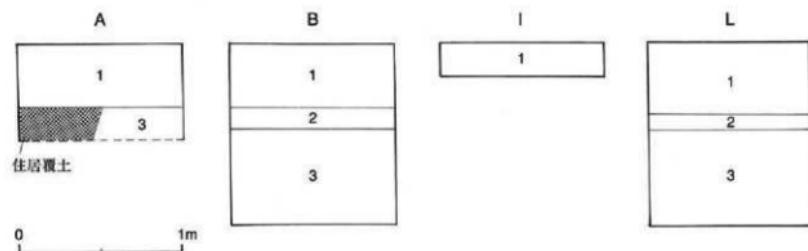
第83図 調査地点



第84図 調査区平面図

### (1) 基本層序

基本層序は表土（整地層）・黒褐色土・にぶい褐色土・ローム層であったが、土木工事による搅乱が広範囲、かつ地下深くに及んでいたため、土層の旧状をとどめている場所は少なかった。このうち、黒褐色土は平安時代の遺物包含層であり、該期遺構覆土の基調となっている。



#### 大岡々遺跡土層

- |          |                                 |
|----------|---------------------------------|
| 1 表土     | 整地層。コンクリート塊・砂利を含む。              |
| 2 黒褐色土   | 黒色スコリア（5mm以下）やや多く含む。平安時代の遺物包含層。 |
| 3 にぶい褐色土 | 粘性・締まりやや強い。橙色スコリア（3mm以下）やや多く含む。 |

第85図 調査区土層図

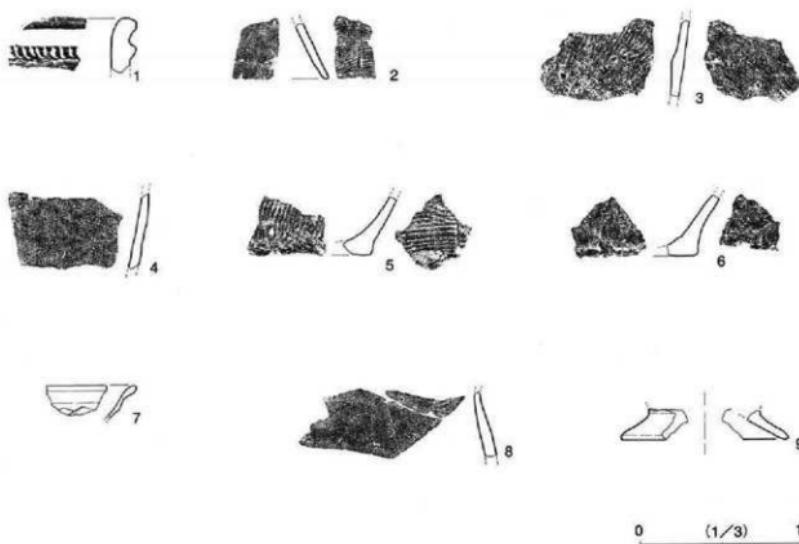
### (2) 遺構と遺物

確認された遺構は、竪穴住居跡3軒、ビット（小穴）9基、土坑1基、焼土址1基である。竪穴住居跡は1辺3~4mの平面方形で、北寄りにカマドを有する。

遺物は总数30点出土し、すべて土器の細片であった。大半が土師器である。

#### 出土遺物（第78図）

- 1は縄文土器。円筒形の深鉢口縁で、隆帶上に連続爪形文が施される。中期中葉に比定される。
  - 2~9は土師器。2、台付壺の脚部。内外面に櫛歯状工具による刷毛目が見られる。色調は褐色。器厚5mm。
  - 3~6は内外面に刷毛調整が施される。色調は暗褐色・黒褐色を呈し、胴部の器厚は6mm程度である。
  - 7、壺の口縁部。口縁端部は肥厚し、体部に斜めのヘラ削りが施される。色調は橙色で、器厚は3mmである。
  - 8、壺の脚部。内外面とも撫で調整が施される。色調はにぶい褐色を呈し、器厚は3~6mmである。
  - 9、台付壺の脚部。色調はにぶい褐色を呈する。
- 以上のうち、2は古墳時代前期、3~9は平安時代に比定され、とくに3~7は甲斐型、8~9は相模型と呼ばれるものである。



第86図 出土遺物

試掘坑	縄文時代	古墳～奈良・平安時代	近世以降	疎
A		2 (土師器)		
C		13 (土師器)		
D	土器2(中期)	12 (土師器)		
F		1 (土師器)		
L		7 (土師器)		
O		2 (土師器)		
P		2 (土師器)		
Q		3 (土師器)		
合計	2	42	0	0

( )は内訳。試掘坑で表記がないものは出土遺物なし。

第8表 大間々遺跡出土遺物集計表

## 21 ひがしおおの 東大野遺跡

調査目的 東大野集会所建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市大野字熊野前1341-1

調査期間 平成13年12月17日

調査面積 8m<sup>2</sup> (対象面積1,019m<sup>2</sup>)

### 概要

東大野遺跡は大野貯水池北側の台地に位置し、縄文・平安時代の遺物散布地である。建物予定地の畑に2m四方の試掘坑を2ヶ所設定し、深さ1mのローム層まで人力で掘削した。この結果、基本層序は表土・にぶい褐色土・暗褐色土・ローム層であった。遺物は縄文時代中期の土器片と打製石斧が数点出土したが、遺構は確認されなかった。

### 出土遺物 (第80図)

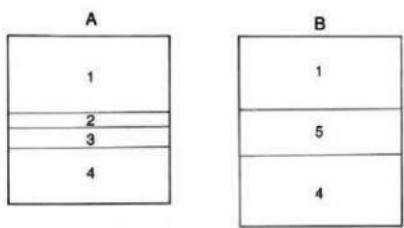
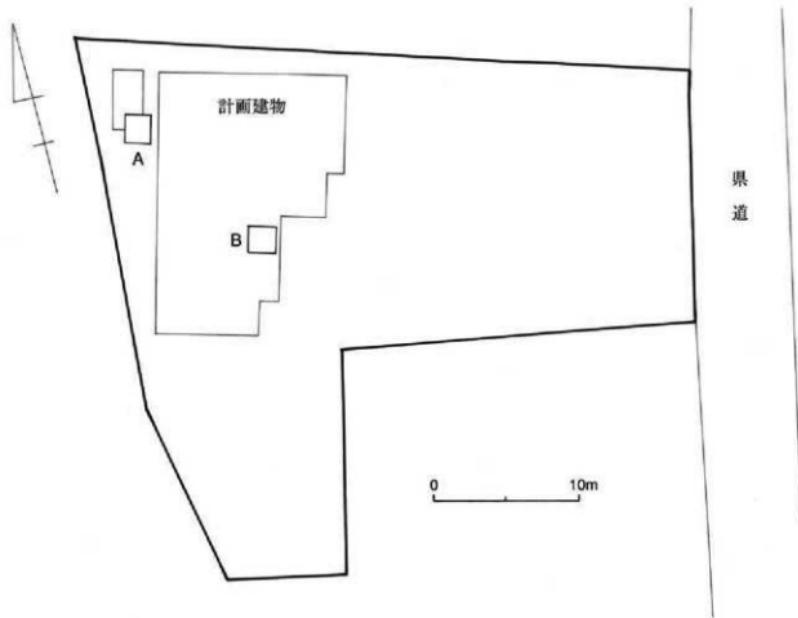
1～2は縄文土器でAトレンチ第2層～3層出土。1は深鉢の胴部で、短沈線がまばらに施される。2は深鉢の口縁部で、端部は丸い。いずれも中期に比定され、1は曾利V式にあたる。3は打製石斧でBトレンチ第5層出土。撥形を呈する。長さ8.7cm・幅5.9cm・厚さ0.6cm・重さ100g。石材はホルンフェルス。



第87図 遺跡位置

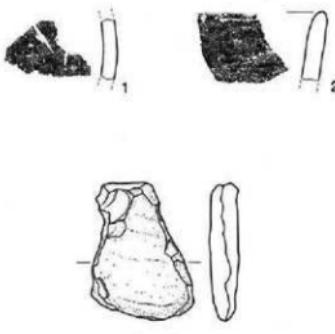


第88図 調査地点



東大野遺跡土層

- |          |                                                                |
|----------|----------------------------------------------------------------|
| 1 表土     | 旧耕作土。                                                          |
| 2 黒褐色土   | 粘性・締まり弱い。黒色スコリア（5mm以下）やや多く含む。                                  |
| 3 にぶい褐色土 | 粘性・締まりやや強い。黒色スコリア（3mm以下）・橙色スコリア（1mm以下）を多く含む。第2層由来の黒褐色土が斑状に混じる。 |
| 4 黒褐色土   | 粘性・締まり強い。橙色スコリア（5mm以下）やや多く含む。                                  |
| 5 黒褐色土   | 第2層と第3層の混合層。                                                   |



0 (1/3) 10cm

第89図 調査区平面・土層図、出土遺物

## 22 裏大越路遺跡

調査目的 老人保健施設建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字裏大越路7806他

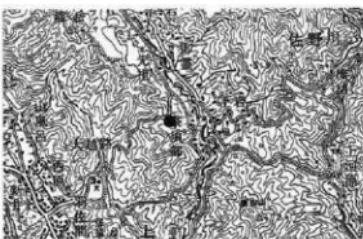
調査期間 平成15年3月3日～6日

調査面積 320m<sup>2</sup> (対象面積7,918m<sup>2</sup>)

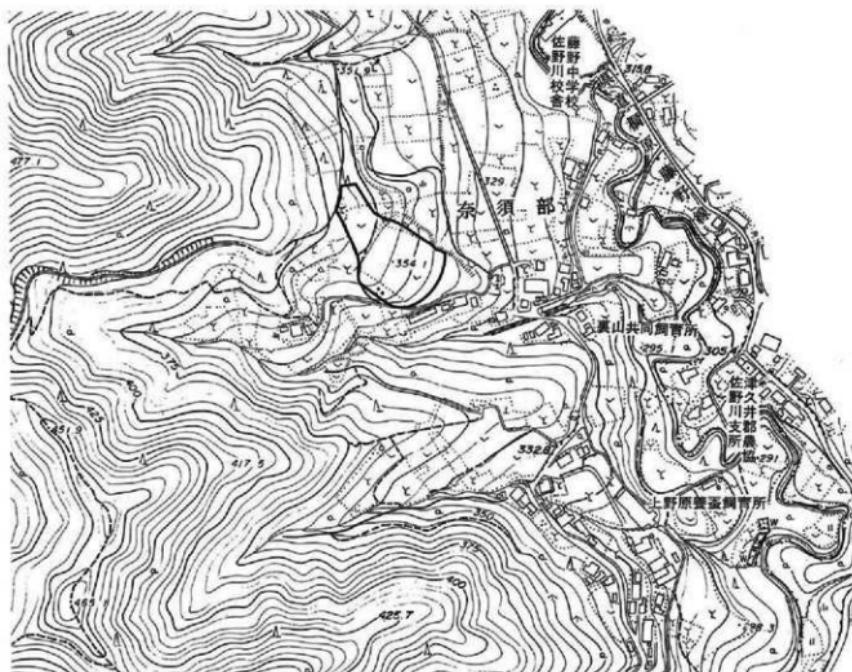
### 概要

調査地は神奈川との県境である境川西岸に位置し、畑や草木地が混在する斜面地である。建設予定地に巾1m・長さ30～50mの試掘溝を8ヶ所設定し、最深1.0mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、全般に表土(耕作土)直下

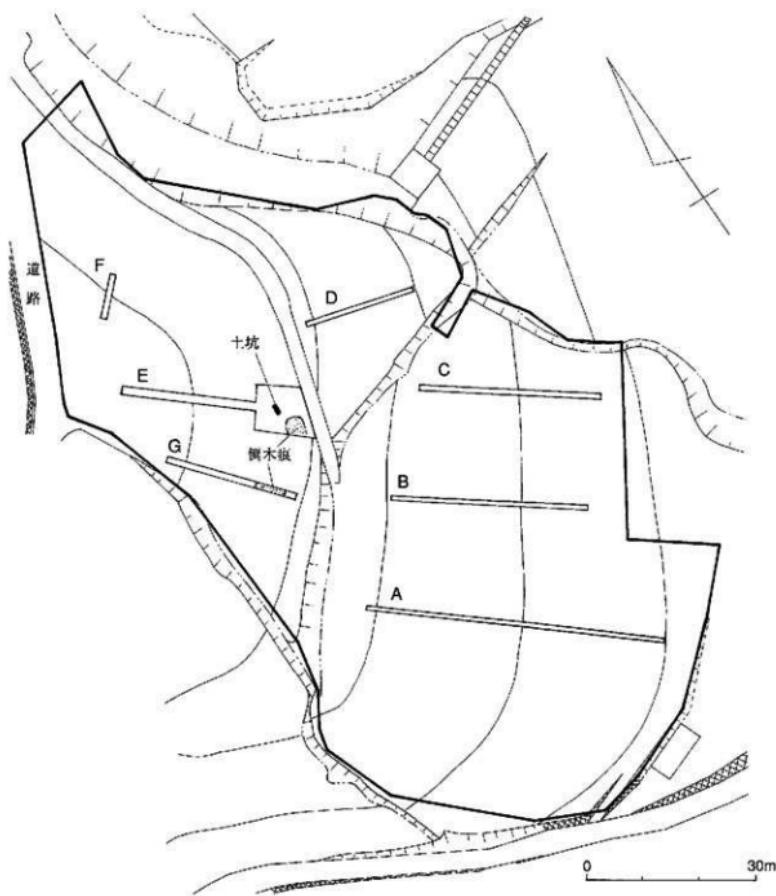
にローム層が確認され、斜面縁辺部で暗褐色土が介在する。遺構は縄文時代早期の陥れ穴状土坑1基が発見され、覆土中から縄文土器片1点、土坑周囲で石礫1点が出土した。これ以外の遺構・遺物はなく、他に風割木痕と思われる落ち込みが数箇所で確認された。



第90図 遺跡位置



第91図 調査地点



第92図 調査区平面図

## (1) 基本層序

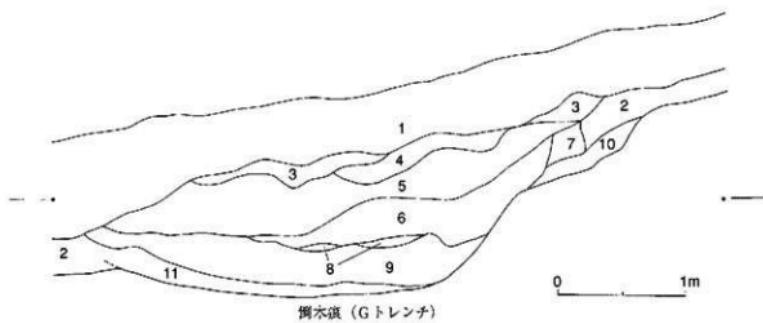
全般に表土（耕作土）直下がローム層で、耕作による擾乱を受けていた。

## (2) 造構と遺物

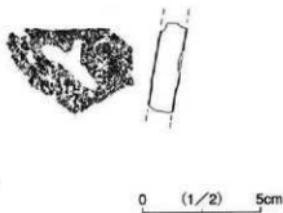
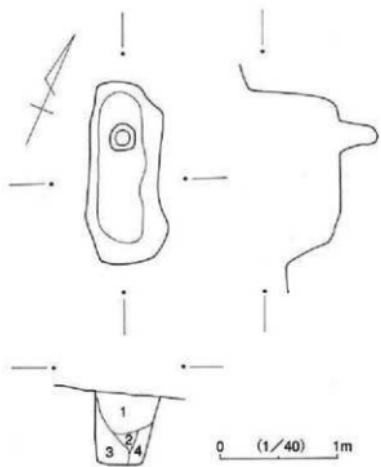
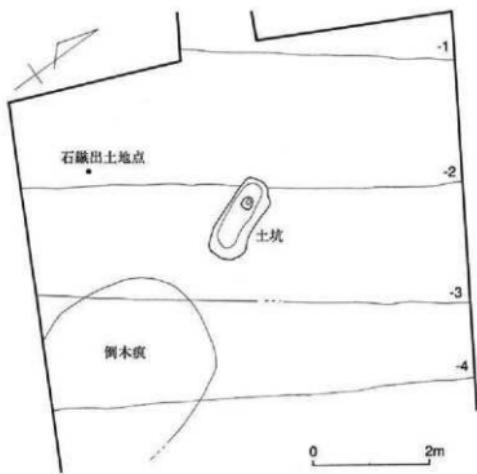
### 陥し穴状土坑（第94図・図版8）

Eトレンチのローム層上面で1基確認された。平面は不整長方形を呈し、長軸1.55m・短軸0.6m、底面までの深さは斜面上方で最も深く0.75mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、斜面上方にピット1基が検出された。ピットは直径0.26m、深さ0.3mである。上坑の覆土はローム粒子を多く含む暗褐色土を主体とする。縄文土器片1点が覆土中層から出土した。土器は深鉢形部で、底部に向かってすぼまる器形である。無文。外面とも剥落が目立ち、胎土に石英などの粒子を含む。色調はにぶい褐色。器厚は1.1cm。縄文早期に比定される。本造構は出土遺物から縄文時代早期に位置付けられる。

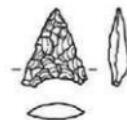
石礫が、土坑から2.5m内側のローム直上で1点検出された。長さ1.6cm・最大幅1.4cm・厚さ3mm。石材は黒曜石である。



第93図 調査区土層図



0 (1/2) 5cm



0 (原寸) 5cm

#### 表大越路遺跡土坑土層

全般に粘性強く、練まり弱い。橙色・青灰色スコリア(5mm以下)を少し含む。  
 1 暗褐色土 ローム粒子やや多い。 2 黒褐色土 ローム粒子やや多い。  
 3 暗褐色土 ローム粒子多い。 4 棕色土 地山のロームと同質。

第94図 遺構平面・土層断面図、出土遺物

## 23 寺畠遺跡

調査目的 分譲宅地工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字寺畠4014-7他

調査期間 平成15年9月16日~18日

調査面積 148m<sup>2</sup> (対象面積1,322m<sup>2</sup>)

### 概要

調査地は鶴川東岸の河岸段丘面に位置する。工事予定地の休耕田に巾1m・長さ10~20mの試掘溝を7ヶ所設定し、最深1.0mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、基本層序は表土・黒褐色土・暗褐色土・ローム層であった。遺構は、古代以降の土坑4基・ピット1基、及び縄文土器片・石器等を含む遺物集中部1ヶ所を検出した。遺物は縄文時代の遺物集中部から、中期中葉の土器、磨石・打製石斧・石匙・スクレイパー・加工痕のある剥片、被熱痕のある礫が出土した。この他の遺物は、土坑・ピット覆土から土師器の細片がわずかに出土し、遺構外では縄文土器片が数点出土した。

#### (1) 土坑

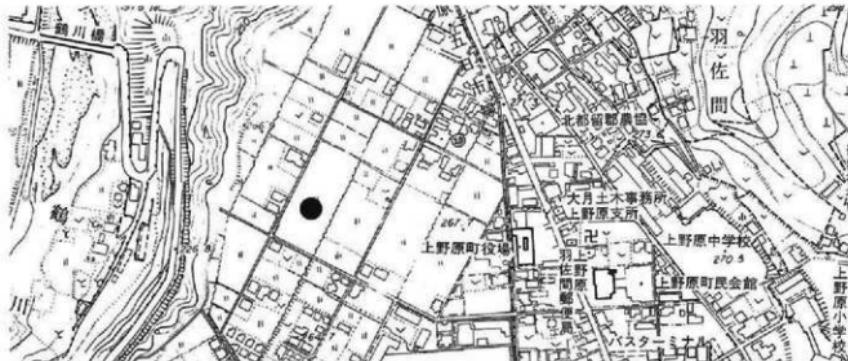
1号~4号土坑があり、第Ⅲ層上面で確認された(第98図)。覆土は第Ⅱ層を基調とした黒褐色土である。平面が円形と長方形の2種類に大別でき、このうち、円形タイプの2~4号土坑は、直径1.2~1.5m、最深0.31mの規模を測る。3・4号は重複する。出土遺物はない。長方形タイプは1号土坑のみで、主軸長1.0m・幅0.8m・深さ0.5mを測る。遺物は、覆土上層から土師器と思われる細片1点が出土した。遺構の時期は、層位や出土遺物から古代以降に位置付けられる。

#### (2) ピット

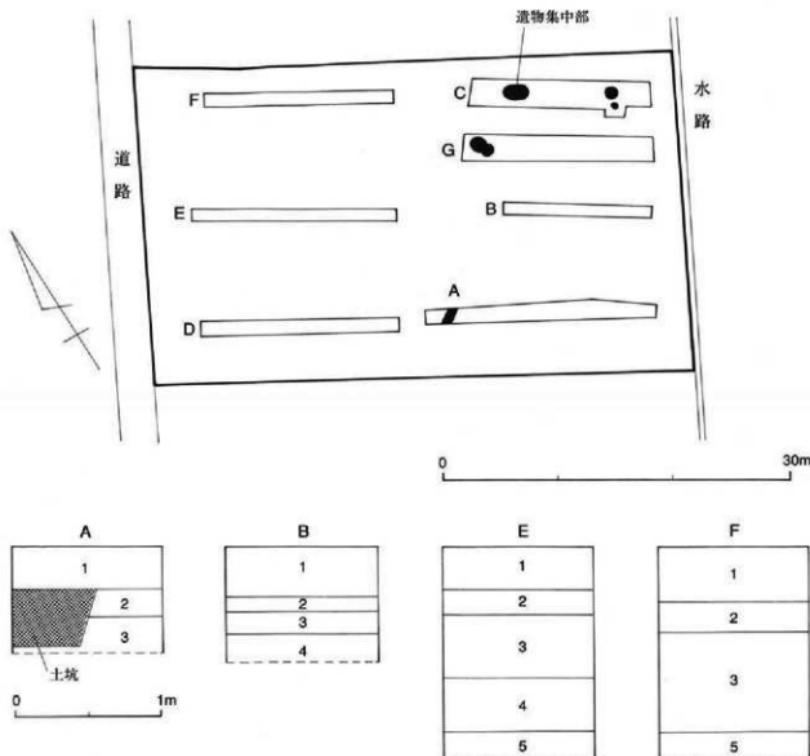
1基検出された(第98図)。平面は不整橢円形で、覆土は第Ⅱ層を基調とした黒褐色土である。規模は長軸0.95m・幅0.65m・最深0.67mを測る。遺物は、覆土下層から土師器と思われる細片2点が出土したが、微細のため時期区分は困難である。遺構の時期は、層位や出土遺物から古代以降に位置付けられる。



第95図 遺跡位置



第96図 調査地点



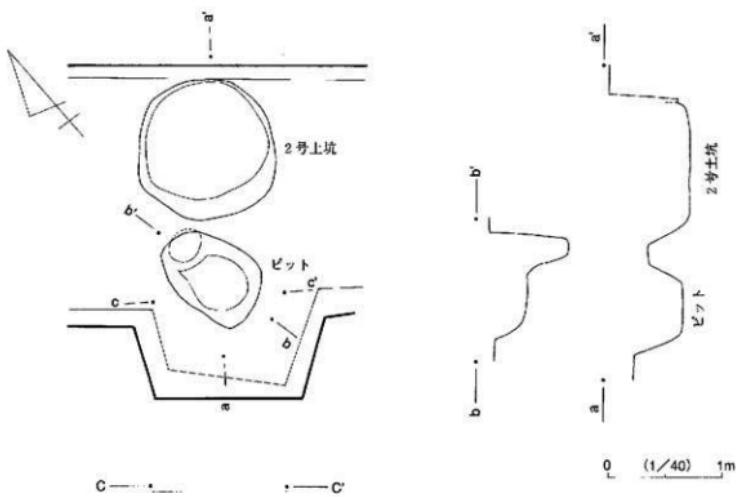
寺畠遺跡土層  
 1 表土 旧耕作土  
 2 黒褐色土 黒色スコリアを含む。  
 3 暗褐色土 棕色スコリアを含む。下層ロームとの境は漸移的である。  
 4 ソフトローム  
 5 ハードローム

第97図 調査区平面・土層図

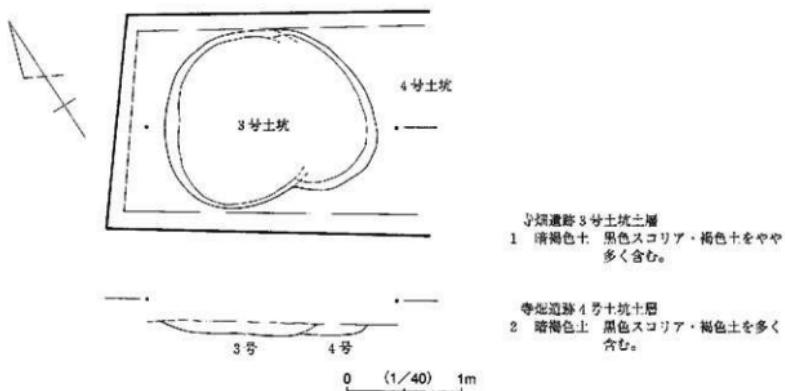
試掘坑	縦文時代		古墳～奈良・平安	近世以降	標
	土器	石器			
A			1 (土師器)		
B	4 (中期1)	2 (加工痕ある剥片)			6
C	139 (中期)	14 (打製石斧8・磨石・石匙)	4 (土師器)		276
D	3 (中期)				1
E	2 (中期)				
F	2				2
G		1 (打製石斧)			1
合計	150	17	5	0	286

第9表 寺畠遺跡出土遺物集計表

( ) は内訳



- 寺畠遺跡 ピット上層
- 1 表土
  - 2 黒褐色土
  - 3 暗褐色土
  - 4 ローム
  - 5 黒褐色土 極色スコリア・褐色土を多く含む。ピット層。
  - 6 黒褐色土 黒色スコリア・褐色土をやや多く含む。ピット層土。



第98図 遺構平面・土層断面図

### (3) 遺物集中部

調査区東側のCトレーニングに位置し、第Ⅲ層中で確認された。約2m四方の範囲に多量の縄文土器、石器、環が混在して出土した。遺物の平面分布は周囲に拡散することなく限定的であり方を示し、垂直分布は最大0.4mの幅があった。掘り方は確認されなかった。遺構の時期は層位や出土遺物から縄文時代中期中葉に位置付けられる。以上から、本遺構は窪地等を利用した小規模な遺物廃棄場（いわゆる土器捨て場）の可能性がある。

#### ① 土器（第99図、図版9）

すべて縄文土器の破片で、総数139点である。1、角押文が斜位・波状に施される。2、口縁突起部にキャタピラ文・ベン先状工具による三角押文が施される。3、わずかに波状を呈する口縁部で、キャタピラ文・毛抱ニ叉文が施される。4～7は降帯脇にキャタピラ文が施される。8、II縁部に重三角区画文を配し、区画内に三叉文が施される。6、三角形の隆帶区画が配され、隆帶沿いに三角押文が施される。7、横位格円の隆帶区画が配され、区画内に波状沈線が施される。8～11は半裁竹管による半隆帯で横・縦・斜位の区画を有し、区画内に集合沈線が施される。このうち8は、屈曲する無文口縁部に円環状の把手を有し、把手側面の一部は連続する刻みが加えられる。12、平行沈線による三角区画内に、集合沈線、及びニ叉状・波状の沈線を施す。13、口縁の波頂部で円形の孔を有する。口縁と孔は隆帶で縁取られ、隆帶側面は連続する刻みが加えられる。14・15は縄文地の脇部で、14の縄文は波状沈線で区画される。16～19は深鉢脇部に鎖状隆帯が施されたものである。16は波状口縁で、口縁と脇部を鉛状の隆帶で区画する。隆帶上や区画内には交互の刻みや連続爪形文が加えられる。17・18は区画内に集合沈線が施され、18は隆帶上に交互の刻みが加えられる。19の鎖状隆帯は弧状に垂下する。20、隆帶上に連続する刻みが加えられる。21、半隆帯、及び半裁竹管による刻みが加えられた隆帯が斜位に施される。21・22は丸く内湾する口縁部。21は脇部と沈線によって区画され、22は眼鏡状の把手が付く。以上の土器はすべて中期中葉に位置付けられ、1は猪沢式期、2は新道式期、3～23は藤内式・井戸尻式期に比定される。

#### ② 石器（第100図、図版9）

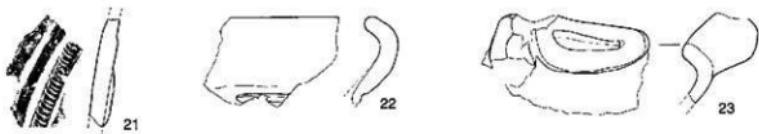
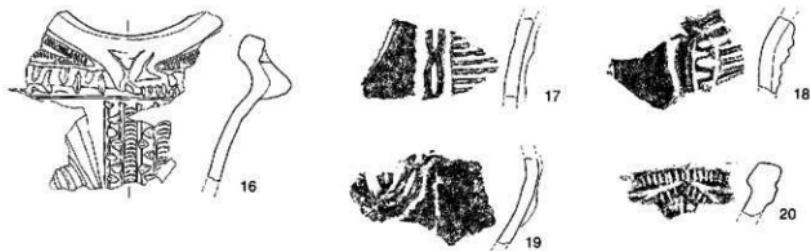
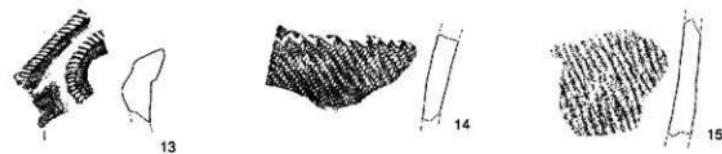
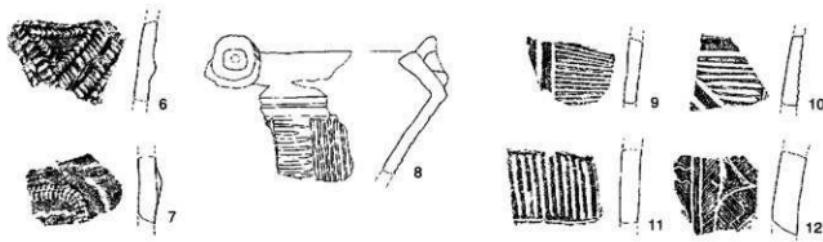
打製石斧9点、右匙1点、スクレイバー1点、磨石類3点が出土した。

番号	出土区・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	遺物集中部一括	打製石斧	8.1 (9.4)	6.0 5.3	2.9 1.7	140 110	泥質片岩 ホルンフェルス	
2	タ	タ	11.0	5.1	1.4	95	ホルンフェルス	
3	タ	タ	11.5	4.9	1.9	120	ホルンフェルス	
4	タ	タ	12.9	4.6	2.1	154	泥質片岩	
5	タ	タ	(11.4)	5.3	1.6	128	泥質片岩	
6	タ	タ	12.0	5.3	2.0	185	泥質片岩	
7	タ	タ	14.3	6.0	1.6	170	泥質片岩	
8	タ	タ	15.0	8.2	2.0	300	ホルンフェルス	
9	タ	スクレイバー	8.5	7.1	1.8	110	緑色凝灰岩	
10	タ	右匙	10.8	9.5	2.4	205	ホルンフェルス	
11	タ	磨石	14.1	7.7	3.6	564	砂岩	
12	タ	磨石	12.2	3.2	2.4	153	砂岩	
13	タ	タ	10.6	6.3	5.2	545	砂岩	
14	タ	タ						

第10表 寺畠遺跡出土石器一覧表

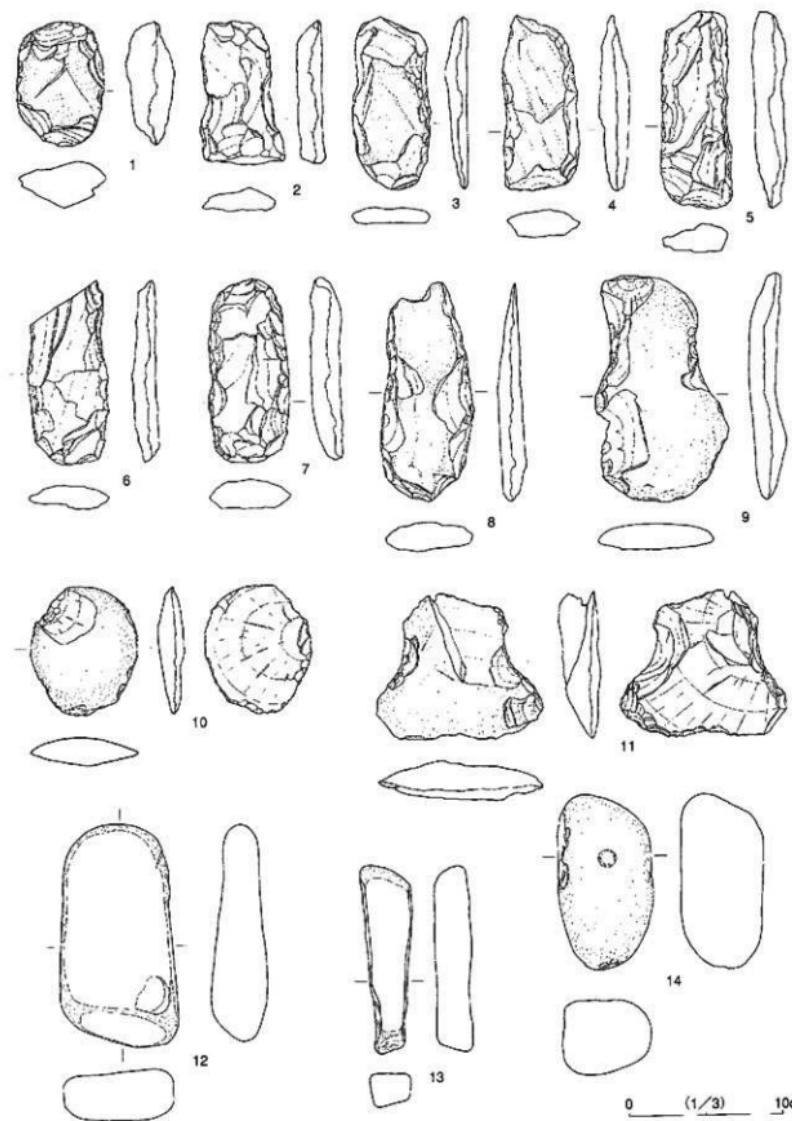
#### ③ 蘭

総数276点（総重量16kg）出土し、このうち約60%は破損していた。赤化や吸炭など被熱痕跡が明瞭に認められたものは37点（全体の13%）であった。



第99図 出土土器

0 (1/3) 10cm



第100図 出土石器

## 24 当月遺跡

調査目的 店舗建設（セブンイレブン四方津店）に伴う試掘  
調査

調査地 上野原市四方津字当月979-1他

調査期間 平成15年9月29日～10月1日

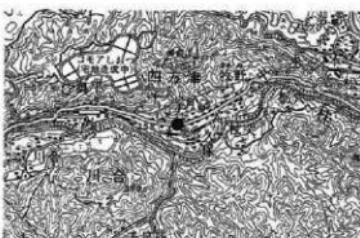
調査面積 136m<sup>2</sup>（対象面積2,159m<sup>2</sup>）

### 概要

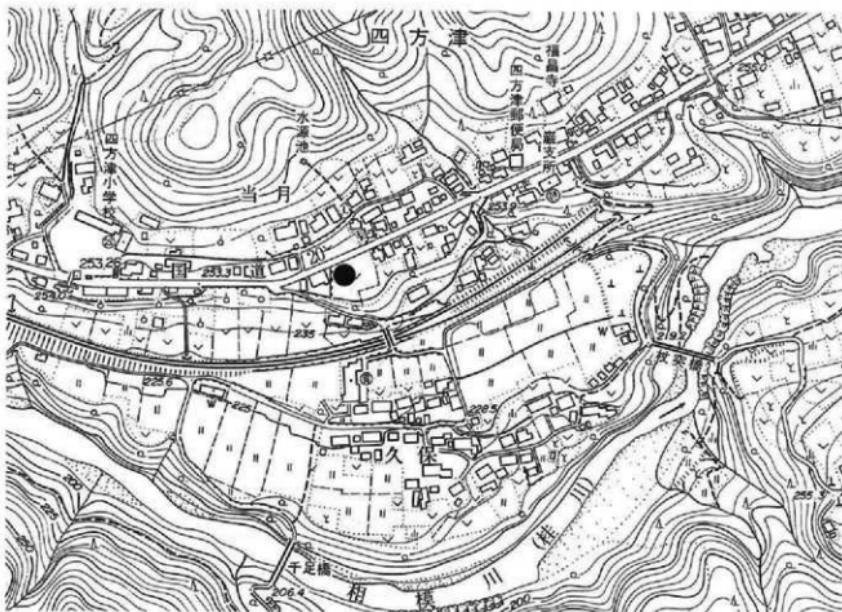
当月遺跡は桂川北岸の河岸段丘面から背後の山際に位置し、  
縄文時代の遺物散布地として知られている。調査地点は国道  
20号線南側に位置し、段丘平坦面から緑辺の畑地に当たる。

建設予定地に巾1m・長さ15～30mの試掘溝を5ヶ所設定し、最深1.6mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。

調査の結果、平坦地の基本層序は表土（耕作土）・暗褐色土・粘土質の黒褐色土・ローム層で安定していたが、斜面地では層厚が減少し、表土直下がローム層となっていた。遺構は縄文時代中期後葉に推定される配石  
1基、焼土址1基を確認した。遺物は縄文時代早期・中期の土器片、石器（加工された不定形の礫・スクレイ  
バー・石匙・磨石類・台石・石棒）が出土した。

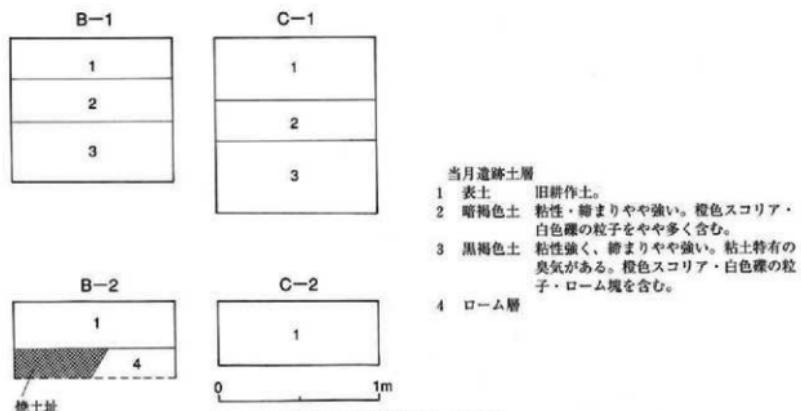
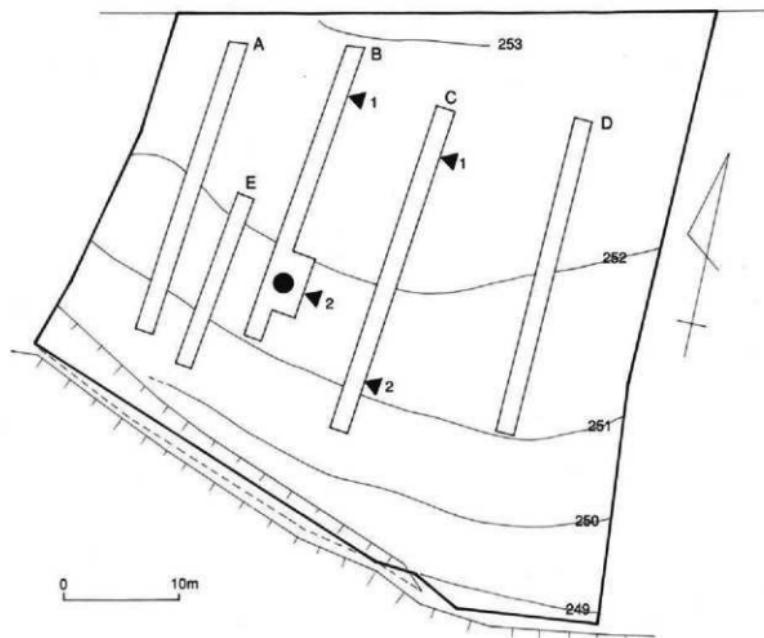


第101図 遺跡位置



第102図 調査地点

国道20号



第103図 調査区平面・土層図

## (1) 遺構

Bトレンチで配石1基、焼土塗1基が近接して検出された(第104図・図版10)。確認面は地表下約40cmの第II層中である。

配石は比較的大型の平石5枚で構成されるが、石の大半を掘削作業中に取り上げてしまったため、詳細な出土状況は不明である。石表面の一部に被熱による赤化が認められた。

焼土塗は平面円形で、直径0.4m・深さ0.18mを測る。複数は2層に分けられ、上層にやわらかい焼土が堆積する。壁面は焼けていない。出土遺物はない。

配石や焼土塗の周囲には、ほぼ同レベルで縄文土器片や破損した砾が比較的多く分布し、この中には石匙や加工痕のある剥片もわずかに混在する。なお、被熱砾はわずかであった。

これら遺構の時期は、周囲の出土器から縄文時代中期後葉に推定される。

## (2) 遺物

B・Cトレンチを中心に縄文土器片・石器・砾が出土した。出土層位は第II層～第III層上位である。砾は333点出土し、大半は拳大以下の破損砾であった。以下、土器と石器について説明する。

試掘坑	縄文時代		古墳～奈良・平安	近世以降	種
	土器	石器			
A	1	1			8
B	49(早期3・中期6)	5(黒曜石剥片1)			215
C	20(早期14)	6			84
D	4	1			15
E		3			11
合計	74	16	0	0	333

第11表 当月遺跡出土遺物集計表

( ) は内訳

### ① 土器(第105図・図版11)

すべて縄文土器の破片で、総数74点が出土した。

1～3は深鉢の無文土器で、出土土器の大半を占める。1、口縁部で端部は平坦。胎土に微細な金雲母や石英などの粒子を含む。色調は褐色で、器厚1.2cm。2、胴部。表面には縱位に擦痕が見られる。色調は褐色で、器厚1.2cm。3、胴部で、底部に向かってすばまる器形である。胎土に金雲母(1mm)などの粒子を含む。色調は褐色で、器厚1.0～1.3cm。出土地点は、1がDトレンチ、2がCトレンチ、3がBトレンチである。

4～6は縄文が施された深鉢で、底部に向かってすばまる器形である。4、縱位の縄文がまばらに施される。胎土に金雲母(1mm)などの粒子を含む。外面の色調は暗褐色。器厚1.0～1.3cm。5、縱・斜位の縄文が密に施される。胎土に金雲母や石英などの粒子を多く含む他、纖維痕が見られる。色調は黒褐色。器厚1.2cm。

6、斜位の筋の太い縄文が施される。胎土に金雲母や石英などの粒子を含む。色調は褐色で、器厚1.2～1.6cm。出土地点はすべてBトレンチである。

7、多条の沈線が横位に施される。胎土に砾(5mm)がやや多く含まれる。色調はぶい褐色。器厚1.3cm。出土地点はBトレンチ第II層中である。

8～10は深鉢胴部で、擦痕状の条状文が内外面に施される。外面の条痕文は、8が波状・縱位、9は不定方向、10は不明瞭だが横位に、それぞれ施される。また、10の外面には格子状压痕文が伴う。胎土にはいずれも砂粒や纖維痕が見られる。色調は褐色(8)、橙褐色(9)、暗褐色(10)である。器厚は1.2～1.3cm(8・

9)、0.9cm (10) である。出土地点はすべて C トレンチ第Ⅱ層～第Ⅲ層上位である。

11～14は配石に近接して出土した。11～13は深鉢口縁部で、接合しないが同一個体と推定される。口縁端部は平坦である。縦位の条線が施される。胎土に石英などの粒子を多く含む。色調は橙色・にぶい褐色。器厚は約1.0cm。14、壺の胴部と思われ、沈線による大型の渦巻文が配される。胎土に石英などの粒子を含む。色調はにぶい褐色。器厚は0.8～1.0cm。

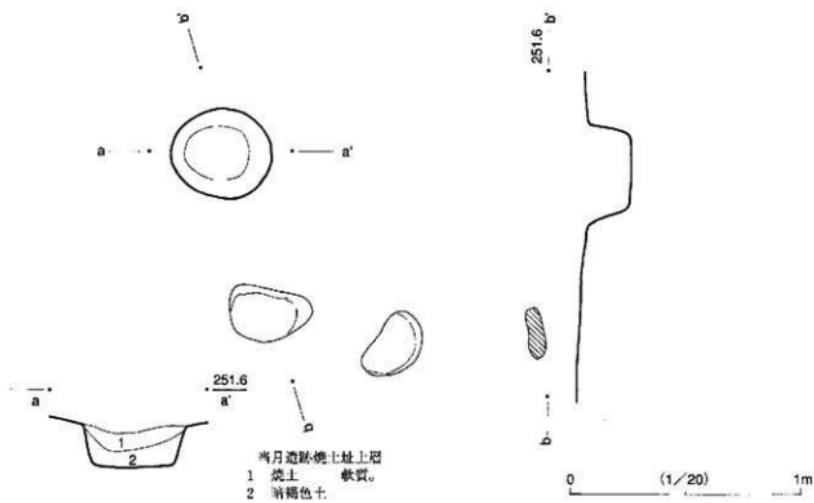
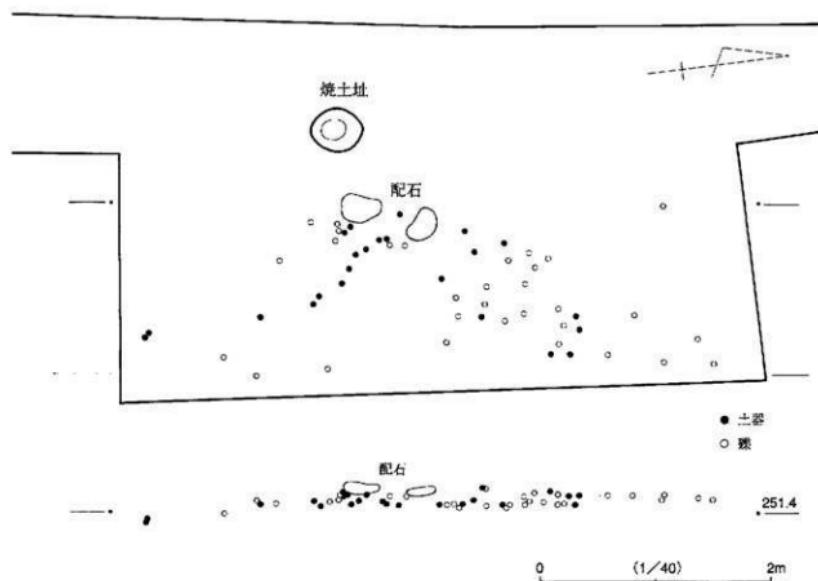
以上のうち、1～7は網文早期前半、8～10は早期後半で、このうち4～6は撚糸文系、7は沈線文系、8～10は貝殻条痕文系土器に、それぞれ位置付けられる。また、11～14は中期後葉・曾利式期に比定される。

## ② 石器 (第105図～107図・図版11)

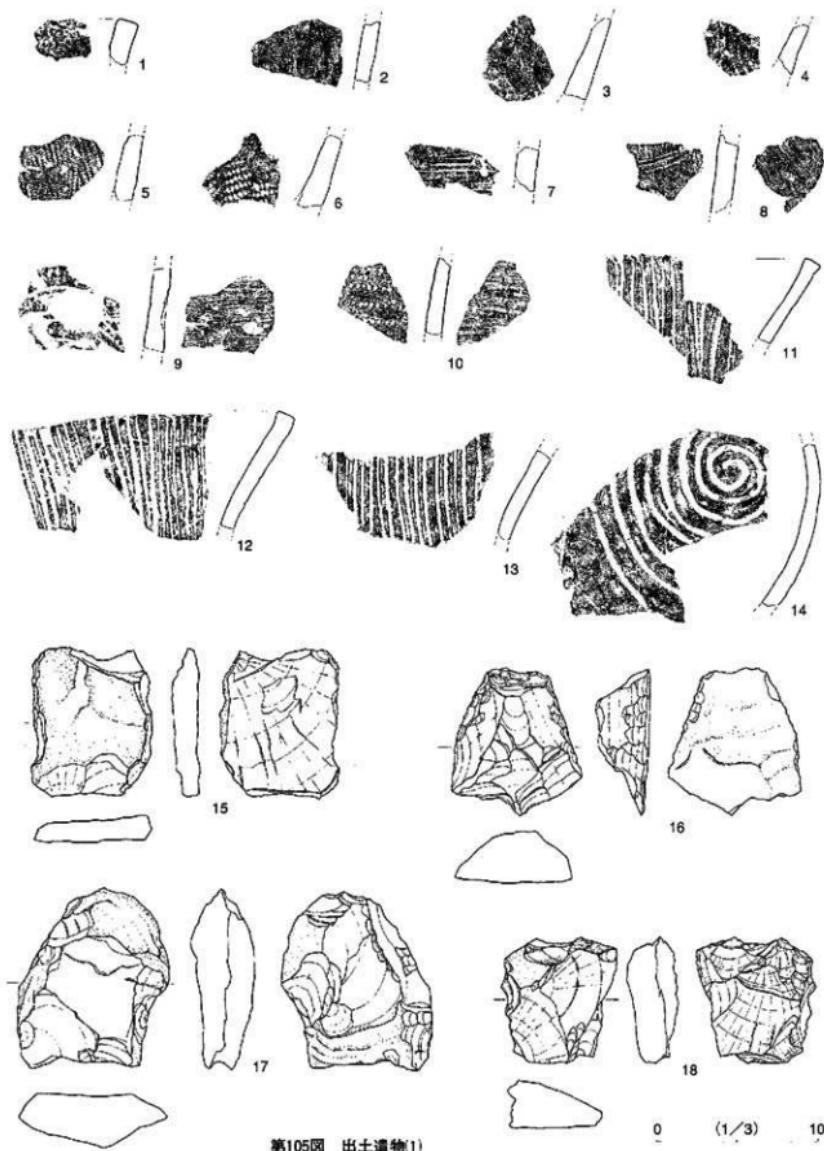
総数16点出土した。加工された不定形の鏃が多く、他にスクレイパー・石匙・磨石類・台石・石棒がある。

番号	出土区・層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材
15	C トレンチⅡ～Ⅲ層上部	縄 器	9.3	7.5	1.7	150	ホルンフェルス
16	D トレンチⅡ～Ⅲ層上部	ク	8.9	8.1	3.1	207	ホルンフェルス
17	A トレンチ	ク	11.1	9.4	3.3	358	ホルンフェルス
18	C トレンチⅢ層	ク	7.8	7.1	2.7	165	凝灰岩
19	C トレンチⅡ～Ⅲ層上部	ク	(8.0)	7.4	2.3	220	凝灰岩
20	B トレンチⅡ～Ⅲ層上部	ク	(8.4)	9.3	3.2	300	凝灰岩
21	C トレンチ	ク	(20.4)	18.1	5.6	2400	ホルンフェルス
22	B トレンチⅡ層・配石周辺	石 匙	7.1	6.7	2.0	98	凝灰岩
23	E トレンチ・ローム層直上	スクレイパー	5.1	4.2	1.2	24	チャート
24	C トレンチⅡ～Ⅲ層上部	ク	6.7	4.3	1.1	35	凝灰岩
25	C トレンチⅡ～Ⅲ層上部	磨石類	7.4	4.9	2.2	115	玄武岩質溶岩
26	B トレンチⅡ層・配石周辺	ク	9.2	7.5	3.6	377	細紋砂岩
27	B トレンチ配石	台 石	38.5	28.0	12.0	17200	玄武岩質溶岩
28	ク	ク	35.0	31.0	17.0	28000	細礫岩
29	B トレンチ	石 棒	57.0	23.0	19.0	30500	花崗岩

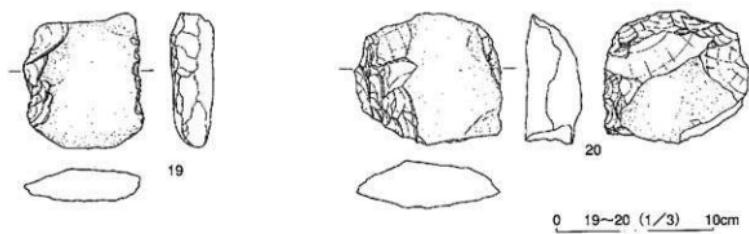
第12表 当月遺跡出土石器一覧表



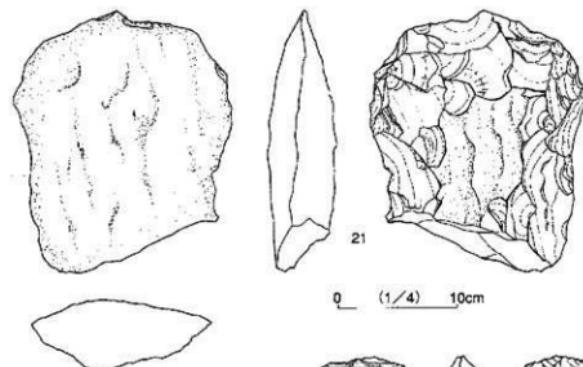
第104圖 遺構平面・土層斷面圖



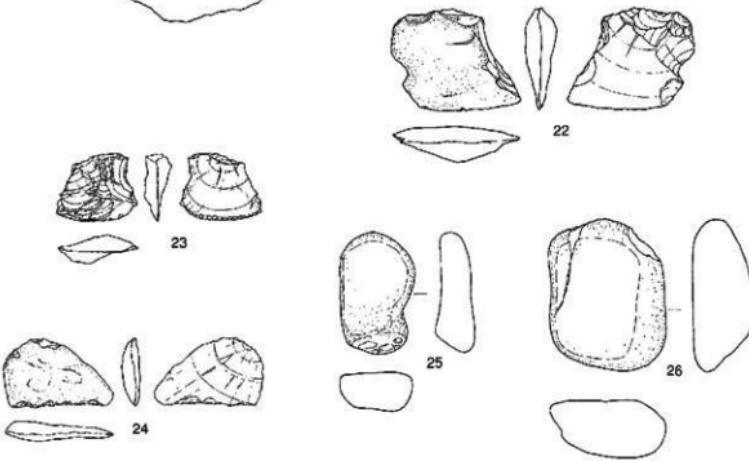
第105図 出土遺物(1)



0 19~20 (1/3) 10cm

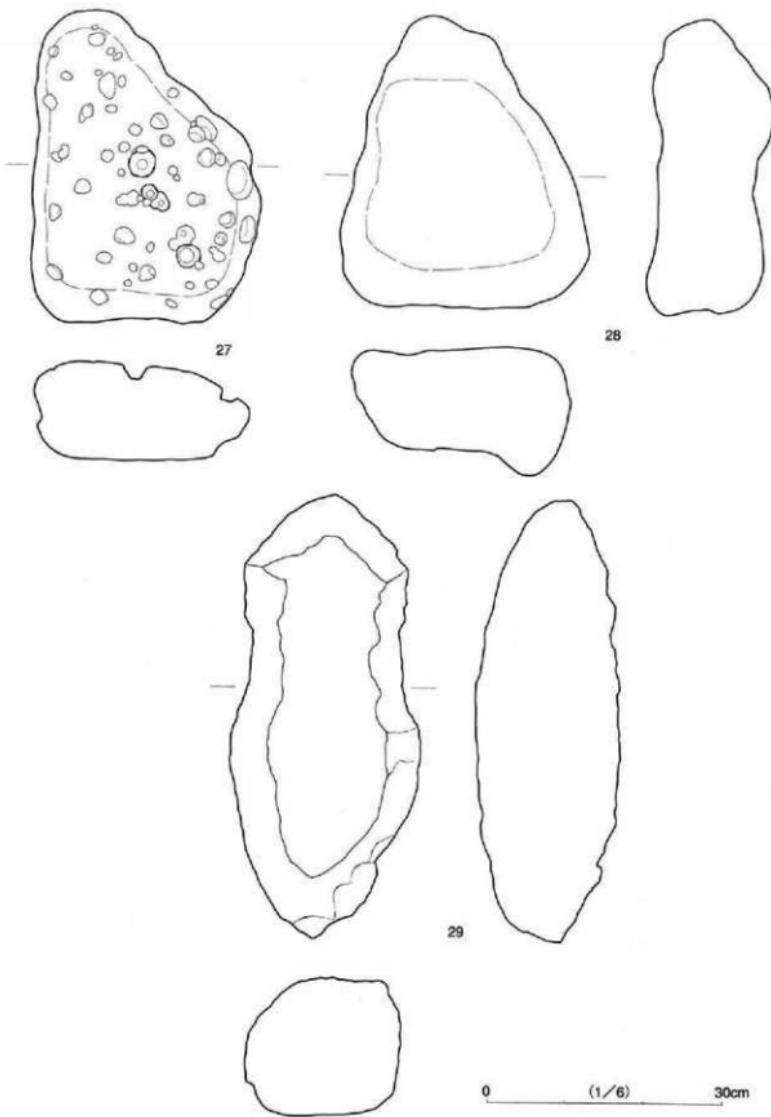


0 (1/4) 10cm



0 22~26 (1/3) 10cm

第106図 出土遺物(2)



第107図 出土遺物(3)

## 25 荻野遺跡

調査目的 給水用減圧槽建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市大野字下ノ原5422他

調査期間 平成15年12月8日

調査面積 8m<sup>2</sup> (対象面積450m<sup>2</sup>)

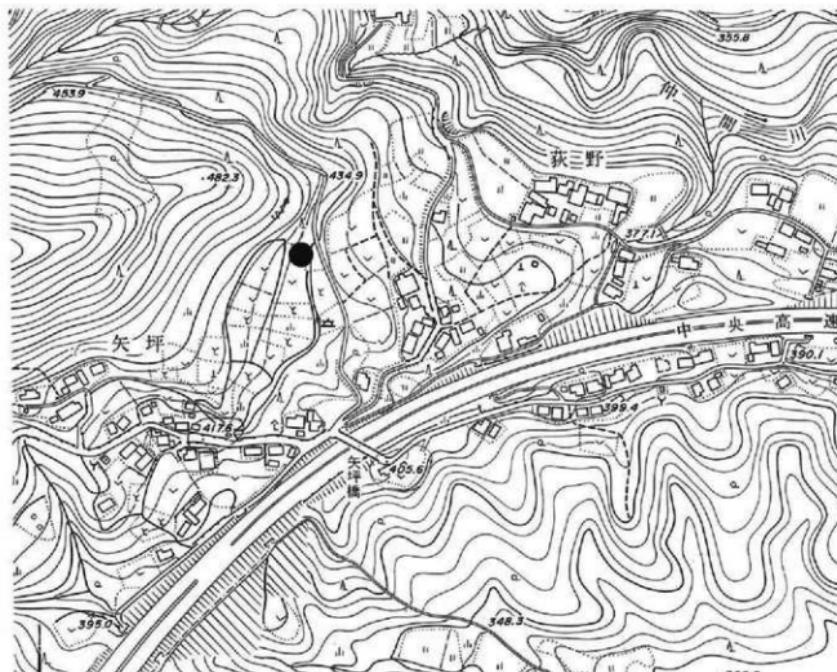
### 概要

荻野遺跡は扇山(1,137.8m)東麓の斜面地に位置し、純文・平安時代の遺物散布地である。調査地点は遺跡北端の山際に当たる。建設予定地の荒蕪地に2m四方の試掘坑を2ヵ所設定し、最深1mまで人力で掘削した。この結果、基本

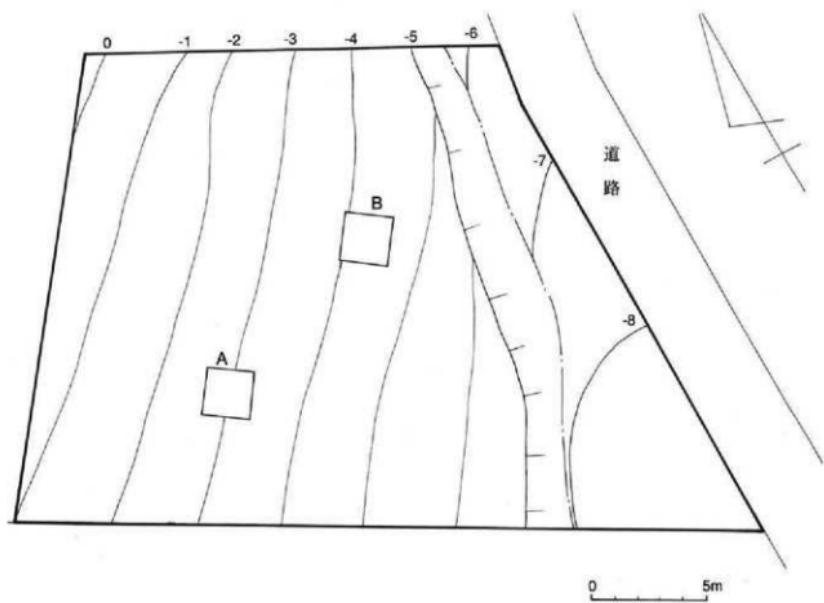
層序は表土・暗褐色土・ローム層であるが、一部で土石流による再堆積と思われる小礫・ローム塊を多数含む土層が介在する。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第108図 遺跡位置



第109図 調査地点



A
1
4

B
1
2
3
4

茨野道路土層  
 1 表土  
 2 にぶい褐色土 粘性・締まり弱い。黒色スコリア（5mm以下）・小礫を含む。  
 3 にぶい褐色土 第2層にローム塊（10cm以下）がやや多く混じる。  
 4 暗褐色土 粘性・締まりやや強い。橙色スコリア（5mm以下）・小礫・  
 ローム塊（2cm以下）をやや多く含む。



第110図 調査区平面・土層図

うえのはらあざおおみち  
26 上野原字大道地点

調査目的 分譲宅地工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字大道2391-1

調査期間 平成15年12月15日

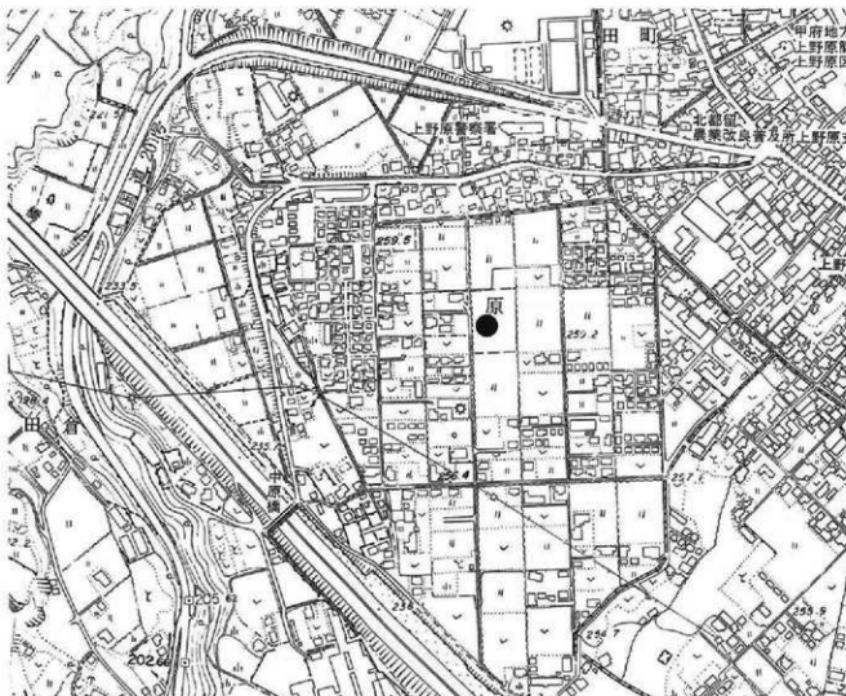
調査面積 37m<sup>2</sup> (対象面積885m<sup>2</sup>)

概要

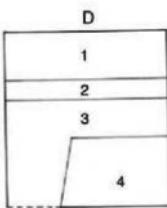
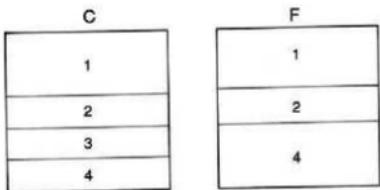
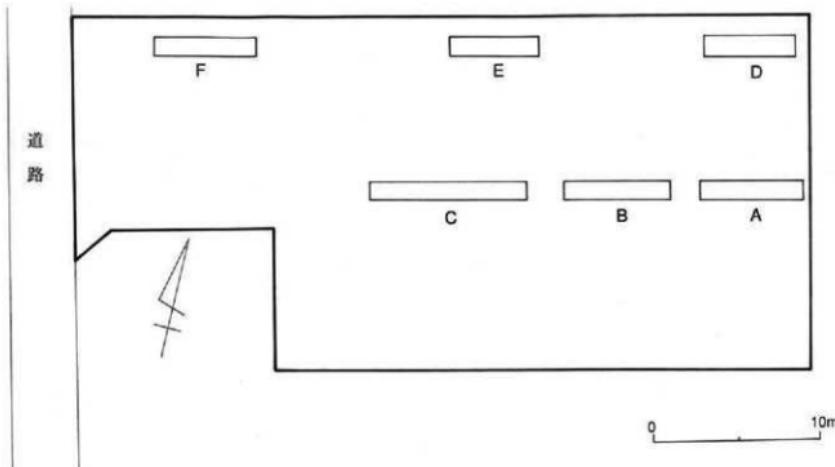
調査地点は桂川北岸の河岸段丘面に位置する。工事予定地の荒蕪地に巾1m・長さ6~10mの試掘溝を6ヶ所設定し、最深1.0mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。この結果、表土(整地層)下の客土がローム層まで達しており、土木工事による搅乱を受けていることが確認された。遺構はなく、遺物は客土中で土師器の細片1点が出土したのみであった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第111図 調査地



第112図 調査地点



上野原字大道地点土層

1 表土 整地層。砂礫・コンクリート塊を含む。

2 灰褐色土 客土。小礫を多く含む。

3 黒褐色土 客土。

4 暗褐色土 粘性・締まりやや強い。橙色スコリア (3mm以下) やや多く含む。下層ロームとの境は漸移的である。

0      1m

第113図 調査区平面・土層図

## 27 桜原字井太家地点 ゆずりはらあざい たや

### 調査目的 県道桐原・藤野線道路改良工事に伴う試掘調査

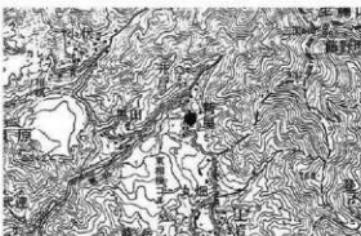
調査地 上野原市桐原字井太家3966他

調査期間 平成16年6月16日

調查面積 20m<sup>2</sup> (對象面積760m<sup>2</sup>)

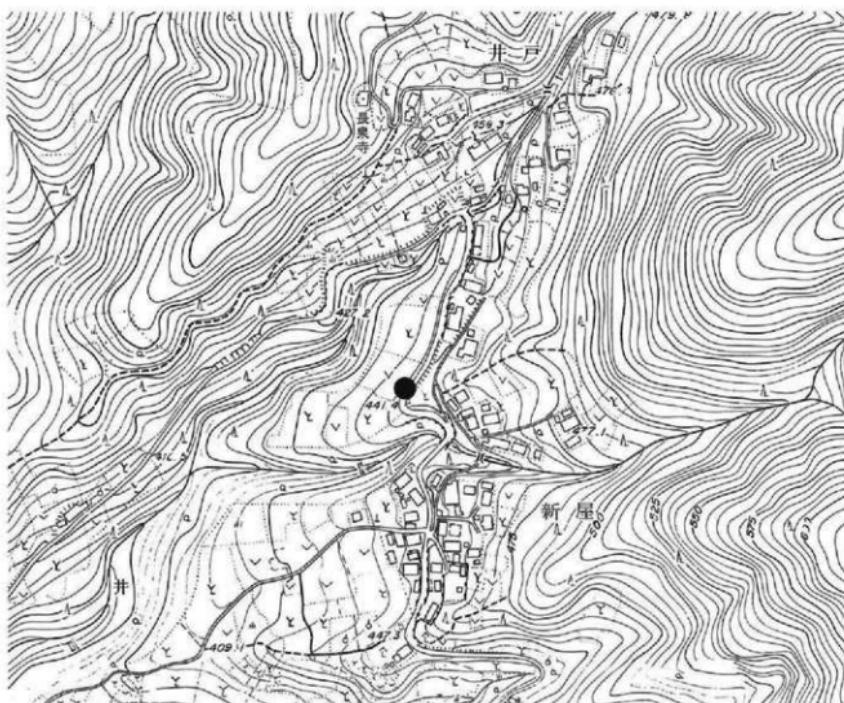
概要

調査地点は生藤山（990.3m）南西麓の緩斜地で、県道棚原・藤野線西側の畑地に位置する。工事予定地のうち北側の盛土範囲を除いた南側斜面地に2m四方の試掘坑を5ヶ所設定し、最深0.8mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。

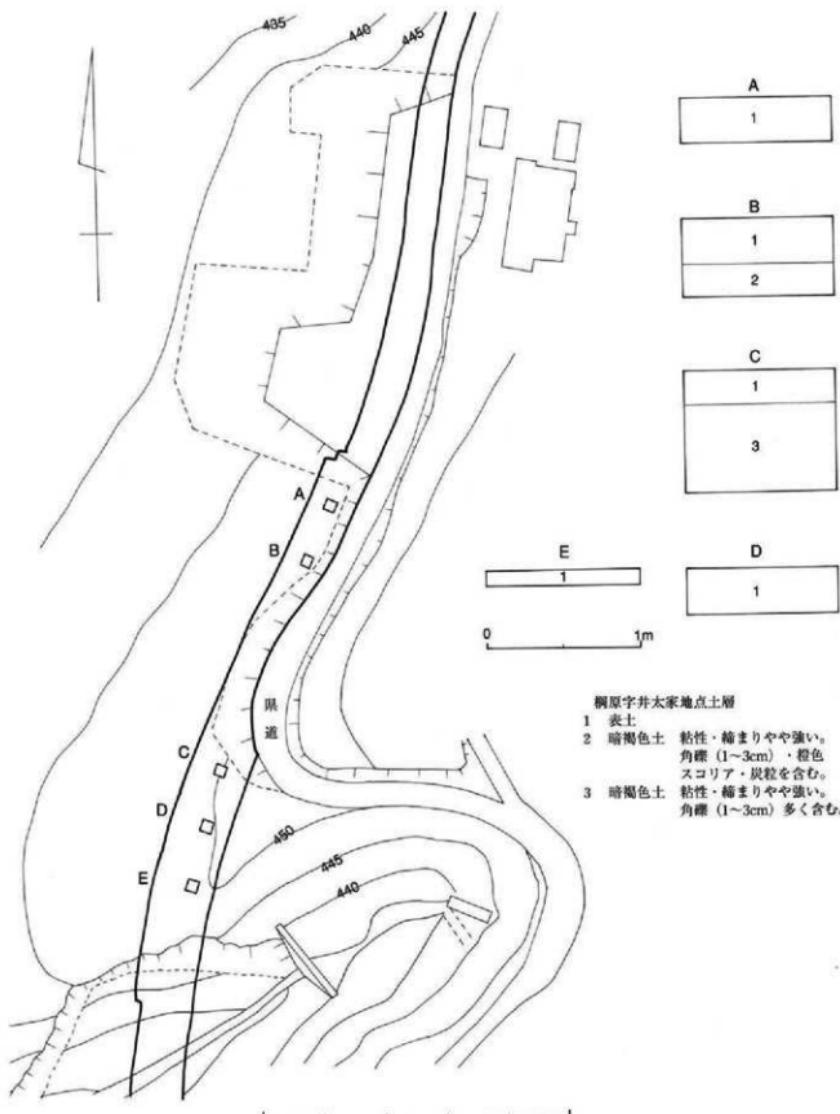


第114図 調査地

この結果、概ね表土直下がハードローム層で、一部に暗褐色土が介在していた。構構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第115図 調査地点



第116図 調査区平面・土層図

うえのはらあざさわ  
28 上野原字エビ沢地点

調査目的 分譲宅地工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字エビ沢360他

調査期間 平成16年9月22日

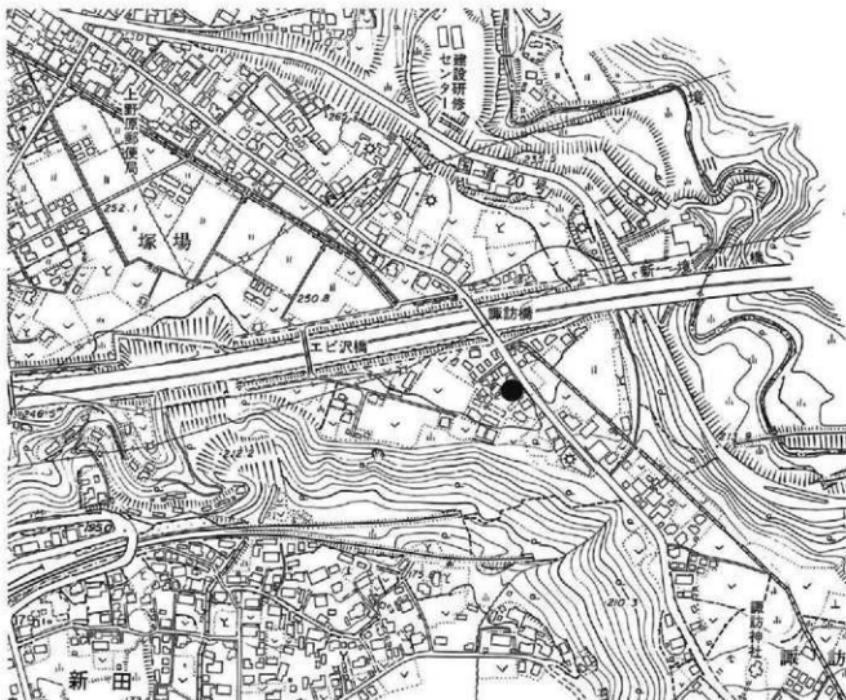
調査面積 16m<sup>2</sup> (対象面積1,240m<sup>2</sup>)

概要

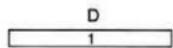
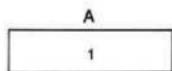
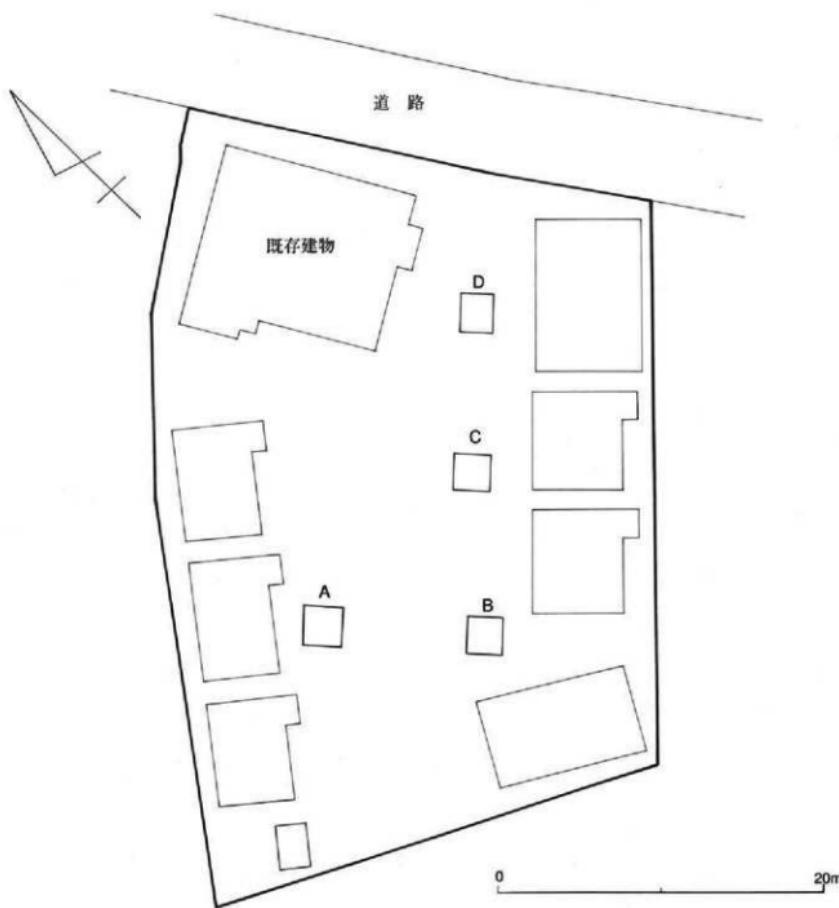
調査地点は桂川北岸の河岸段丘面で、県道吉野・上野原停車場線の源訪橋南側の宅地に位置する。工事予定地のうち既存の建物を除く範囲に2m四方の試掘坑を4ヶ所設定し、最深0.4mまで重機掘削機を併用して掘り下げた。この結果、表土(整地層)直下がハードローム層で、土木工事による搅乱を受けていることが確認された。遺構・遺物は確認されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第117図 調査地



第118図 調査地点



上野原字エビ沢地点土層  
1 表土 整地層。砂礫・コンクリート塊を含む。

0 1m

第119図 調査区平面・土層図

うえの はらあざしたしんまち  
29 上野原字下新町地点

調査目的 分譲宅地工事に伴う試掘調査

調査地 上野原市上野原字下新町654他

調査期間 平成17年8月18日

調査面積 44m<sup>2</sup> (対象面積1,433m<sup>2</sup>)

概要

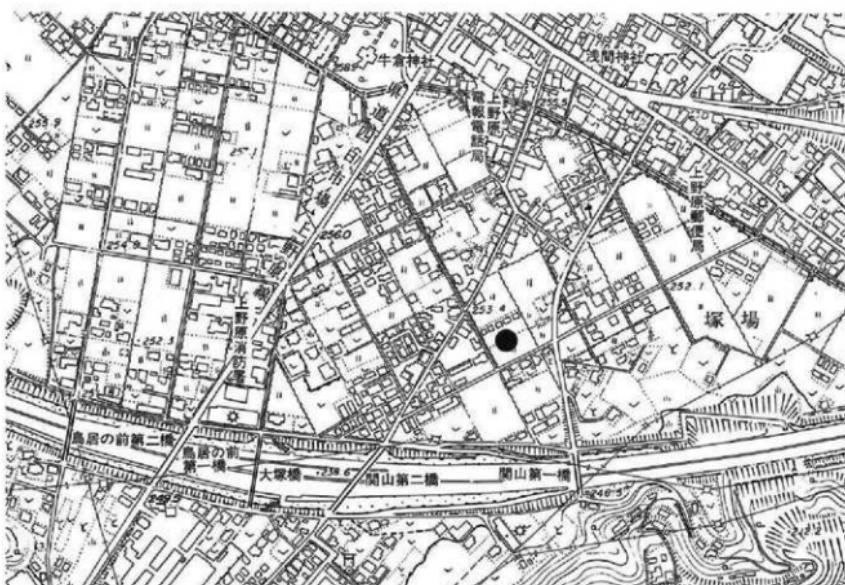
調査地点は上野原市街地にあり、中央自動車道上野原ICの北約70mに位置する。地形はほぼ平坦である。近年まで木造平屋造アパートが立ち並ぶ住宅地であったが、調査時は雑草が茂る空き地となっていた。工事予定地に巾1m・長さ4~10mの試掘溝を8ヶ所設定し、最深1mまで重機掘削機を併用し掘り下げた。

調査の結果、表土(整地層)下に客土があり、土木工事による擾乱を受けていることが確認された。遺構は確認されず、遺物はローム層上の暗褐色土中で縄文時代中期後半~後期前半の土器片が数点出土した。遺構・遺物の分布が希薄であることなどから、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。

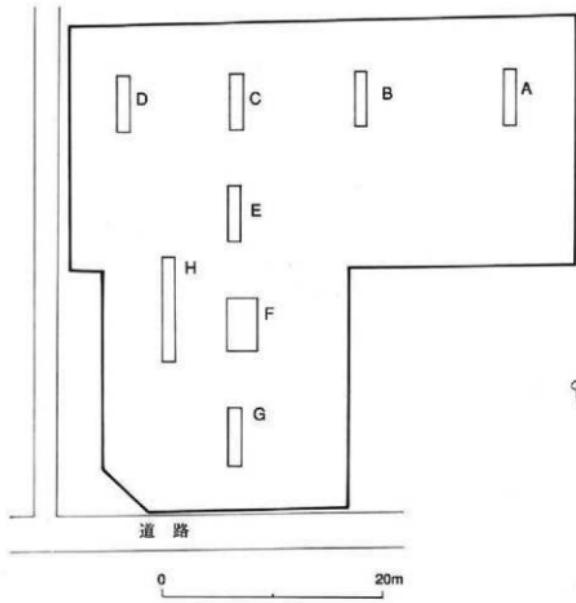
土器(第122図)は深鉢で幅広の沈線文が施される。胎土に黒雲母や赤色・白色の砂粒を含む。色調は暗褐色で、器厚は最厚1.4cm。後期前半・堀之内式期に比定される。Fトレンチ第4層出土。



第120図 調査地



第121図 調査地点



A
1
2
3

C
1
2
3
4

0 (1/3) 10cm  
出土土器

G
1
2
3
4

H
1
2
4

0 1m

上野原字下新町地点土層  
 1 表土 整地層。コンクリート塊・シルト質粘土を含む。  
 2 灰褐色土 客土。練まり強い。  
 3 黒褐色土 粘性・練まりやや強い。黒色・橙色スコリア (1~2mm) をやや多く含む。  
 4 暗褐色土 粘性・練まりやや強い。橙色スコリア (5mm 以下) を多く含む。下層ロームとの境は漸移的である。

第122図 調査区平面・土層図、出土遺物

## 30 ひがしく 東区遺跡

調査目的 個人住宅建設に伴う試掘調査

調査地 上野原市鶴島字反保1855-3

調査期間 平成17年9月2日

調査面積 12m<sup>2</sup> (対象面積315m<sup>2</sup>)

### 概要

東区遺跡は桂川南岸の河岸段丘面に位置する。縄文時代中期の遺物散布地で、これまでに敷石遺構や土器片・石棒・石皿・打製石斧などの遺物が出土しているが、発掘調査の事例がないため詳細は不明である。今回の調査地点は遺跡の西縁

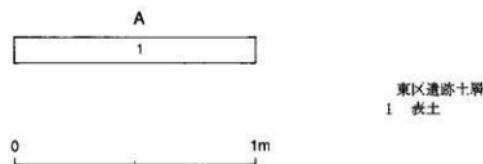
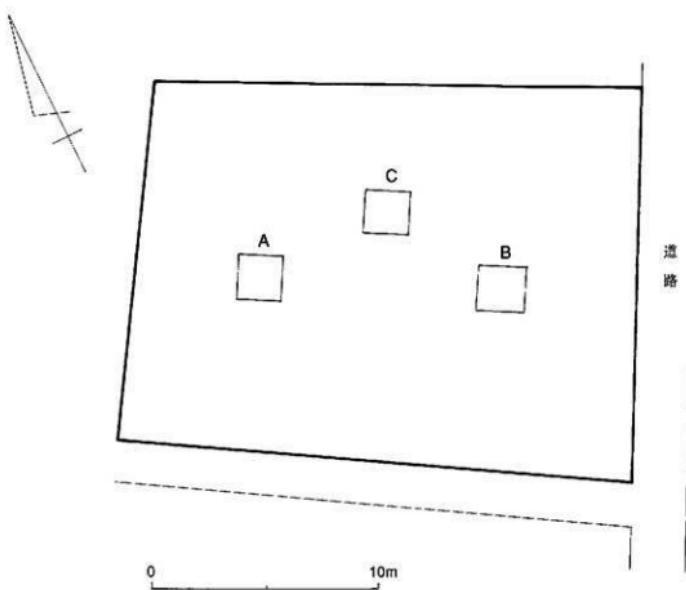
に位置する。工事予定地に2m四方の試掘坑を3ヶ所設定し、重機掘削機を併用し振り下げる。この結果、薄い表土の直下がハードローム層で、遺構・遺物は検出されなかった。このため、建設予定地に遺跡の存在する可能性は低いものと判断された。



第123図 遺跡位置



第124図 調査地点



第125図 調査区平面・土層図

# 図 版

図版 1



関山遺跡第1地点



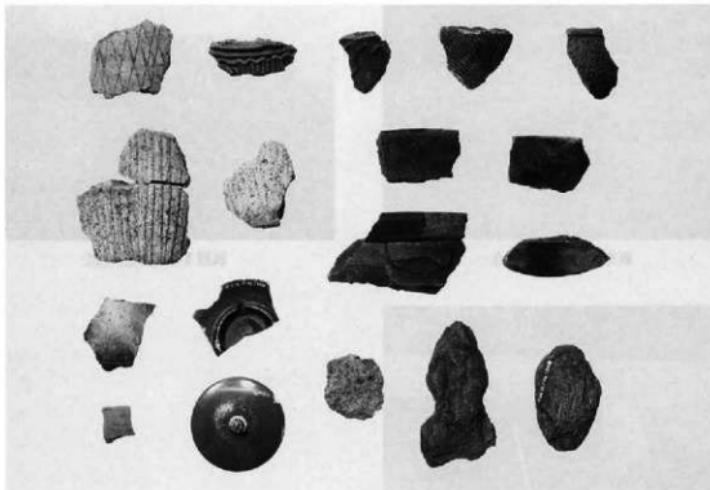
関山遺跡第2地点



野田尻I遺跡調査地点



野田尻I遺跡調査状況



野田尻I遺跡出土遺物

図版 2



大野字上ノ久保地点



樋原字向山地点 B トレンチ



田代遺跡第1地点



田代遺跡第2地点



樋原Ⅰ遺跡調査地点



樋原Ⅱ遺跡調査地点



塙場古墳群調査地点



沢渡Ⅱ遺跡調査地点



桐坪遺跡調査区南端



新井遺跡調査地点



A トレンチ遺構確認状況



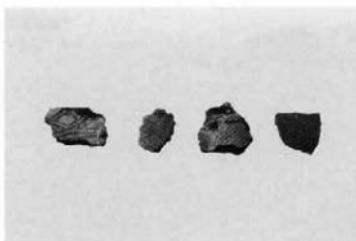
原・郷原遺跡全景



原・郷原遺跡 I トレンチ遺構確認状況



原・郷原遺跡第2地点



原・郷原遺跡第2地点出土土器

図版 4



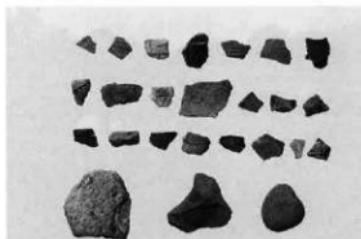
根本山遺跡第1地点



I トレンチ遺構確認状況



1号土坑



出土遺物



根本山遺跡第2地点



根本山遺跡第3地点土層断面



根本山遺跡第4地点



黒ノ木遺跡調査地点



西ノ原古墳調査地全景



西ノ原古墳石室全景

図版 6



奥壁



石室全景



石室床面



閉塞部付近



西ノ原古墳第Ⅱ次 A 地点



西ノ原古墳第Ⅱ次 B 地点



山風呂遺跡 B トレンチ土坑確認状況



用竹神戸遺跡調査地点



大間々遺跡調査地点



大間々遺跡堅穴住居確認状況



中群遺跡調査地点



東大野遺跡調査地点

図版 8



裏大越路遺跡調査地点



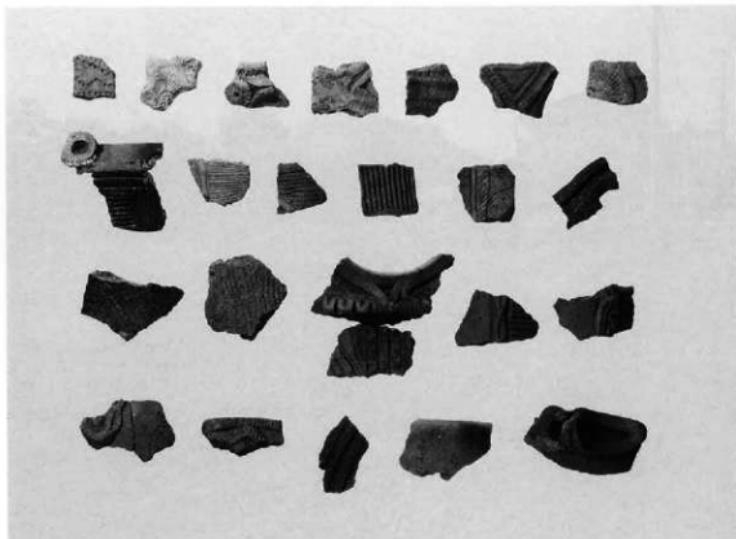
同 調査状況



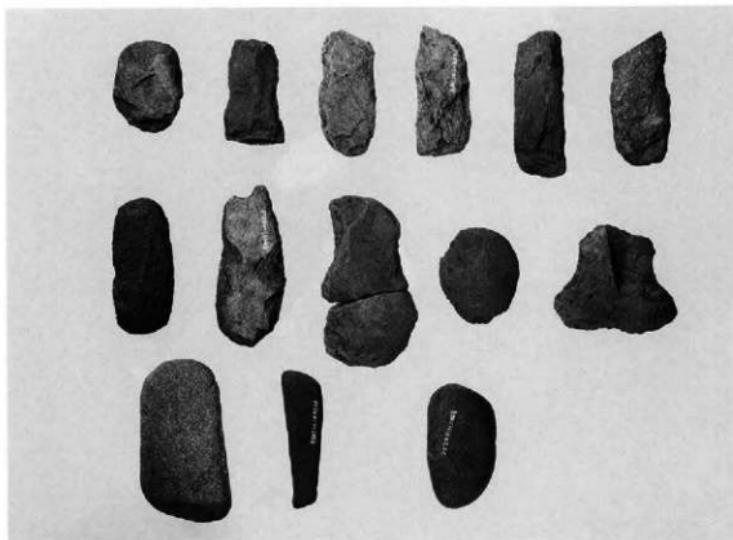
陥し穴状土坑全景



寺畠遺跡調査地点



寺畠遺跡出土土器



寺畠遺跡出土石器

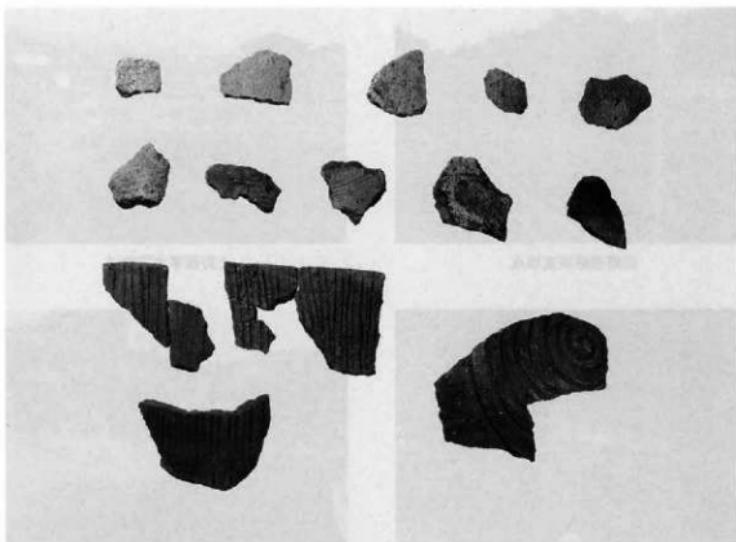
図版10



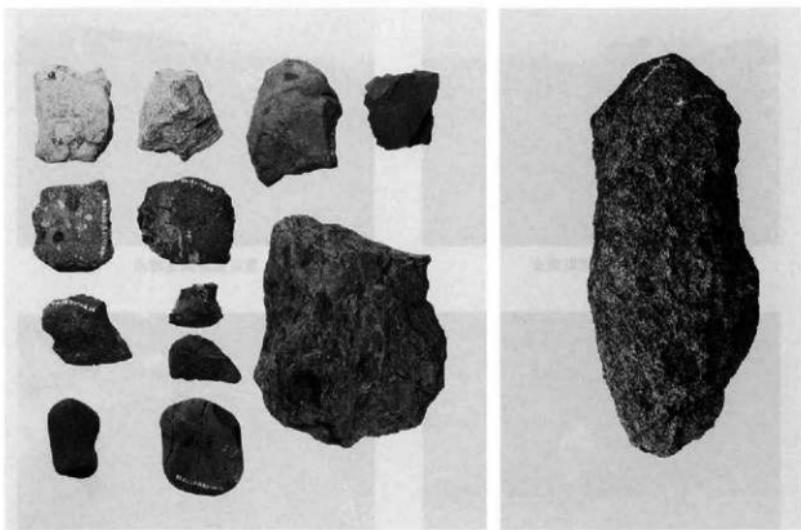
当月遺跡調査地点



当月遺跡配石・焼土址検出状況



当月遗址出土土器



当月遗址出土石器

図版12



荻野遺跡調査地点



上野原字大道地点



梶原字井大家地点



上野原字エビ沢地点



上野原字下新町地点



東区遺跡調査地点



牧野遺跡第1地点



牧野遺跡第2地点

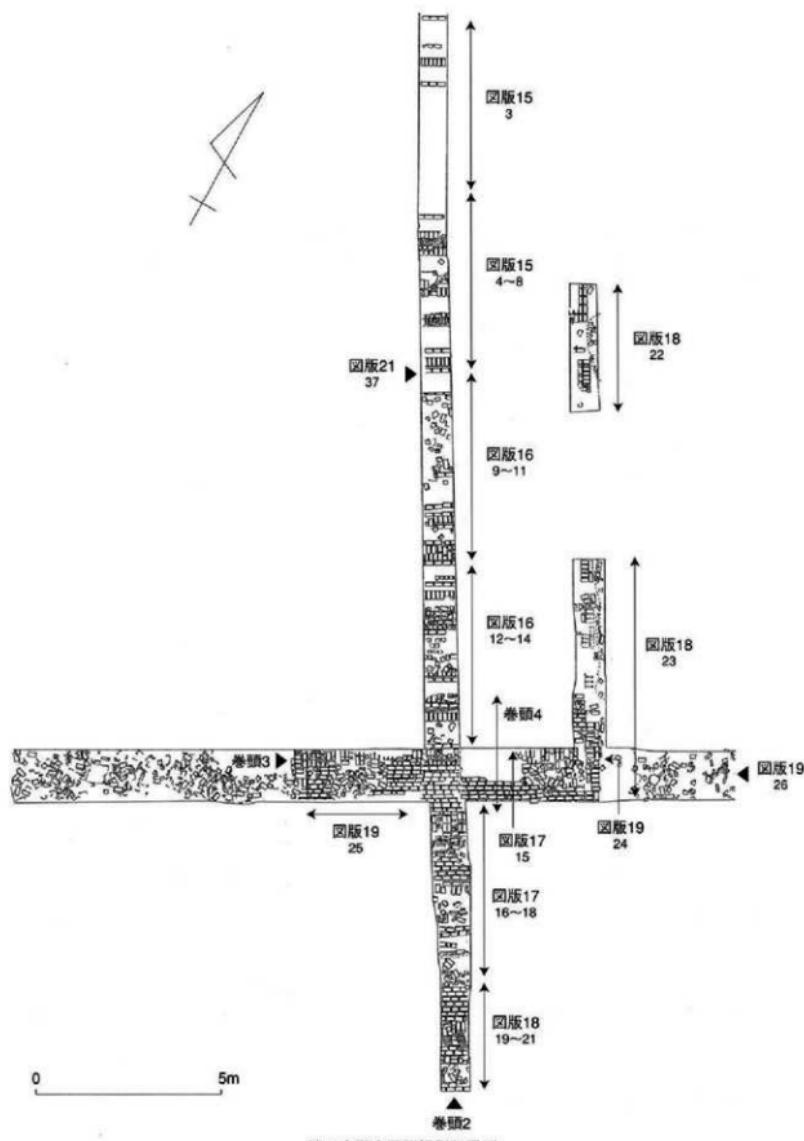


1 牧野遺跡遠景（北東から）  
写真中央の白い建物が第3地点。左側に桂川が流れる。



2 第3地点煉瓦窯発見地近景（南から）

図版14





3 トレンチ北側（南から）



4 窯上段（南から）



5 窯最上段（西から）



6 窯上段（西から）



7 煉瓦配置状況（南から）



8 煉瓦配置状況（南から）

図版16



9 窯上段（南から）



10 同 近景（西から）



11 同 近景（西から）



12 窯中段（南から）



13 同 近景（西から）



14 同 近景（西から）



15 基底部断面



16 窯下段（南から）



17 同 近景（西から）



18 同 近景（西から）

図版18



19 窯最下段（南から）



20 同 近景（西から）



21 同 近景（南西から）



22 窯東端（南から）



23 窯東側（南から）



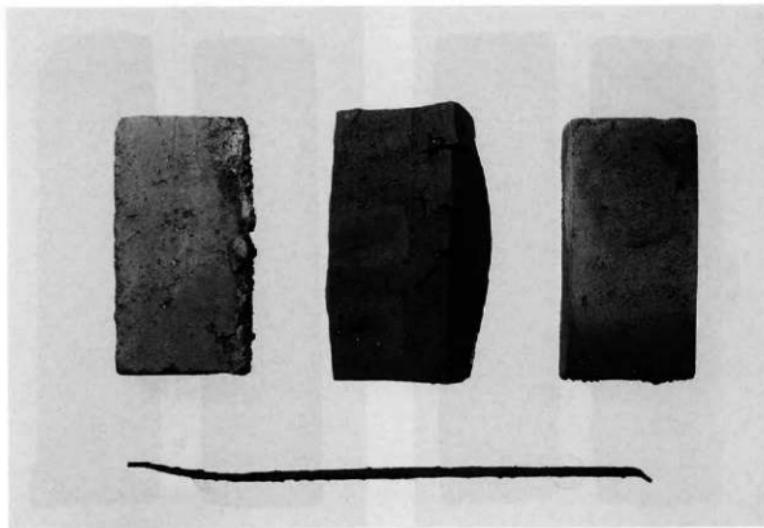
24 窯東端（東から）



26 窯中段（東から）

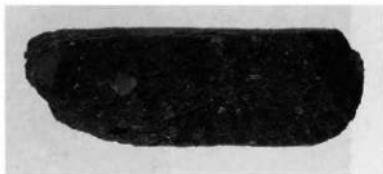
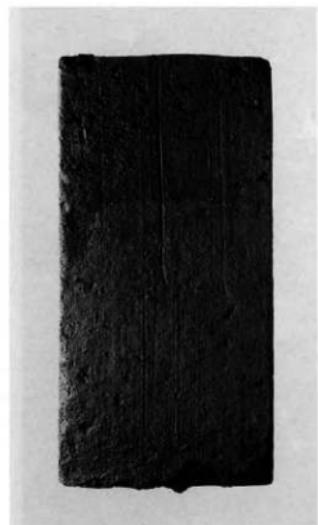


25 窯中段の床面状況（南から）



出土した煉瓦と鉄製品

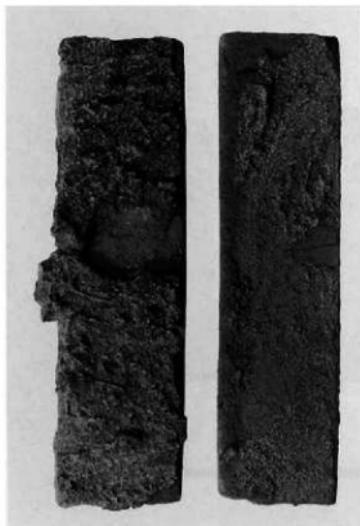
図版20



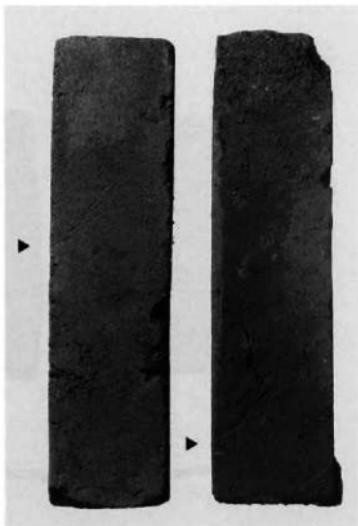
未焼成煉瓦の断面



刻 印



粘土塗布面



繊維圧痕

報告書抄録

フリガナ 書名	ヤマナシケンウエノハラシシナイセキハックツチョウサホウコクシヨ 山梨県上野原市市内遺跡発掘調査報告書			
シリーズ	上野原市埋蔵文化財調査報告書第1集			
編著者名	小西直樹			
編集・発行	上野原市教育委員会			
所在地	〒409-0112 山梨県上野原市上野原3832 電話0554-62-3111			
印刷所	株式会社印刷			
発行日	平成18年(2006)3月31日			
遺跡名	所在地	経緯度	調査期間	主な時代、遺構・遺物
野田尻I遺跡	上野原市野田尻378他	北緯35°38'5" 東経139°3'47"	940919~941001	縄文時代、堅穴住居址・土器・石器
猿原II遺跡	上野原市新田22-1他	北緯35°36'59" 東経139°7'38"	961204~970128	奈良時代、堅穴住居址・土器
新井遺跡	上野原市上野原4511他	北緯35°38'5" 東経139°6'24"	970918~970922	平安時代、堅穴住居址・土器
原・郷原遺跡	上野原市西原4666他	北緯35°42'31" 東経139°0'56"	971006~971013	縄文時代、散石住居址・配石・土器・石器
牧野遺跡	上野原市四方津407他	北緯35°36'56" 東経139°5'29"	001102~001215	縄文時代、土器・石器。 明治時代、煉瓦焼成棧り窯・煉瓦・鉄製品
根本山遺跡	上野原市上野原1364-1他	北緯35°37'34" 東経139°7'5"	981002~981113	縄文時代、土器・石器。 時代不明、土坑
西ノ原古墳	上野原市大野5372	北緯35°37'56" 東経139°2'45"	990426~990622	古墳時代、古墳石室
大間々遺跡	上野原市上野原3832-1他	北緯35°37'47" 東経139°6'31"	001030~001106	平安時代、堅穴住居址・土器
裏大越路遺跡	上野原市上野原7806他	北緯35°38'38" 東経139°7'21"	030303~030306	縄文時代、陥し穴状土坑・土器・石器
寺畠遺跡	上野原市上野原4014-7他	北緯35°37'54" 東経139°6'25"	030916~030918	縄文時代、遺物集中部・土器・石器 古代以降、土坑。
当月遺跡	上野原市四方津979-1他	北緯35°36'47" 東経139°5'3"	030929~031001	縄文時代、配石・焼土址・土器・石器

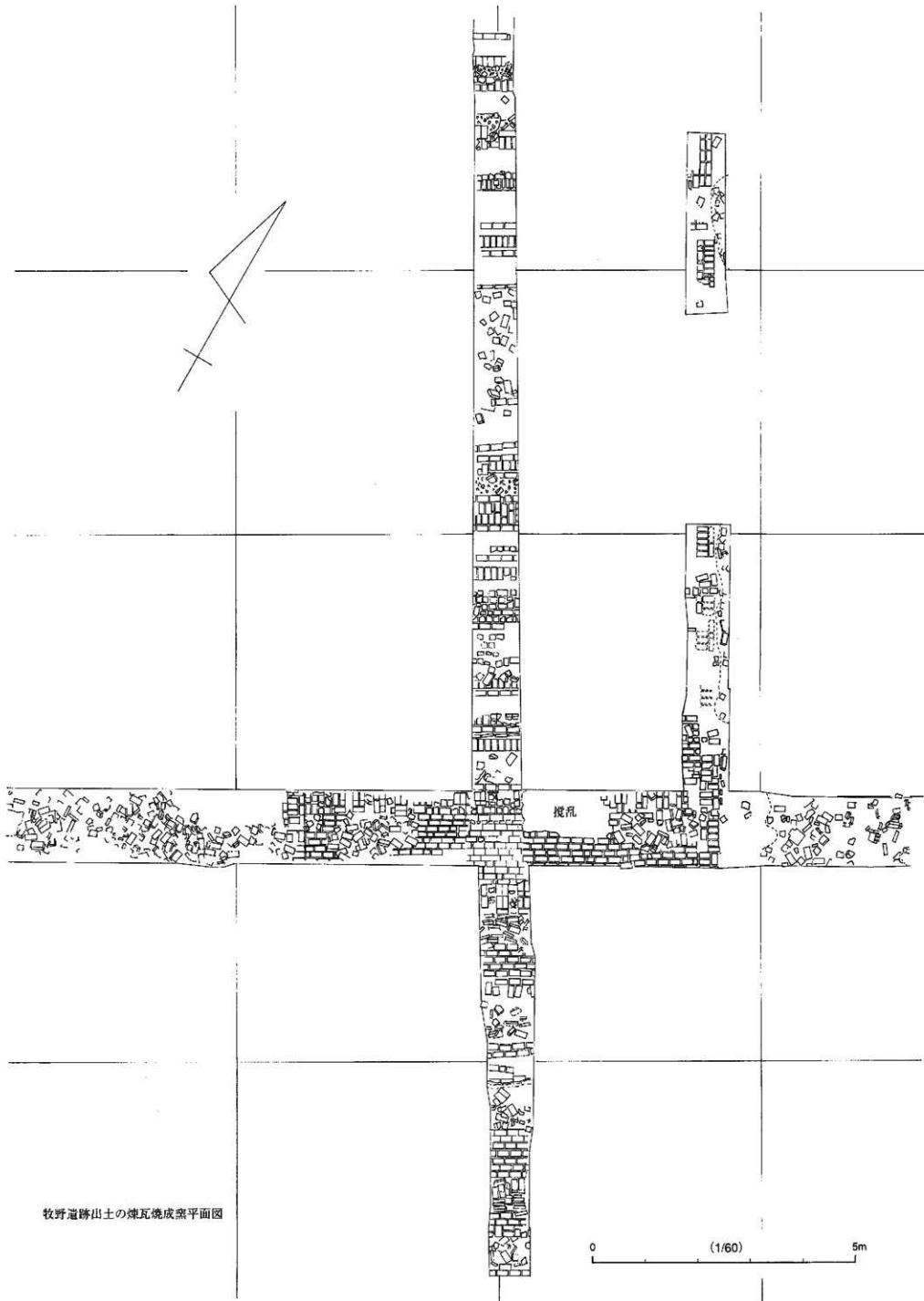
---

上野原市埋蔵文化財調査報告書 第1集  
山梨県上野原市 市内遺跡発掘調査報告書

平成18年（2006）3月31日発行

編集・発行 上野原市教育委員会

---



牧野道跡出土の煉瓦焼成窯平面図

0 (1/60) 5m

